

下柳 A 遺跡
発掘調査報告書

1996

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

しも やなぎ
下柳 A 遺跡

発掘調査報告書

平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



下柳 A 遺跡近景（左・村山高瀬川、中央・調査区、中央奥・大岡山）

卷頭図版2



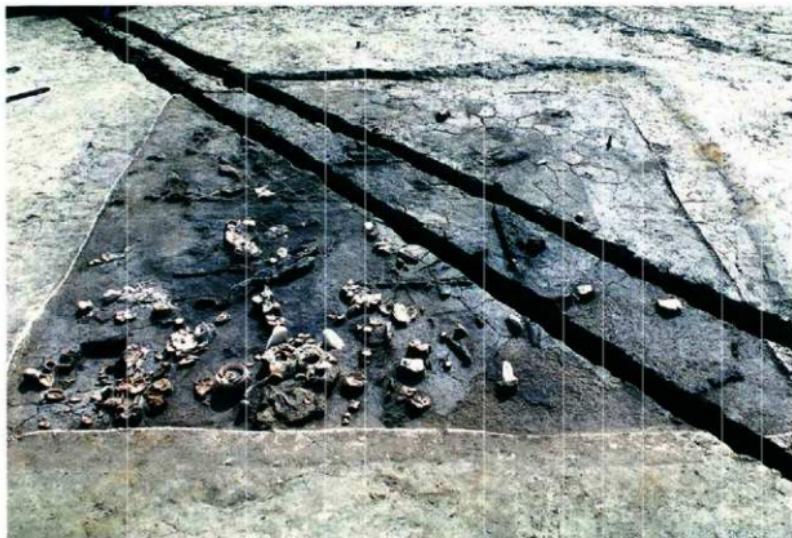
ST 1 造物出土状況（東から）



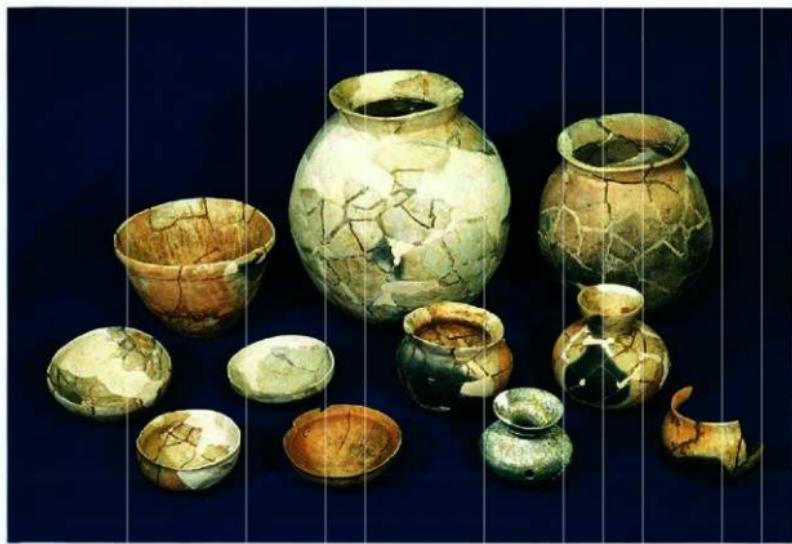
ST 1 出土造物



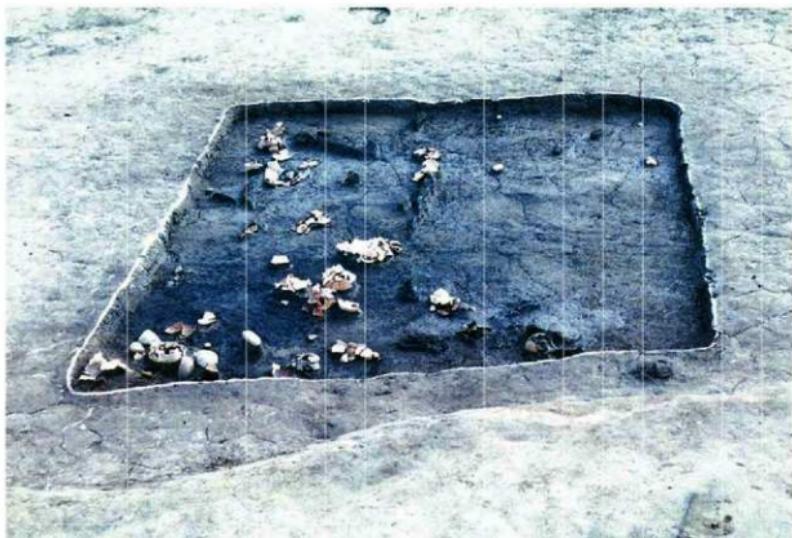
下柳 A 造跡 2 区 全景写真（空中写真）



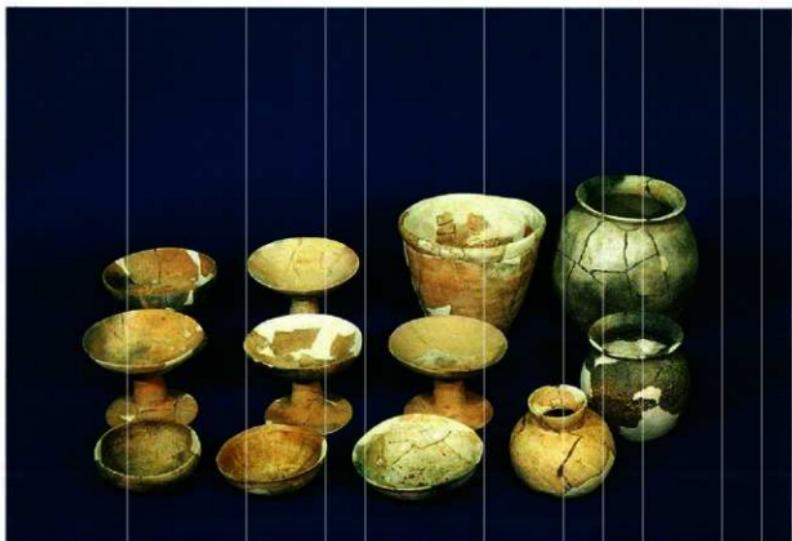
S T 2 遺物・炭化物出土状況（北東から）



S T 2 出土遺物



S T 3 遺物・炭化物出土状況（北から）



S T 3 出土遺物



醜



火鑊杵

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、下柳A遺跡の調査結果をまとめたものです。

下柳A遺跡は山形県の内陸部に位置する県都山形市の北部、天童市と隣接する大字青柳にあります。水田の広がる農業地帯であったこの地区も、流通団地の建設に始まって県道の整備、県立中央病院の移転と日々その様相を変えていきます。

この度県立保健医療短期大学（仮称）整備事業に伴い、工事に先立って下柳A遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、焼失家屋を含む古墳時代中期の竪穴住居跡21軒をはじめとして、掘立柱建物跡、畝状造構、溝跡、土塙などが検出され、古墳時代のものとしては県内で2例目の出土となる火鐵杵をはじめ、土師器や須恵器などの土器、石製品などが多数出土し、当時の生活を物語る貴重な資料を得ることができました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場清耕

例　言

- 1 本書は県立保健医療短期大学（仮称）整備事業に係る「下柳A遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県環境保健部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要領は下記の通りである。

遺跡名	下柳A遺跡（C Y G S Y-A）	遺跡番号	152
所在地	山形県山形市大字青柳字上柳		
調査期間	発掘調査 平成7年4月1日～平成8年3月31日		
	現地調査 平成7年4月24日～平成7年8月11日		
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
発掘調査・資料整理担当者			
調査第一課長	佐々木洋治		
主任調査研究員	尾形 輿典		
調査研究員	小関 真司		
嘱託職員	高柳 健一		
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県環境保健部、山形市教育委員会、東南村山教育事務所等関係機関に協力いただいた。また現地調査にあたって、微地形の理解については阿子島 功氏（山形大学教育学部）からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は尾形與典、小関真司、高柳健一が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。

現地調査における平面図等の作成については、朝日航洋株式会社に委託した。
出土木材及び種実の樹種同定については株式会社パレオ・ラボに委託した。
木製品の保存処理については益石文化財保存処理センターに委託した。
種子の保存処理については株式会社西尾製作所に委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S T…竪穴住居跡	S K…土器	S D…溝跡
E P…遺構内ピット	E L…遺構内カマド・炉	
R P…完形・一括土器	R Q…石製品	R W…木製品
P……土器	S……礫	

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 調査概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸はN-13°-Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/20、1/60、1/80で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
- (4) 遺構実測図、土層断面図中のスクリーントーン、記号は下記のとおりである。



- (5) 遺物実測図・拓影図は1/2、1/3で採録し、おのおのスケールを付した。遺物図版については1/3を基準とするが、一部任意の縮尺とした。
- (6) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (7) 遺構観察表・遺物観察表中の()内数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。
- (8) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目 次

I 調査の経緯.....	1
1 調査に至る経過.....	1
2 調査の方法と経過.....	1
II 遺跡の立地と環境.....	3
1 地理的環境.....	3
2 歴史的環境.....	3
III 遺構と遺物.....	7
1 遺構の分布.....	7
2 遺跡の層序.....	7
3 住居跡.....	8
4 捏立柱建物跡.....	56
5 その他の遺構.....	56
IV まとめと考察.....	67
報告書抄録.....	70

表

表 1 土器観察表(1).....	60
土器観察表(2).....	61
土器観察表(3).....	62
土器観察表(4).....	63
表 2 石製品・土製品・木製品等観察表.....	63
表 3 坪穴住居跡観察表(1).....	64
坪穴住居跡観察表(2).....	65
表 4 坪穴住居跡分類表.....	66
表 5 類型別土師器出土状況.....	66

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第24図 S T115出土遺物	33
第2図 調査区概要図・遺跡の立地	4	第25図 S T132竪穴住居跡及び カマド付近遺物出土状況	35
第3図 遺跡配置図・基本層序	5	第26図 S T132出土遺物	36
第4図 S D 85・86溝跡及び出土遺物 S D 5溝跡・ST 1竪穴住居跡	9	第27図 S T127竪穴住居跡	38
第5図 S T 1出土遺物(1)	10	第28図 S T120竪穴住居跡 及び出土遺物	39
第6図 S T 1出土遺物(2)・ S T 7出土遺物	11	第29図 S T120・ST127出土遺物	40
第7図 S T 1カマド付近 遺物出土状況	12	第30図 S T126竪穴住居跡	42
第8図 S T 6竪穴住居跡	13	第31図 S T128竪穴住居跡	43
第9図 S T 7竪穴住居跡	14	第32図 S T126・ST128出土遺物	44
第10図 S T 2竪穴住居跡	16	第33図 S T129竪穴住居跡 及び出土遺物	46
第11図 S T 2出土遺物(1)	17	第34図 S T 4・ST100竪穴住居跡	48
第12図 S T 2出土遺物(2)	18	第35図 S T110竪穴住居跡 及び出土遺物	49
第13図 S T 2出土遺物(3)	19	第36図 S T121・S T124 竪穴住居跡	52
第14図 S T 2出土遺物(4)	20	第37図 S T122竪穴住居跡 及び出土遺物	53
第15図 S T 2カマド付近 遺物出土状況	21	第38図 S T123竪穴住居跡 及び出土遺物	54
第16図 S T 3竪穴住居跡 及び出土遺物	23	第39図 S T125竪穴住居跡	55
第17図 S T 3出土遺物(1)	24	第40図 S B194掘立柱建物跡	57
第18図 S T 3出土遺物(2)	25	第41図 破壊構造	58
第19図 S T 3出土遺物(3)	26	第42図 遺構外出土遺物及び縄文・ 弥生・平安時代遺物	59
第20図 S T 3カマド付近遺 物出土状況	27	第43図 竪穴住居跡主軸方位と 長軸一覧	65
第21図 S T118竪穴住居跡	29	第44図 住居跡散布図	66
第22図 S T118出土遺物 及び出土遺物	30		
第23図 S T115竪穴住居跡 及び出土遺物	32		

図 版

- 卷頭図版 1 下柳A遺跡近景（左村山高瀬川、中央調査区、中央奥大岡山）
卷頭図版 2 S T 1 遺物出土状況及び
S T 1 出土遺物
卷頭図版 3 下柳A遺跡 2 区全景写真（空中写真）
卷頭図版 4 S T 2 遺物・炭化物出土状況及び
S T 2 出土遺物
卷頭図版 5 S T 3 遺物・炭化物出土状況及び
S T 3 出土遺物
卷頭図版 6 鏊及び火鑼杵

- | | |
|------------------------|---------------|
| 図版 1 下柳A遺跡遠景他 | 図版17 出土遺物(2) |
| 図版 2 調査説明会他 | 図版18 出土遺物(3) |
| 図版 3 1 区遺構検出状況他 | 図版19 出土遺物(4) |
| 図版 4 S T 1 遺物出土状況他 | 図版20 出土遺物(5) |
| 図版 5 1 区完掘状況他 | 図版21 出土遺物(6) |
| 図版 6 基本層序他 | 図版22 出土遺物(7) |
| 図版 7 S T 2 炭化材・遺物出土状況他 | 図版23 出土遺物(8) |
| 図版 8 S T 2 カマド・遺物出土状況他 | 図版24 出土遺物(9) |
| 図版 9 S T 3 遺物・炭化物出土状況他 | 図版25 出土遺物(10) |
| 図版10 S T 118 遺物出土状況他 | 図版26 出土遺物(11) |
| 図版11 E L179 検出状況他 | 図版27 出土遺物(12) |
| 図版12 S T 115 遺物出土状況他 | 図版28 出土遺物(13) |
| 図版13 S T 132 遺物出土状況他 | 図版29 出土遺物(14) |
| 図版14 S T 123 遺物出土状況他 | 図版30 出土遺物(15) |
| 図版15 故状遺構他 | 図版31 出土遺物(16) |
| 図版16 出土遺物(1) | 図版32 出土遺物(17) |

- 付録 1 「下柳A遺跡出土の大型植物化石」
2 「下柳A遺跡出土木製品の樹種同定」

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

下柳A遺跡は、青柳集落西部の水田に立地し、昭和53年県教育委員会発行の「山形県遺跡地図」には、No152として登録されている。

平成5年4月、主要地方道山形天童線道路改良に伴って県教育委員会による試掘調査が行われ、下柳A遺跡の範囲が、当初考えていたより西側に広がることが明らかになった。同年5月県教育委員会によって発掘調査が行われ、古墳時代中期に属する4軒の竪穴住居跡を検出し、土師器や須恵器などが出土した。

平成6年、山形県立保健医療短期大学(仮称)整備事業に伴って、詳細な遺跡の範囲を把握するため、県教育委員会は、同年11月試掘調査を行った。その結果、遺跡は東西600m、南北100~250mに及ぶものと推定され、工事予定地の南東部が遺跡内にかかることが明らかになった。

調査結果をもとに関係機関による協議が行われた結果、校舎等建築予定地部分については緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることになり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが県から委託を受けて発掘調査を実施することとなったものである。

2 調査の方法と経過

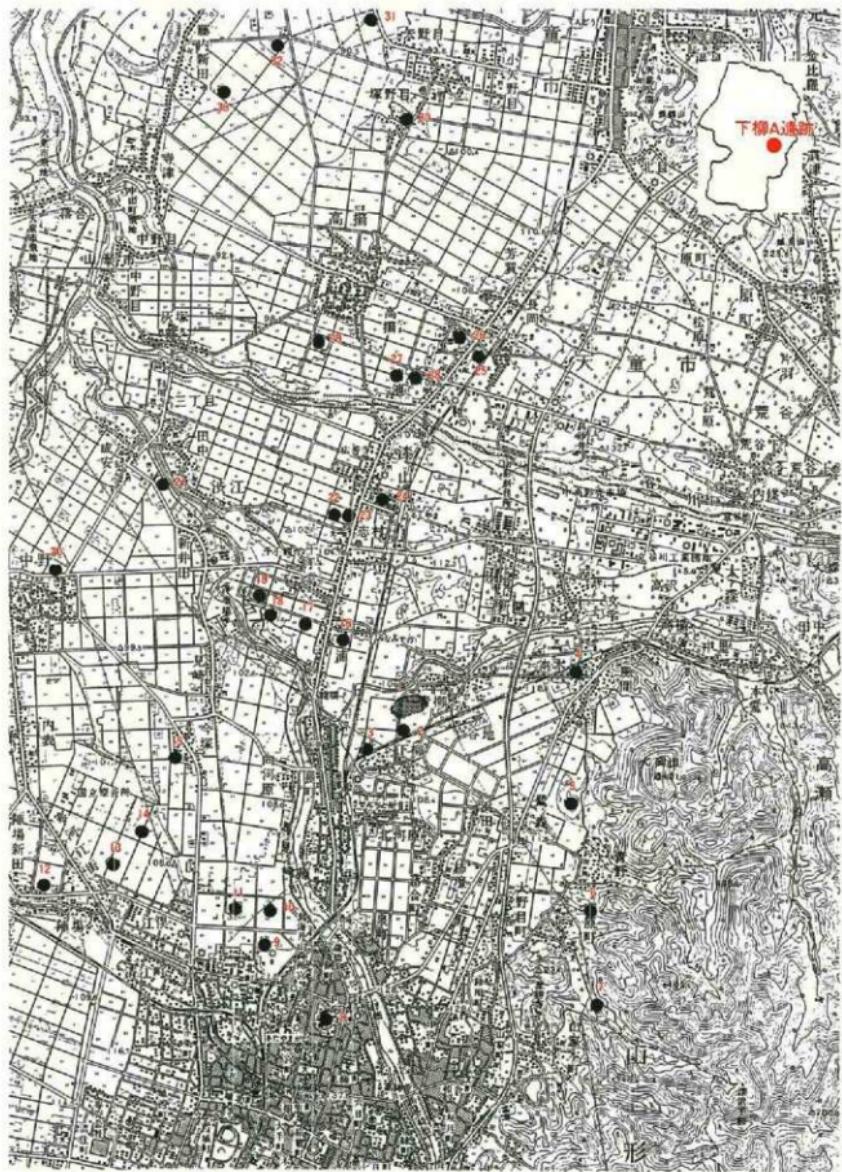
調査は、平成7年4月24日に始まり8月11日までの実質74日間行った。調査対象面積は約12万平方mに及ぶ遺跡範囲のうち、校舎等建築予定地に係る5,000平方mである。

4月24日に発掘器材の搬入と現場事務所の設営を行い、その後、関係者により安全を祈願する銘入式を行う。25日調査区を設定、西側500平方mを1区、東側4,500平方mを2区とする。遺物の出土状況や遺構検出面の深さ等を確認するために試掘を行い、その結果をもとに、26日からバックホーを用いて表土を除去し、併行して1区より面整理を行った。

調査区を覆う座標は、調査区の東側を走る、主要地方道山形天童線路肩の測量用鉛を東西軸の基準とし、南北軸をそれと直行させて、5m四方の方眼(グリッド)を設定した。東西軸は西から東にA~Gまで、南北軸は北から南に0~15まで付番して【AA-01区】のように呼称した。方眼の南北軸は、N-13°-Eを測る。

調査は、1区から開始し、面整理を繰り返しながら遺構検出・マーキングを行った。統けて2区の面整理を併行しながら、1区の遺構精査、平面図・断面図の作成、写真撮影、土層注記等記録作業にあたった。6月6日1区の空撮による写真実測を行い、その後1区の遺構登録、遺物の取り上げを行った。6月16日関係者を対象に1区の調査成果の説明会を行い、終了後1区の引き渡しを行った。その後、2区の遺構精査等を、1区と同様の作業手順で行った。8月3日2区の空撮による写真実測を行った。

8月6日に関係者を含め220名ほどの市民の参加を得て、現地説明会を開催し、8月11日現場事務所の撤収を行って現場調査を終了した。



1 下柳A遺跡 2 下柳B遺跡 3 白山宮遺跡 4 開所免古墳 5 お花山古墳群 6 小山遺跡 7 高原上ノ原古墳 8 宮町円心寺遺跡 9 西原田遺跡
 10 桜洞の木道跡 11 吉町道跡 12 阿場道跡 13 柚木木前道跡 14 岛庭町(国指定史跡) 15 今岸道跡 16 五反道跡 17 七浦古家群
 19 七瀬2号墳 20 中野町跡 21 波江道跡 22 守衛塚古墳群 23 守衛塚2号墳 24 崇崎古墳群 25 上達矢塚古墳 26 下達矢塚古墳 27 火矢塚古墳
 28 大火塚2号墳 29 高畠町道跡 30 塚野目A道跡 31 西沼田道跡 32 鶴正塚道跡 33 納田道跡

第1図 遺跡位置図(S=1:50,000)(古墳時代遺跡)

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

下柳A遺跡は山形市の北部、天童市に近接した山形市大字青柳字上柳に所在する。JR奥羽本線・羽前千歳駅の北北東約1.2kmの水田中にあり、標高は106mを測る。奥羽山脈を背に大岡山がほぼ真東に独特の姿を見せ、振り返れば北西に葉山、さらに彼方に月山を望めるこの付近は、奥羽山脈の面白山付近に源を発して西流し須川に注ぐ立谷川と、立谷川の南を西流して馬見ヶ崎川に注ぐ村山高瀬川との、二つの河川によって形成された複合扇状地の扇端部付近であり、村山高瀬川が馬見ヶ崎川に合流する地点を目前にした位置にある。

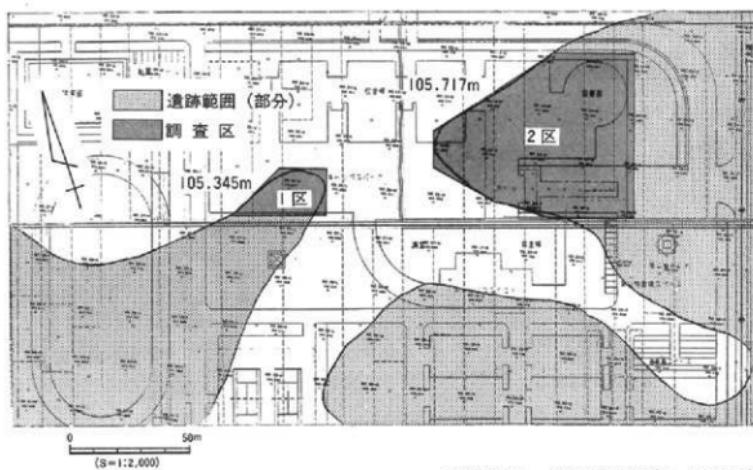
青柳の集落自体は、村山高瀬川の自然堤防上に立地しているが、本遺跡の周辺は村山高瀬川の後背湿地にあたっており、遺跡の南側にも旧河道が存在していることは航空写真等でも観察される。したがって立谷川、村山高瀬川とも扇状地を形成した河川の常で、過去に幾度となく氾濫を繰り返してきたと考えられる。ごく最近でも昭和56・57年の2年間にわたって、本遺跡のすぐ下流が洪水に見舞われている。今回の発掘調査においても氾濫によって上流から運ばれたと考えられる砂礫や、腐植物の混じった粘土だまりが発見されている。上流に遺跡などが存在すれば、それらとともに遺物などが流されて堆積することは十分考えられる地域である。

2 歴史的環境

扇状地の地形的制約なわち水を得ることのできる地域が限られていることから、立谷川扇状地や隣接する馬見ヶ崎川扇状地では、扇頂部と扇端部自然溝水地付近に遺跡が集中して立地している。

本格的な稻作が営まれる弥生時代中期ごろの遺跡は、2つの扇状地の扇端部接点付近に多く分布している。さらに古墳時代前期4世紀代になると扇頂部では鷺ノ森遺跡、扇端部では檜葉ノ木遺跡、川原田遺跡、七浦遺跡、今塚遺跡などの集落が営まれることになる。山形県埋蔵文化センターが平成5年に調査した今塚遺跡においては、旧河道に沿った自然堤防上に堅穴住居跡30軒、畝状造構2群等が検出され、内7軒の焼失家屋からは埴輪式の土器が一括して出土した。今塚遺跡の南には国指定史跡「鶴遺跡」があり、古墳時代の農耕遺跡として知られている。出土遺物は南小泉II～栗園式に及ぶが、主体は6世紀後半から7世紀代と考えられる。

古墳としては下柳A遺跡の東、扇状地の扇頂部にお花山古墳群、間所免古墳、高原上ノ原古墳群等がある。お花山古墳群は昭和57～58年に山形県教育委員会によって調査されている。木棺・石棺・箱式石棺等を持つ24基の古墳が検出されており、時期的には5世紀末葉から7世紀前半と位置付けられている。扇端部には狐山古墳、狐山2号墳、衛守塚古墳等の平地に作られた古墳が、旧羽州街道道沿いに点在している。

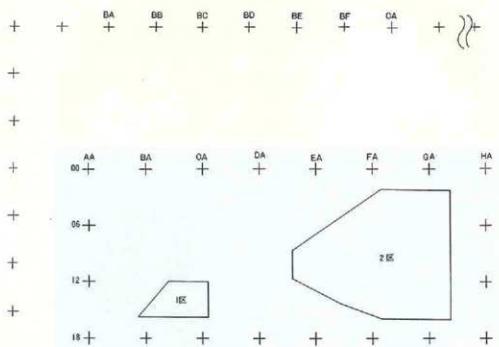


第2図の1 調査区概要図(S=1:2,000)

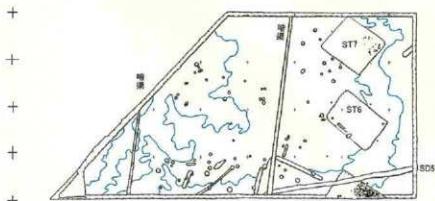
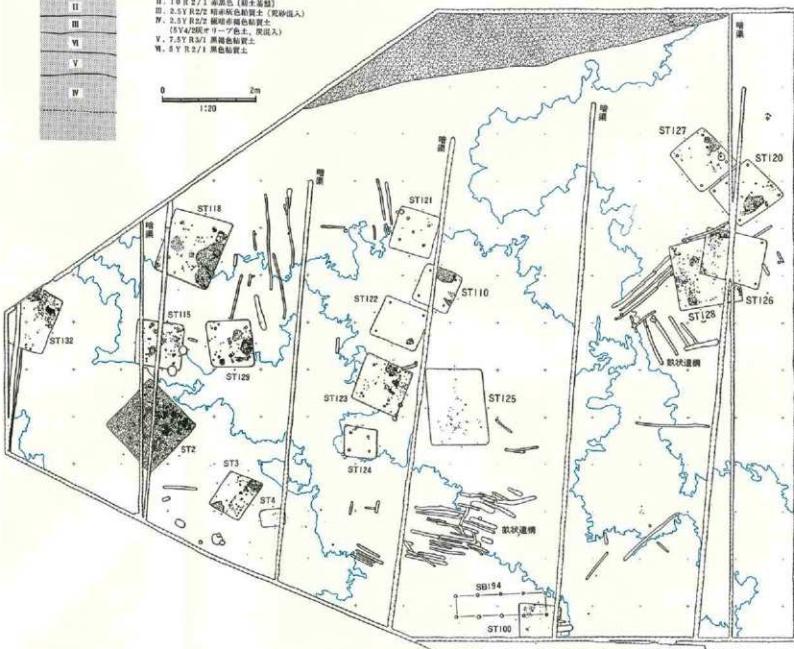


遺跡の立地 (明治34年大日本帝国陸地測量部発行 2万分の1地形図「山形」)

第2図の2 調査区概要図・遺跡の立地



- 基本層序
 I. 2.5Y R3/2 黑褐色粘土 (稍軟化)
 II. 19R 2/1 黑褐色土 (稍硬)
 III. 2.5Y R2/2 増強の黒褐色粘土 (軟化進入)
 IV. 2.5Y R2/2 增強の黒褐色粘土
 V. 19R 2/1 黑褐色粘土 (軟化)
 VI. 7.5Y R3/1 黑褐色粘土
 VII. 8Y R3/1 黑褐色質土



第3図 造構配置図・基本層序

III 遺構と遺物

1 遺構の分布

調査で検出された主な遺構は竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡1棟、溝1条、畝状遺構6群、土壙5基、ピットなどである。1、2区を通じて2時期にわたる暗渠が所々で遺構を擾乱していた。南北グリッドに平行な暗渠はヒューム管が入っており新しいものである。若干東に傾いている暗渠は土管が入ったやや古いもので、より短い間隔で検出された。

1区からは竪穴住居跡3軒、溝1条、多数のピットが検出されているが、その多くは東半分に集中している。西側に近づくにつれて遺構面の標高は低くなり地下水水面があがり泥炭状態となった。竪穴住居跡S T 1では、カマド付近に完形に近い土器が多数出土したが、南側は調査区外にかかってしまっている。そのS T 1を切る形で溝跡S D 5が東西や斜めに走っている。

2区からは竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡1棟、畝状遺構6群、土壙5基などが検出されている。竪穴住居跡は等高線に沿うように3～4箇所の地点に集中して立地しており、その間にはほとんど遺構の検出されない地点も存在する。西よりの集中地点に含まれるS T 2、S T 3は焼失家屋であり一括土器が数多く出土している。S T 132は北西側、S T 100は南側を調査区外で切られている。畝状遺構も住居跡に付随するように分布しているが、その位置と向きからおよそ6群に分けられる。掘立柱建物跡は南寄りに1棟のみ検出された。北寄りには東西や斜めに大きな落ち込みがあった。すぐ北を流れる村山高瀬川の旧河道かとも思われる。

2 遺跡の層序

立谷川、村山高瀬川複合扇状地（以下立谷川扇状地と称する）は半径6km、傾斜は扇頂部25/1000、扇央部16/1000、扇端部12/1000である。天童市側は洪積世に形成されたと考えられる古い面で開析扇状地化しているが、山形市側は地形形成期が新しく、上流部における活発な浸食作用に伴って、現在に至るまで堆積作用が継続している。

下柳A遺跡付近の地形は現在は圃場整備により、東から西に向けて少しづつ下っていく整然とした水田となっている（第2図の1）。この地形が立谷川扇状地扇端部の原地形を生かして整備されたものであることは、明治34年発行の地図によっても判るところである（第2図の2）。

下柳A遺跡の基本層序は第3図に示したとおりである。第I、II層は耕作土である。第III、IV層に遺物が含まれてくるが、砂などの混じりも多く上記の堆積作用（洪水など）の影響が顕著に見られる。特に2区東側においては、砂によって埋没している遺構や面として広がる砂層がいたるところに散見された。遺構は第V層に掘りこむ形で検出されるが地下水水面がこのあたりまできており、グライ化していくその検出作業は困難を極めた。

参考文献 米地文夫「山形の自然・地形と地質」『山形市史上巻』1973

3 住居跡

竪穴住居跡は、第3図に見るように、いくつかの住居跡が、切り合ったり密接したりして南北に連なるブロックを形成している。1区と2区で都合5つの群が認められた。以下にそれぞれの状況を述べる。

S T 1 竪穴住居跡（第4～7図 卷頭図版2 図版3・4）

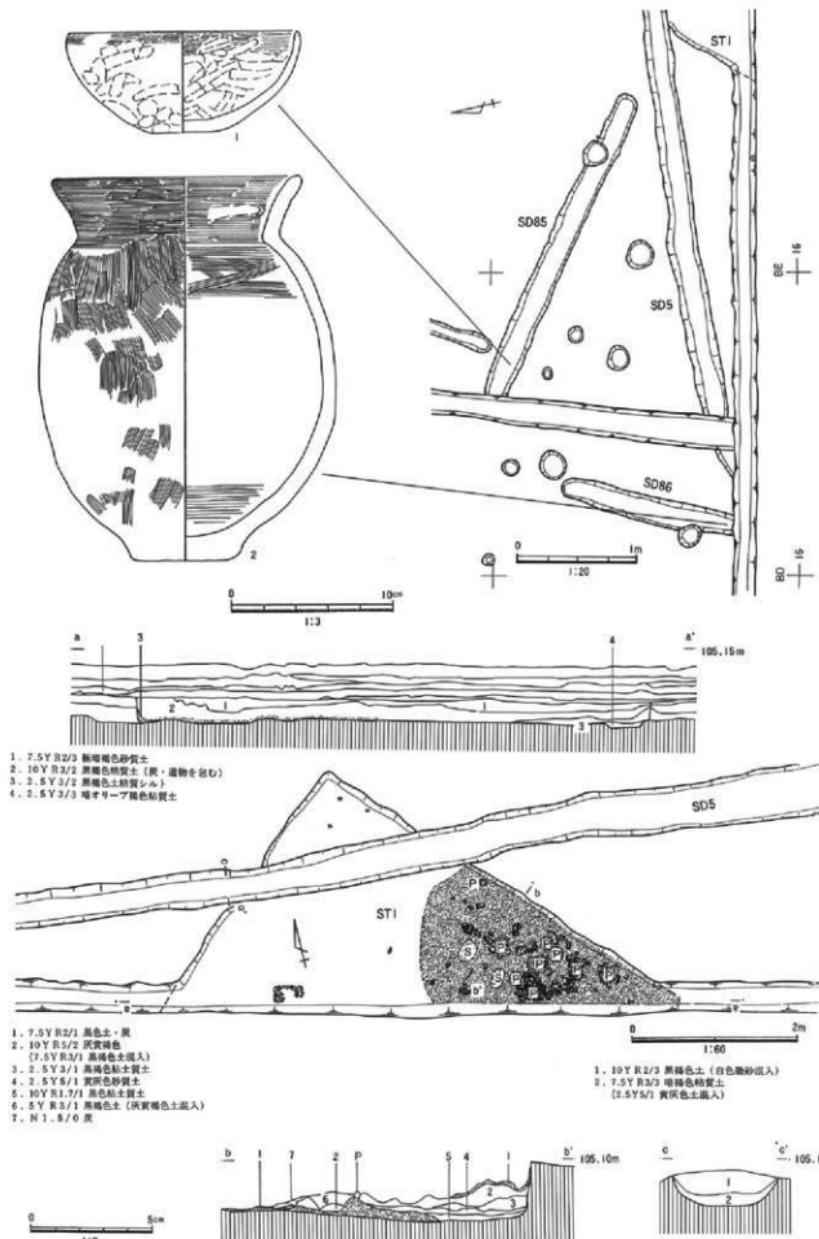
1区の東南隅部、D F - 1 5区に位置する。南半を用水路によって切られ、全容を把握することはできなかった。従って規模も不明であるが、残存部分から推定すると一辺5m前後の方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-47°-Eを測る。また、北隅部をS D 5溝跡に切られている。

覆土は確認したところで4層を数える。ただ、第2層の上面が不自然に平らになっていること、後述する「カマド石」付近の倒置された甕の胴部下半がそぎ取られたように欠損していることなどから、上部はおそらく新地整理等の際、重機などによって削平されたものと思われる。覆土第1層は極暗褐色を呈する砂質土、第2層は暗褐色粘質土となっている。基本的な覆土はこの2層で、第2層は床面直上の堆積土と考えられる。第3層とした黒褐色粘質シルトは、西壁の立ち上がり部分や東壁寄りの床面直上に少量遺存するもので、埋没開始時の堆積物と思われる。また第4層とした暗オリーブ褐色を呈する粘質土は、床面の窪みに溜まつたもので、あるいは施設前に堆積したものかとも思われる。

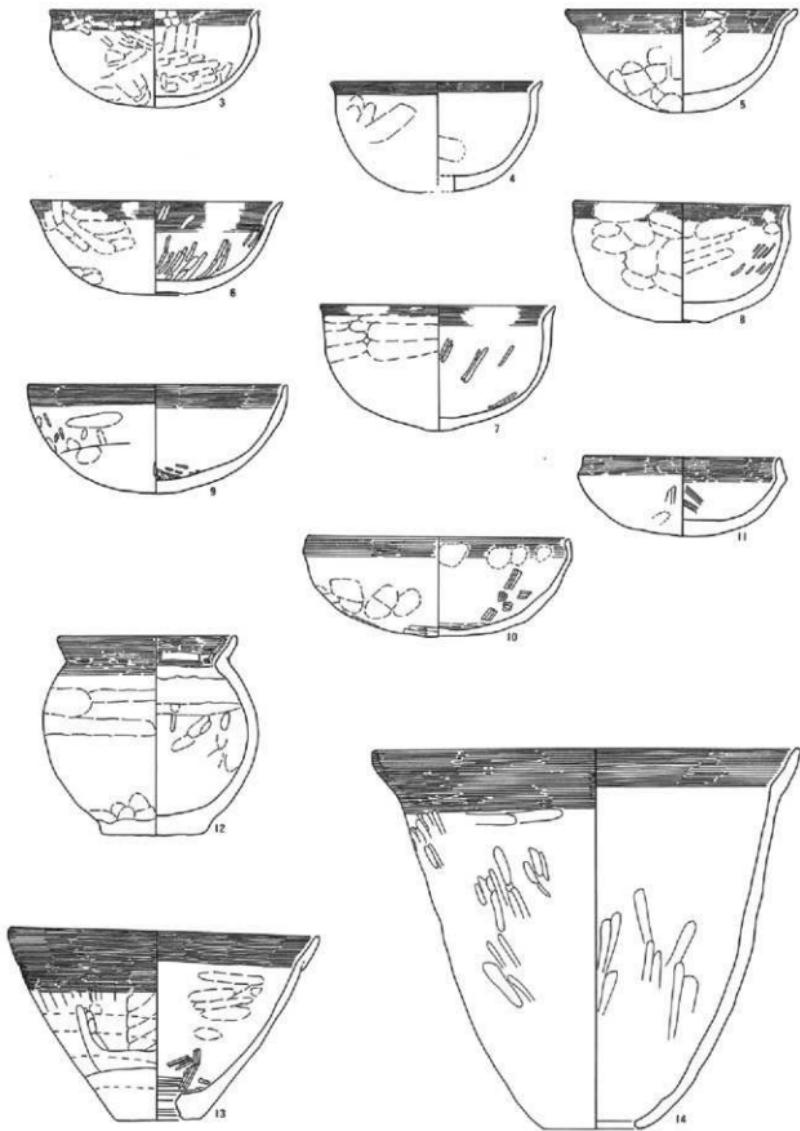
壁は、立ち上がり部分がわずかに丸味を持つが、ほとんど垂直に立ち上がっている。壁の高さは、遺存部分で30cmを測る。床面は軟らかく、検出が困難である。ただ床面直上に広く分布する炭を追究することで床面を検出することができた。柱穴は検出できなかった。

「カマド石」は、壁から1.5mほど離れたところに、長径約30cmの河原石を30cmほどの間隔で立て、そのほぼ中間壁寄りに径10cm弱の河原石を置いて三角形の領域を形成している。これらの河原石を囲むようにして炭が広く分布し、この施設で度重なる燃焼が行われたことを物語っている。当初、これらの石は、カマドの芯材であろうと思われていたが、調査の結果、炭が河原石に密着していることから、これらの石には被覆物が伴わず、この状態で使用に供されていたと判断せざるを得なくなった。このことから、3つの石と、これらが形成する三角形の領域が、煮炊き施設として機能していたものと考えられ、煮炊きの結果生じた炭をその都度掻き出して壁寄りの空間に寄せ、これを繰り返して現状のような炭の分布状況が形成されたものと考えられる。「竈」とは言えず、「炉」とも呼べない施設であるが、煮炊きのための恒常的な施設と考えられるので、記述の都合上これを「カマド石」と仮称する。袖の機能を持つ河原石をそのまま「袖石」と表現しておく。袖石の中間壁寄りに位置する小ぶりの石は、支脚的な機能を持つのであろうか。このようなカマド石の形態は、壁に作りつけとなる竈への移行形態を示すものと考えられる。

出土遺物は土師器の壺、壺、甕、瓶がある。遺物はカマド石の、壁に向かって右寄りに密集して遺存する。その配置も、日常の収納のまま埋没したかのごとき印象を受けた。

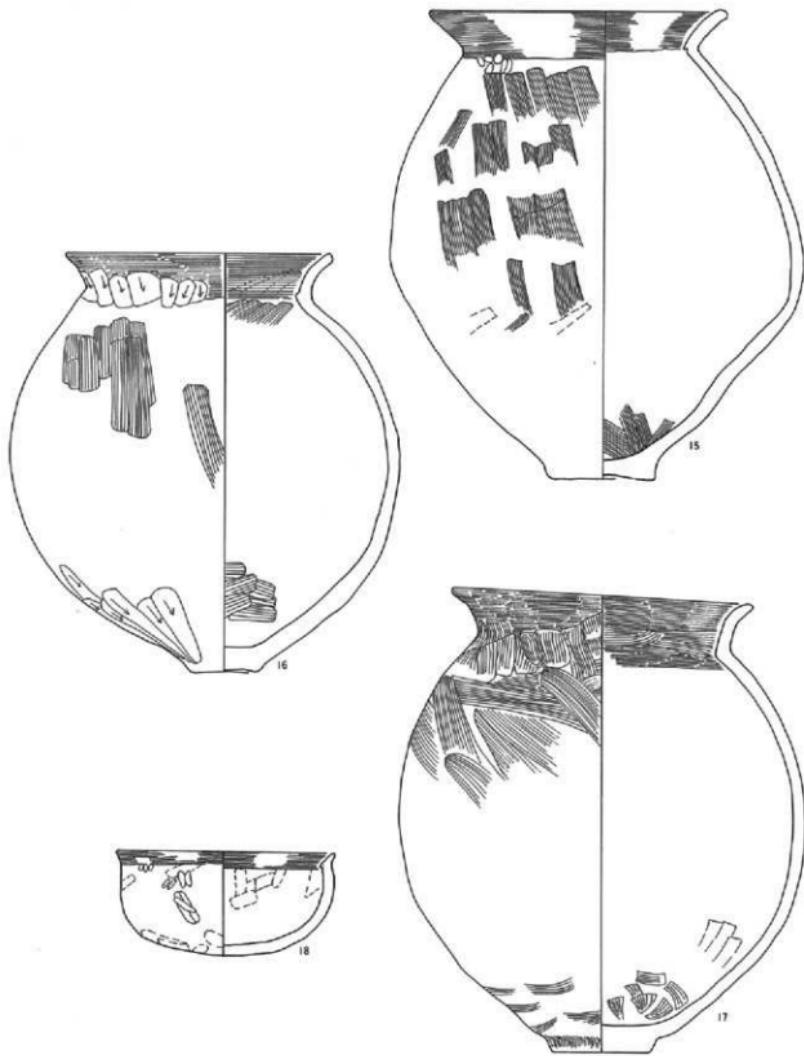


第4図 SD85・SD86溝跡及び出土遺物・SD5溝跡・ST1堅穴住住居跡



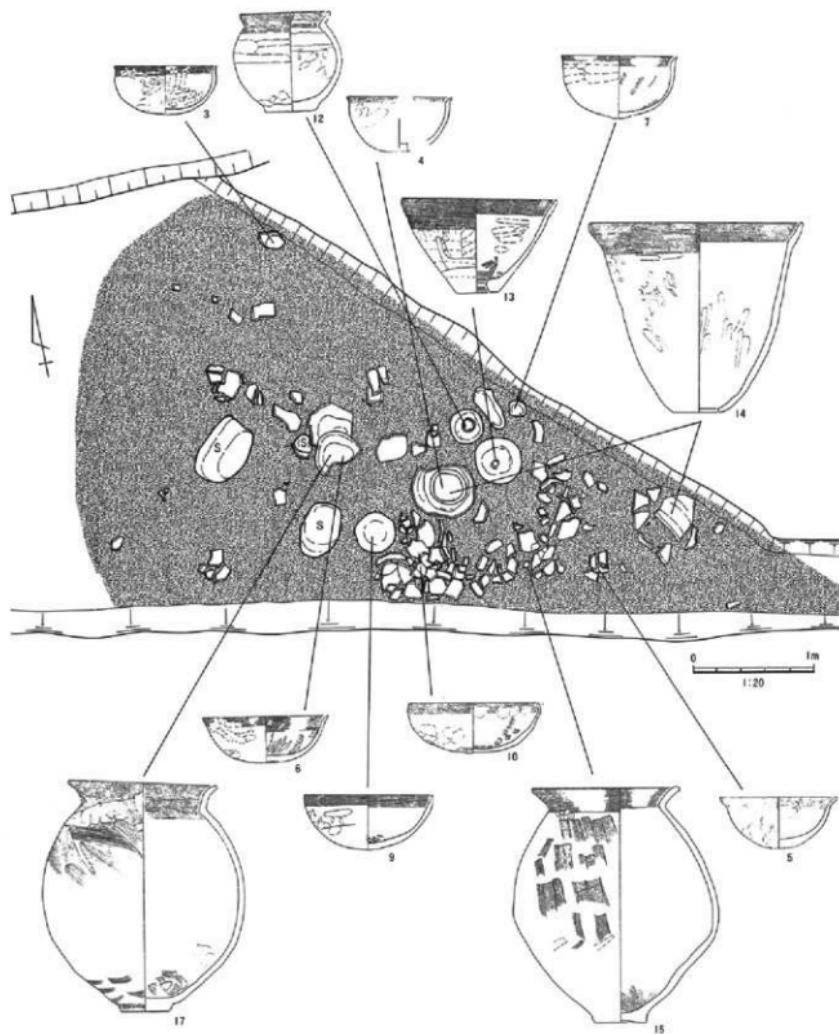
0
1:3 10cm

第5図 ST1出土遺物(1)



10cm
1:3

第6図 ST1出土遺物(2)・ST7出土遺物



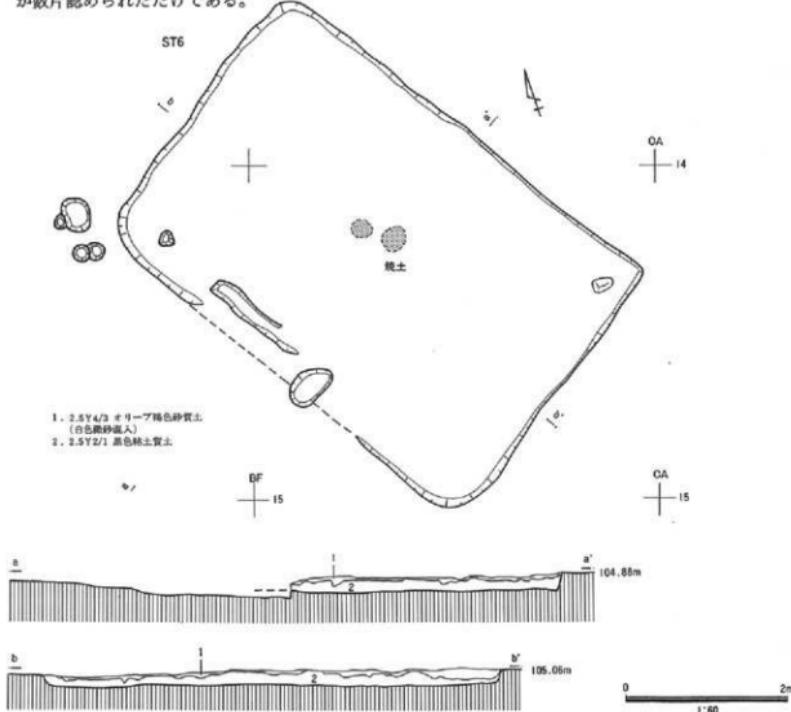
第7図 ST1カマド付近遺物出土状況

ST6 穴住居跡（第8図 図版5）

1区の東端ほぼ中央部、B F - 14区に位置する。北東方向に長い長方形を呈し、長軸の長さは5.63m、短軸の長さは3.87mを測る。単純計算すると21.9平方mとなり、律令期の田積で約7歩ほどとなる。長軸長は短軸長の約1.5倍となっている。どちらを主軸とするか迷うところであるが、他の住居跡の方向などから考えて短軸方向を便宜的に主軸とした。主軸方向はN-34°-Eを測る。

覆土は2層が確認された。第1層は白色の微砂が混入するオリーブ褐色の砂質土、第2層は黒色の粘質土である。住居の床面と地山の区別が殆ど不可能で、検出作業は困難を極めた。表土除去の際、バックホーのパケットが深く入りすぎ、住居跡の一部を深掘りしてしまったが、その断面を観察しても床らしい面の広がりは確認することができなかった。

住居跡ほぼ中央部に一定量の加熱を受けた部分が認められ、地床炉かとも考えられた。壁は遺存部分で約20cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。柱穴や貯蔵穴などは認められなかった。調査中、西側壁に沿って幅約20cm程の浅い落ち込みが見られたが、1mほどで追究不可能となり、住居に伴う施設との確証は得られなかった。遺物は覆土中に土師器の破片が数片認められただけである。



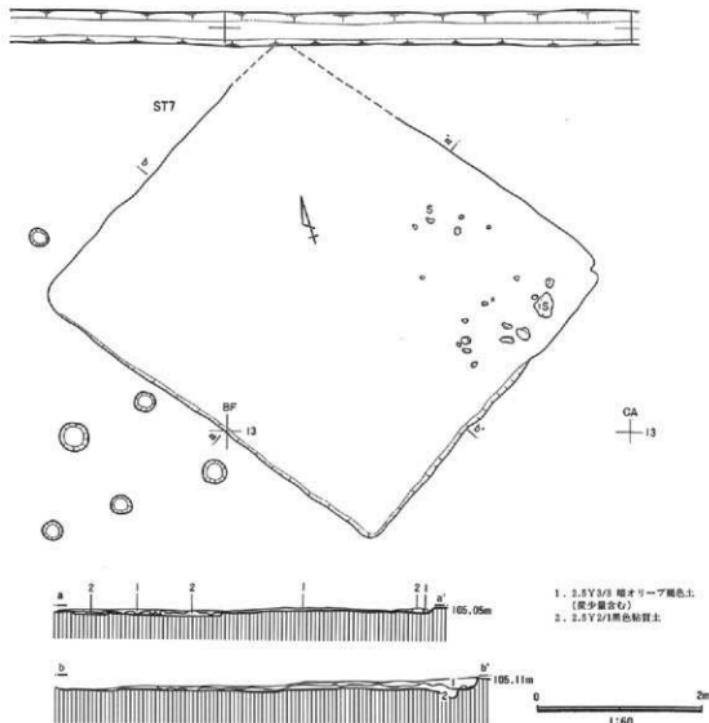
第8図 ST6 穴住居跡

ST7 竪穴住居跡（第9図 図版5）

1区の北東隅、BF-12区に位置する。前述のST6 竪穴住居跡と同様、北西に少し長い方形を呈し、長軸5.04m、短軸4.44mを測る。主軸はST6 竪穴住居跡と同様、短軸方向とすると、N-33°-Eとなる。この度の調査でもっとも浅い住居跡の一つで、深いところで約10cm、北隅の浅いところでは、遺構検出面とほぼ同じ高さとなり、プランを充分に把握することできなかった。ほ場整備等に係る土木工事によって削平されている可能性も考えられる。比較的遺存状態の良い南隅部で観察すると、壁は、わずかに丸味を持って立ち上がり、垂直に伸びるようである。

覆土は2層が観察された。第1層は暗オリーブ褐色土で、炭を少量含む。第2層は黒色を呈する粘質土で、地山との境の識別が非常に困難である。床面は検出困難で、東隅部に少量の土器片が散布するのみで、カマドや炉、貯蔵穴といった施設は認められなかった。また柱穴も検出することができなかった。

遺物は床面に散布している土器片から土師器壺1点を復元し得た。口縁部が一旦くびれて外反する丸底の壺で、口縁部内面に稜を持つ。



第9図 ST7 竪穴住居跡

S T 2 積穴住居跡（第10～15図 卷頭図版4 図版7・8）

2区の西端に近く、E A-11区を中心にして6グリッドにまたがって位置する。平面形はほぼ正方形を呈し、長軸方向で7.05m、短軸方向で6.9mを測る。住居跡のほぼ中央部を2本の暗渠によって切られている。主軸方向はN-57°-Eを測り、住居跡の各隅が座標軸に沿うように位置する。

覆土は2層が認められた。第1層、第2層とも黒褐色を呈する砂質土で、炭を含んでいたが、わずかに色調が異なり、断面観察で識別が可能である。表土を除去した時点で既に遺物が現れており、住居跡と知れたが、地山と覆土との差がほとんどなく、プラン確認は困難を極めた。そのため、もともと削平を受けていて浅い壁の立ち上がりが、さらに浅くなってしまった。

焼失家屋で、住居跡内全域に炭や炭化した建築部材が遺存する。特に住居跡の中央部に方形を描くように炭化部材が遺存しているのが認められた。これらは梁、あるいは桁材と思われる。またそこから放射状に遺存している炭化部材は、隅木か垂木、あるいは柱材と考えられる。このような遺存状況から、上部構造がそのまま落下したことがうかがわれ、当該住居が焼失する際、片燃えすることなく均等に燃え落ちたことを物語っている。

壁の立ち上がりは緩やかであるが、上部については不明である。床は軟らかく、遺物や炭、炭化部材の遺存によって床と確認できるのみである。柱穴は検出できなかった。

北東壁の中央やや東寄りに「カマド石」が遺存する。構造はS T 1と同じで、大きな河原石を「袖石」として用い、そのほぼ中央壁寄りに小さな河原石を置いて緩い二等辺三角形を形成し、その内部を燃焼部分としている。炭は「カマド石」の周囲に濃密に遺存し、壁との間に撒き出した炭を寄せるという使用方法まで同じである。

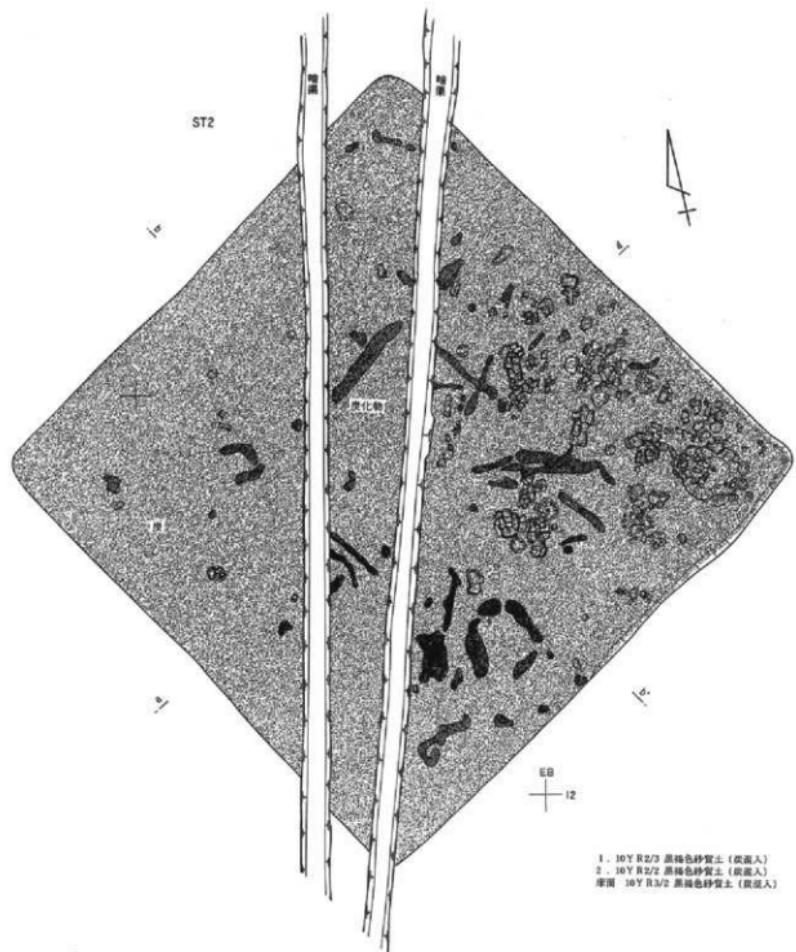
住居跡の東隅に近く、貯蔵穴と考えられる丸い落ち込みが認められた。径約1m、深さ約30cmを測り、底部は丸底を形成する。その底部や周囲に环形土器が多く遺存していた。底部に遺存する土器は、落ち込みの周囲にあったものが転落したものと思われる。

S T 2は、この度の調査でもっと多くの出土遺物を得た住居跡である。遺物は、ほぼ全域から出土しているが、特に「カマド石」の周囲と、貯蔵穴の周囲に濃密に分布している。第15図に「カマド石」周辺出土の土器を掲載したが、焼失前の住居の使われ方の一端をうかがうことができる。

出土遺物の内、図化し掲載したのは、土器類、石製品など、計46点である。

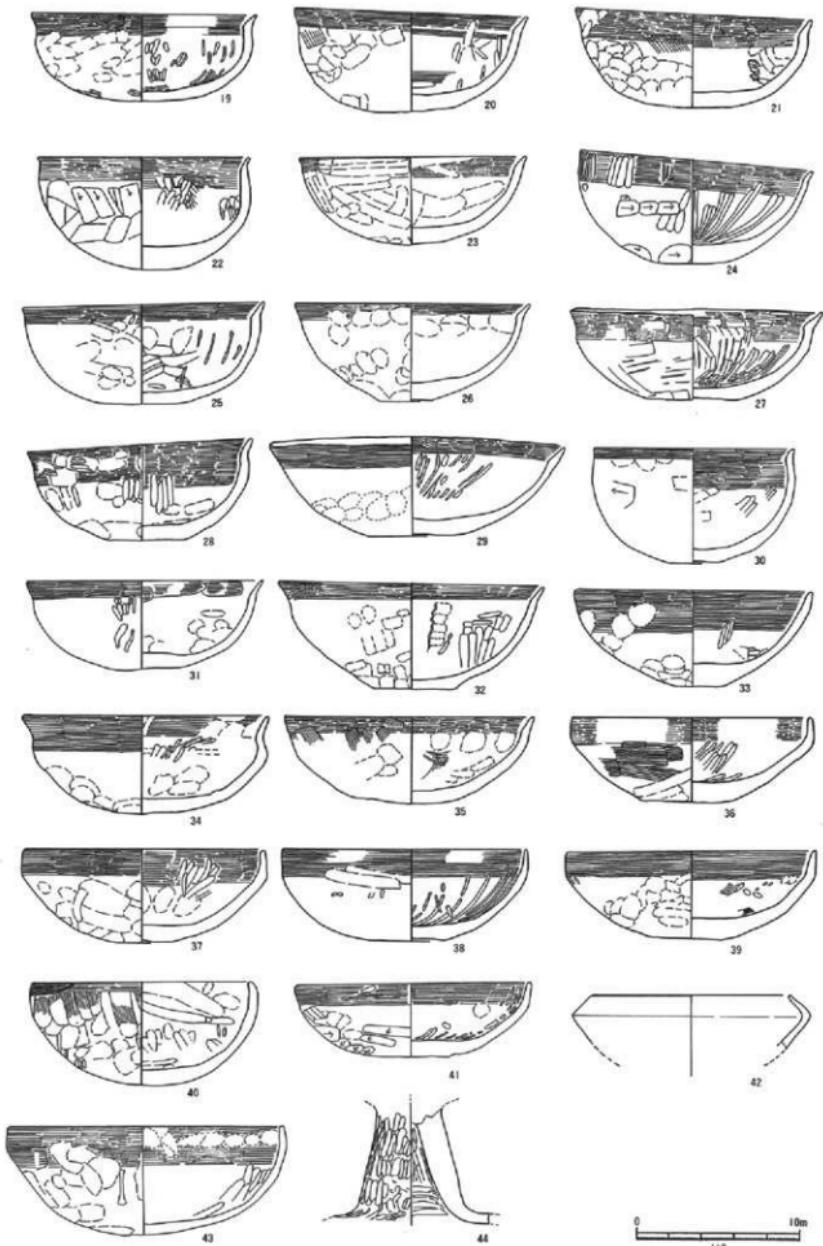
土器類では土師器と須恵器がある。土師器は壺（26点）、高壺（1点）、壺（7点）、甕（5点）、瓶（2点）からなり、計41点を数える。須恵器は甕が1点出土している。甕は、「カマド石」と北東壁の間に、正位で遺存していた甕の中に納められていたような状況（図版7下段）で出土しており、甕の、ひいてはこの時期の須恵器の在り方の一端を物語っているようと思われる。

石製品では、砥石（1点）、滑石製紡錘車（3点）、石製模造品（粗製円板・勾玉が各1点）などがあり、計6点を数える。

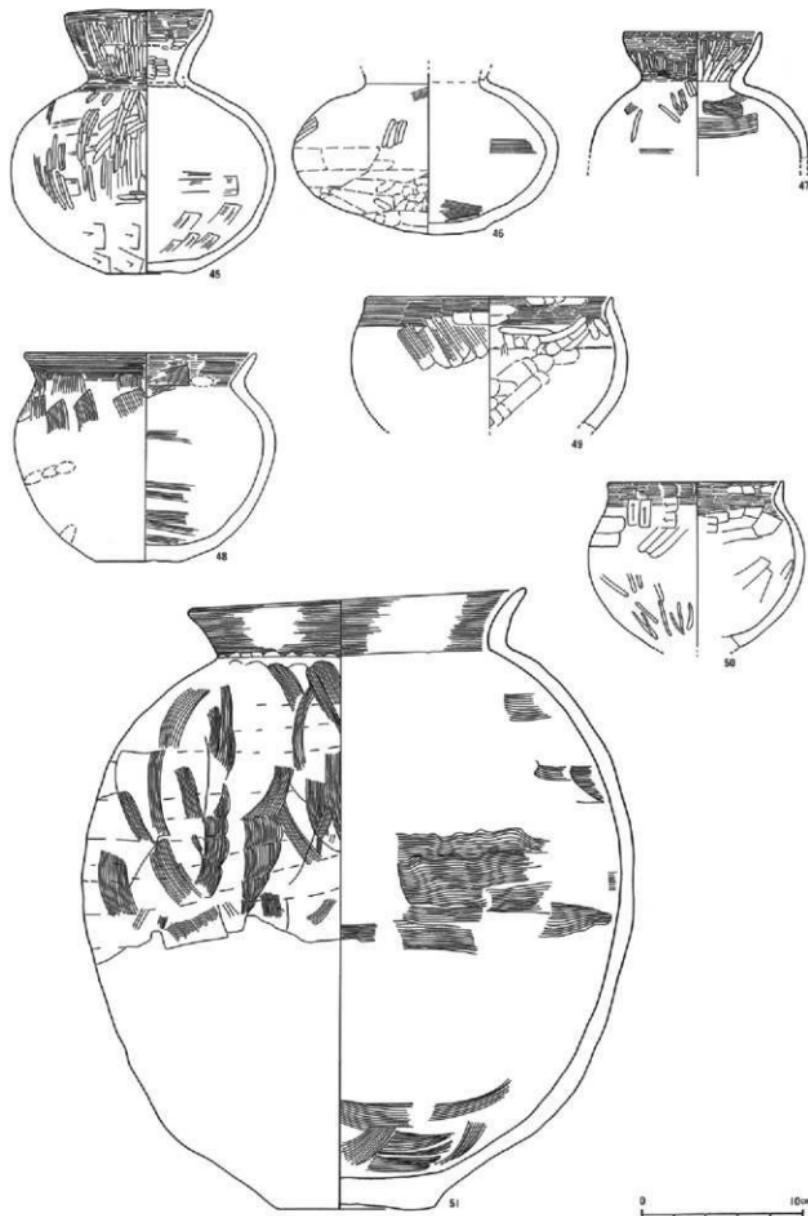


0 2m
1:60

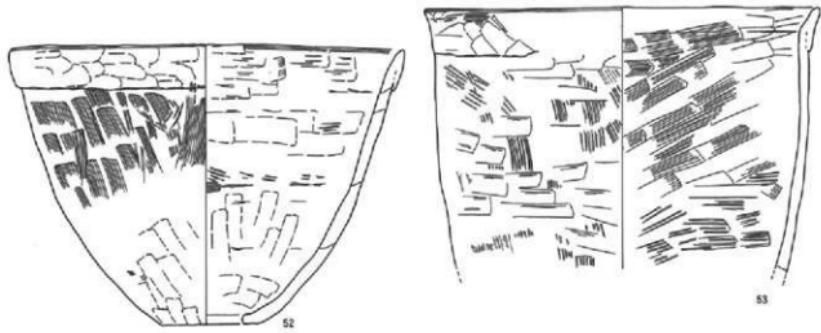
第10図 ST2竪穴住居跡



第11図 ST2出土遺物(1)

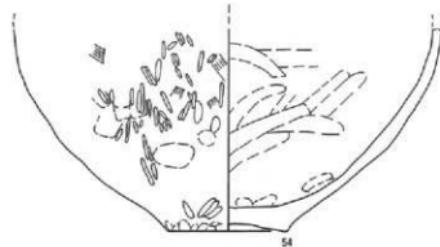


第12図 ST2出土遺物(2)

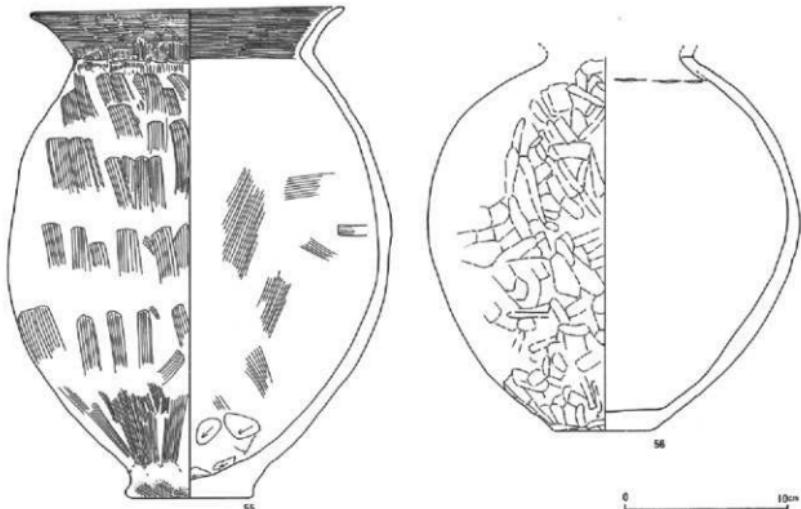


52

53



54

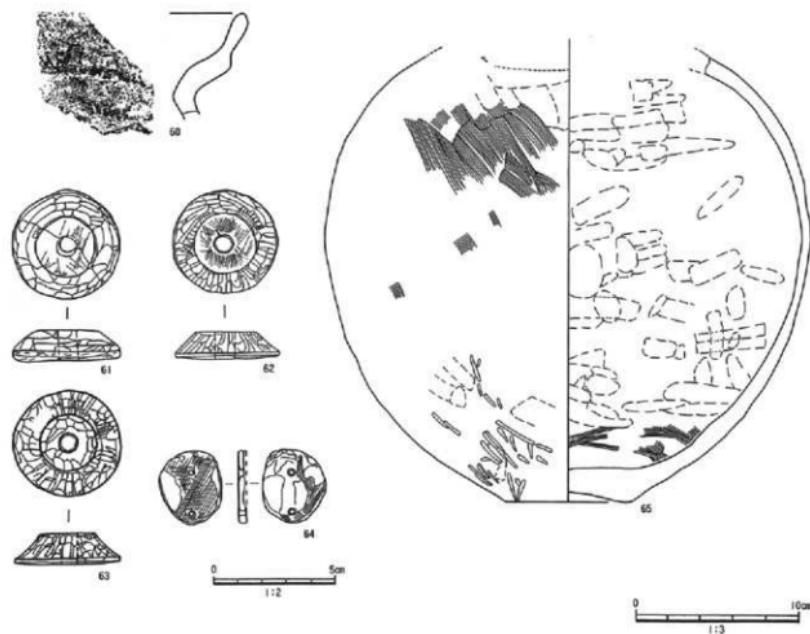
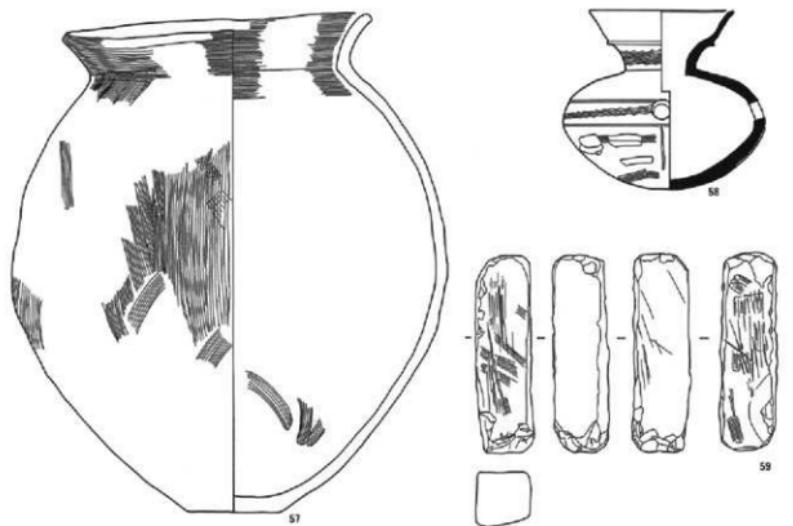


55

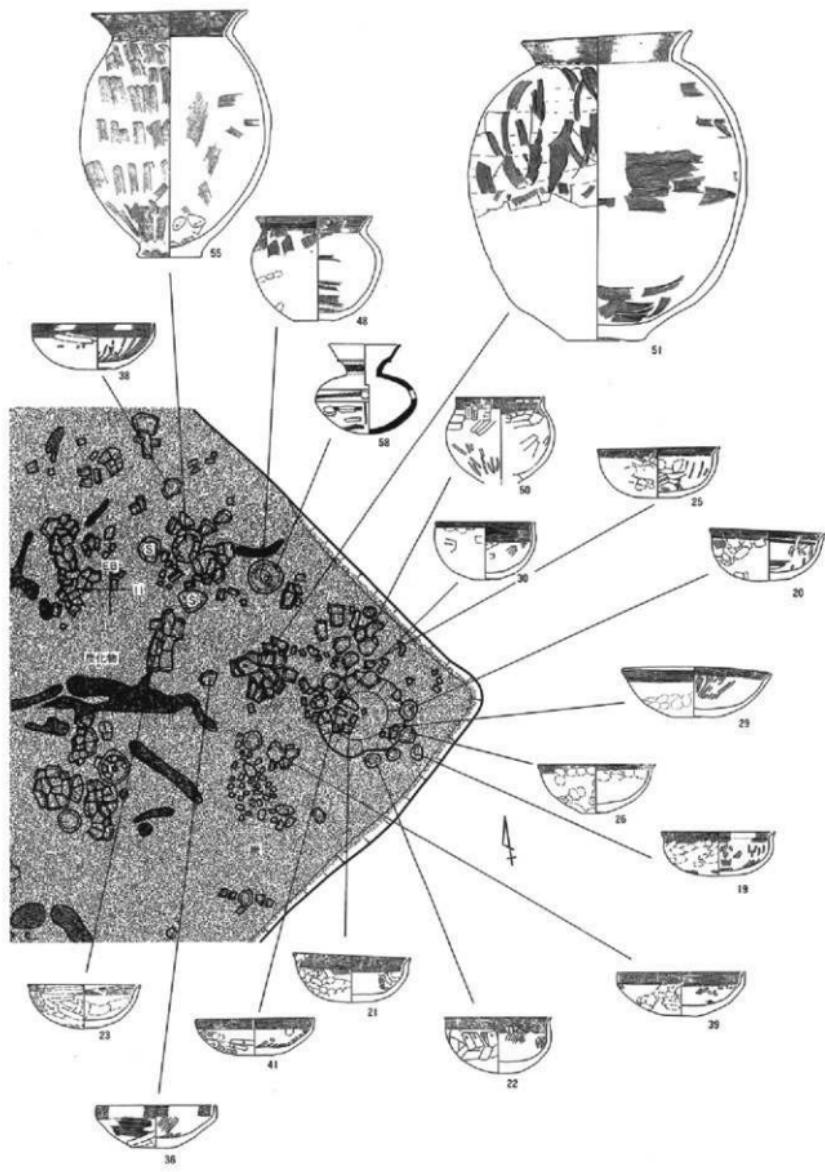
56



第13図 ST2出土遺物(3)



第14図 ST2出土遺物(4)



第15図 ST2カマド付近遺物出土状況

S T 3 穫穴住居跡（第16～20図 卷頭図版5 図版9）

2区の中央西寄りのE C -12区に位置する。平面形は北東一南西に長い方形を呈するが、東隅部を擒んで引っぱり出したような歪みを持つ。住居の各辺の規模は前述の歪みのためそれぞれ異なり、軸長の計測は、各辺のほぼ中央部で行った。それによると、長軸は4.47m、短軸は3.75mを測る。主軸方位はN-51°-Eを測る。

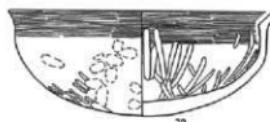
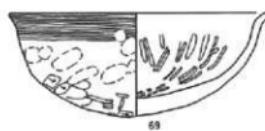
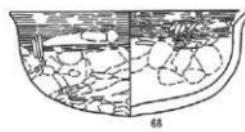
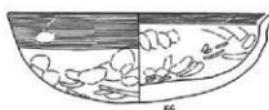
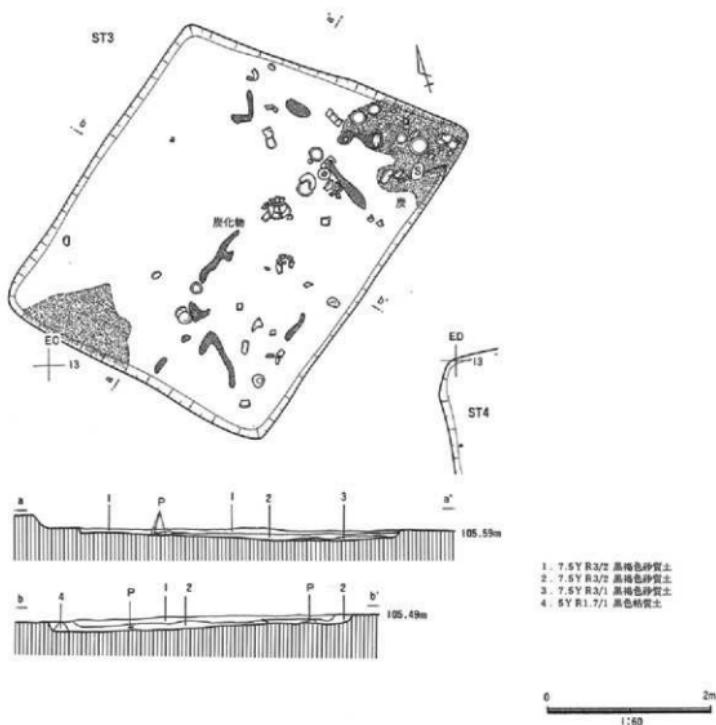
覆土は4層が認められた。第1層から第3層までは同じ黒褐色砂質土である。「標準土色張」の表記に従えば、第1層と第2層が7.5YR3/2、第3層が7.5YR3/1となる。第1・2層と第3層は、わずかに色調が異なり、断面観察では識別が可能である。第1層と第2層とでは、土の粒子が若干異なり、識別できる。第4層は黒色粘質土である。

壁は立ち上がり部で丸味を持ち、垂直に立ち上がる。床面は軟らかく、また地山との差違がほとんどなく、炭や遺物の所在を頼りに追究した。柱穴は検出できなかった。住居内に建築部材と思われる炭化物が散見され、焼失家屋と考えられる。ただ、前述したS T 2 穫穴住居跡と較べると炭の遺存が少なく、火災に伴うと考えられる炭が濃密に遺存するのは、住居西隅寄りの一角だけである。

引っぱり出されたような形態の東隅部に「カマド石」が認められた。石の配置や置かれ方はS T 1やS T 2とほとんど同じである。彼我の差は「カマド石」の設置場所が、壁中央から東に寄ったところに設けられているか、全くの隅部を利用して設けられているかだけである。それでは、この設置位置の違いは何を物語るのであろうか。一般に竈の位置の変化は、風向き等に起因するととらえられるが、同一地域で風が常に同じ方向から吹き、ある時点で急激に変わるという現象が起き得るものであろうか。むしろ、同一地域では、季節によって風向きが変わると考える方が自然である。いったいに、住居、わけても煮炊き施設には、火を神聖なものとみなして竈神を祀るなど、つい最近まで種々のタブーが伴ってきた。竈の設置位置についても、地域や共同体の中でこのようなタブーが存在したと思われる。竈の位置の変化は、風向きではなくタブーの変化によるものととらえた方が良いのではないだろうか。このような視点を探れば、S T 1やS T 2の「カマド石」には同一のタブーが窺われ、S T 3には別のタブーが存在すると考えられよう。このことから、S T 3が前2者と同様の施設を持ちながら設置位置だけが違うということについて、タブーの変化に見合う年代の隔たりをもつ場合と、同一時期の性格を異にする建物という場合を考え得るが、ここでは年代の隔たりを意味するという考え方を探りたい。出土土器からは組成に大きな変化は見られず、ごく短い年代幅での隔たりであろうと考えられる。

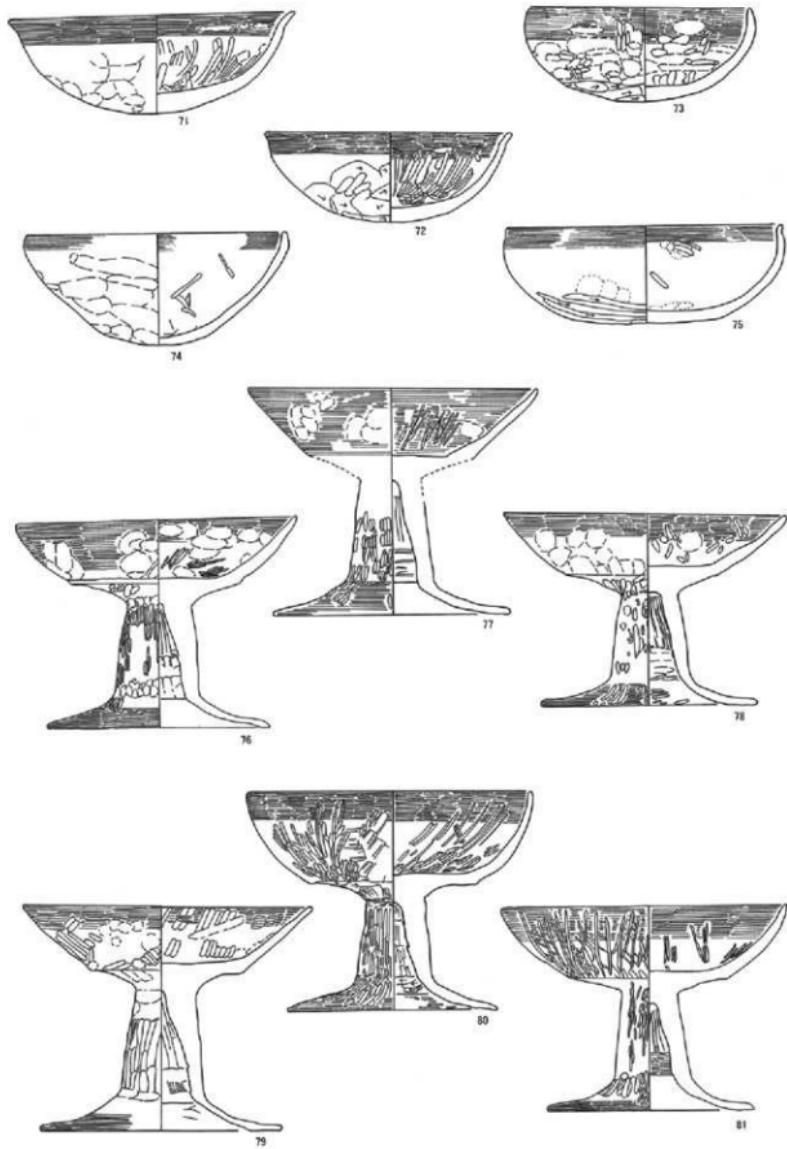
掲き出された炭の遺存が、割合に少なく、東隅部の一角のみに限られるということは、おそらくは「カマド石」の使用期間の長短に係るものであろうと考えられる。

出土遺物は土師器のみである。図化し得たのは、壺(10点) 高壺(6点) 壺(2点) 壺(7点) 水差(2点) の計27点である。壺の形態等に特に差は認められないが、土器組成において目立つ特徴は、高壺が多いということである。この度の調査で、都合9点の高壺を図化し得たが、内6点がS T 3から出土している。



0 10cm
1:3

第16図 ST3竪穴住居跡及び出土遺物

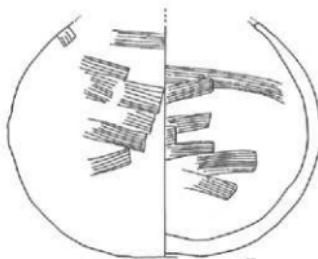


10cm
1:3

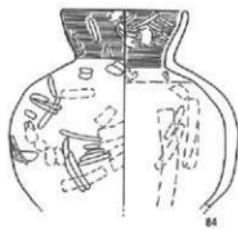
第17図 ST3出土遺物(1)



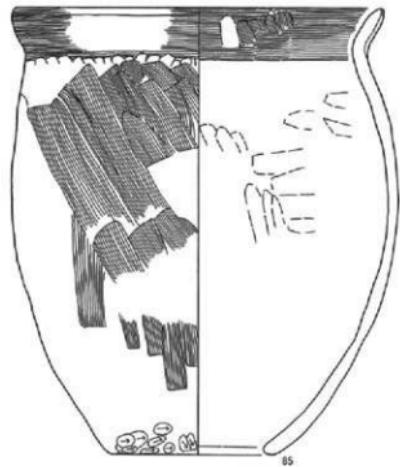
82



83



84

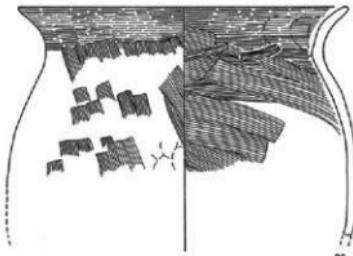
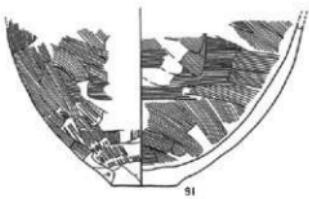
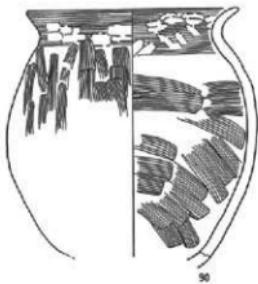
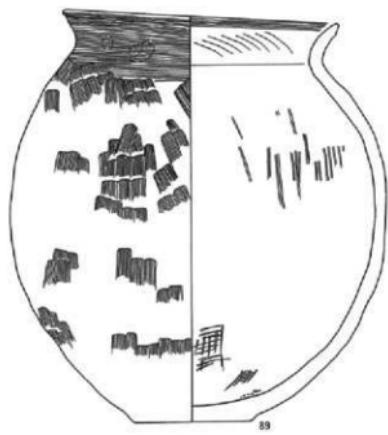
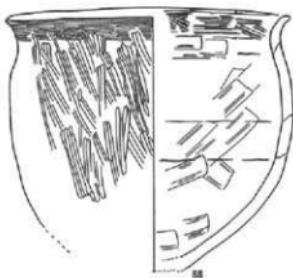
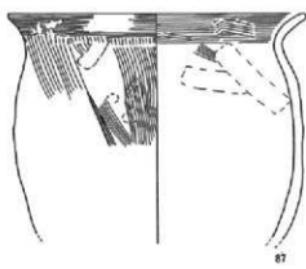


85



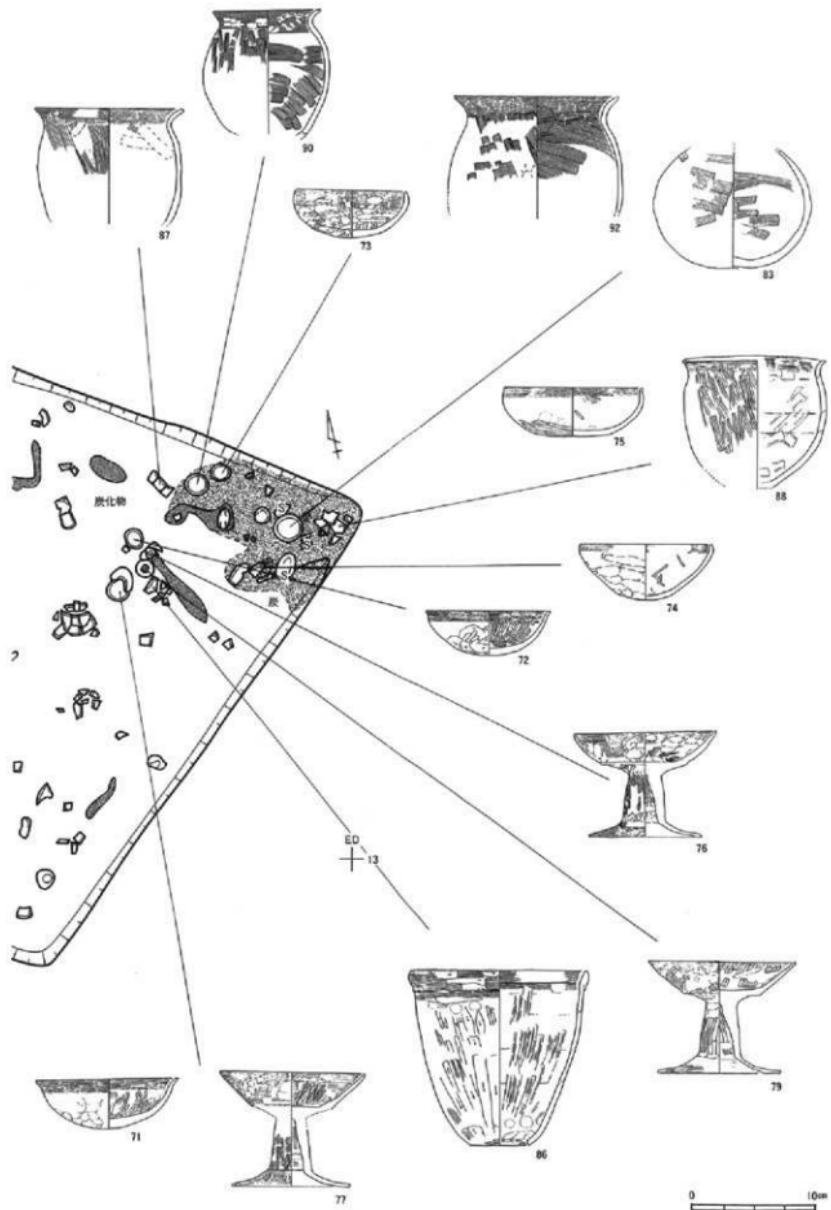
0 10cm
1:3

第18図 ST3出土遺物(2)



0 10cm
1:3

第19図 ST3出土遺物(3)



第20図 ST3カマド付近遺物出土状況

S T 118竪穴住居跡（第21・22図 図版10）

2区西寄りの北端、E B-07区を中心に位置する。平面形は西辺が若干寸足らずの方形を呈する。各辺の中央部で計測すると、長軸が7.23m、短軸が6.48mを測る。主軸方位はN-51°-Eを測る。西側を暗渠によって切られている。

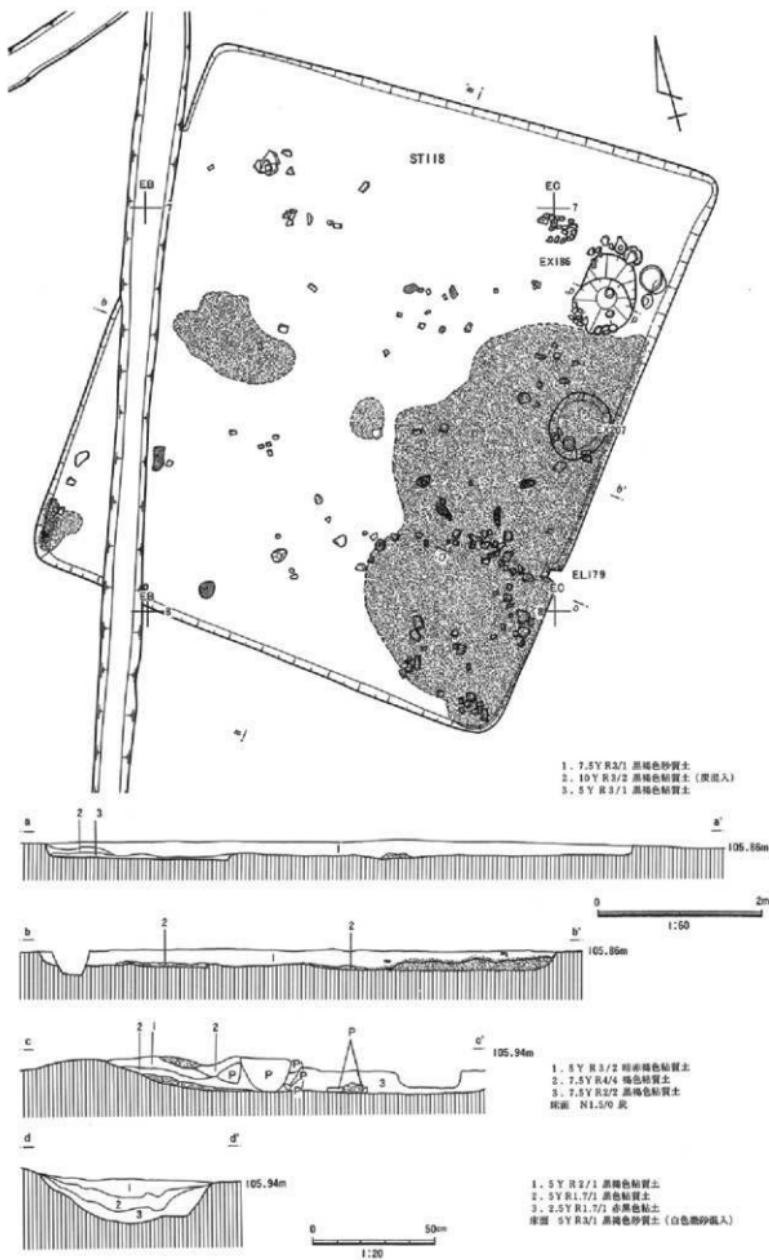
覆土は3層を数える。第1層は黒褐色砂質土、第2層は黒褐色粘質土で炭が混入する。第3層は黒褐色粘質土である。第1層が主体をなし、第2層、第3層は南壁に近く部分的に遺存する。壁は床面との境で丸味を持ち、急角度で立ち上がる。

床面は炭の分布面を追究することで何とか検出できたが、炭の分布しない北壁や西壁に近いところは検出が困難であった。柱穴は検出できなかった。

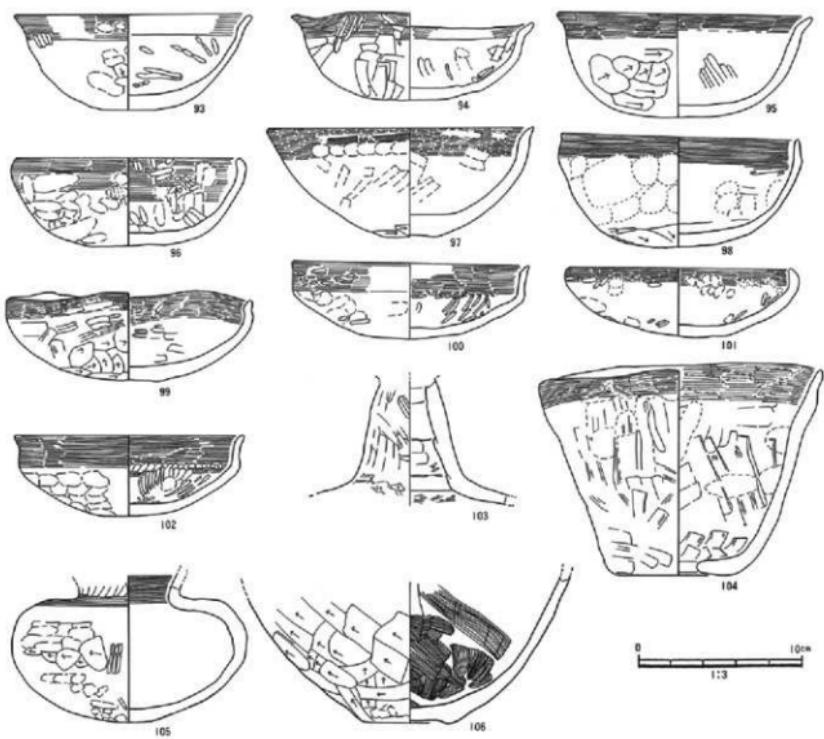
東辺の中央南寄りにE L 179竪が認められた。煙道と考えられる焼土が東壁から15cmほど外に伸びていることが認められ、燃焼部に甕が置かれた状態で遺存していたため、竪と判断したが、土色や土質の関係で袖の部分を明確に識別することができなかった。

E L 179竪を中心に、ほぼ半径5mの半円を描くように炭が遺存している。これは、竪から掘き出された炭が拡散したものと考えられる。

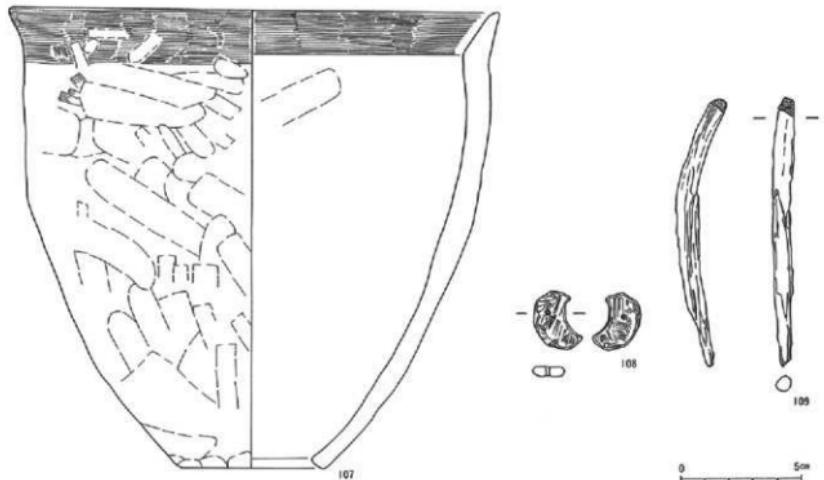
E L 179竪の北に、東壁に沿ってE X 207、E X 186の2つの落ち込みが認められた。いずれも南北に長い楕円形を呈する。E X 207は長径85cm、短径70cm、深さ約10cmを測る浅い落ち込みで、全体を炭が覆っていた。南縁に土師器環が數点遺存していた。E X 186落ち込みは、長径約1m、短径約70cm、深さ約20cmをはかり、落ち込みの北側斜面が緩やかに底部に続く。覆土は3層を数える。第1層は黒褐色粘質土、第2層は黒色粘質土、第3層は赤黒色粘土である。底部は黒褐色砂質土で白色微砂が混入する。地下水位が高いせいで、底部近くになると水が染み出てくる。E X 186落ち込みの縁辺部や内部に土器が遺存し、特に高い水位に護られて3種類の種子が出土した。出土した種子は、化石同定（詳細は巻末付編参照）でサンショウ、ヒョウタン、キュウリ属メロン仲間という結果を得ている。遺物は種子の他に土器類、石器、石製品、木製品がある。土器類は、土師器と弥生土器がある。弥生土器はS T 18の南に位置するS T 115竪穴住居跡からも出土している。すべて小片で、口縁部と体部とがある。口縁部の山形突起（第42図172）や緩やかな波状（第42図174）を描くなどの特徴から天王山式に属するものと考えられる。器形は壺形と考えられる。土師器は、壺（10点）、高壺、壺、甕、瓶がそれぞれ1点の計14点である。石製品としては、石製模造品（勾玉）が1点出土している。木製品としては、先端部のみであるが、火燭杵が出土している。暗渠の埋め土から土器片などと共に検出したものであるが、他に近接する遺構がないためS T 118に伴う遺物と判断した。火燭杵の出土例は、從来山形市街の北西郊外に所在する鶴遺跡（国指定史跡、古墳後期～奈良）からの出土が知られていたが、本例により、山形県内の火燭杵のより古い例を得たことになる。他に床面に近い覆土中から、石鎌、スクレイバーなど、縄文時代に属すると思われる石器が出土している。村山高瀬川の対岸に弥生時代の遺跡も所在することから、これら古墳時代以外の時期に属する遺物は、住居埋積時の流れ込みと考えられる。



第21図 ST118竪穴住居跡



0 1:3 10cm



第22図 ST118出土遺物

S T 115堅穴住居跡（第23・24図 図版12）

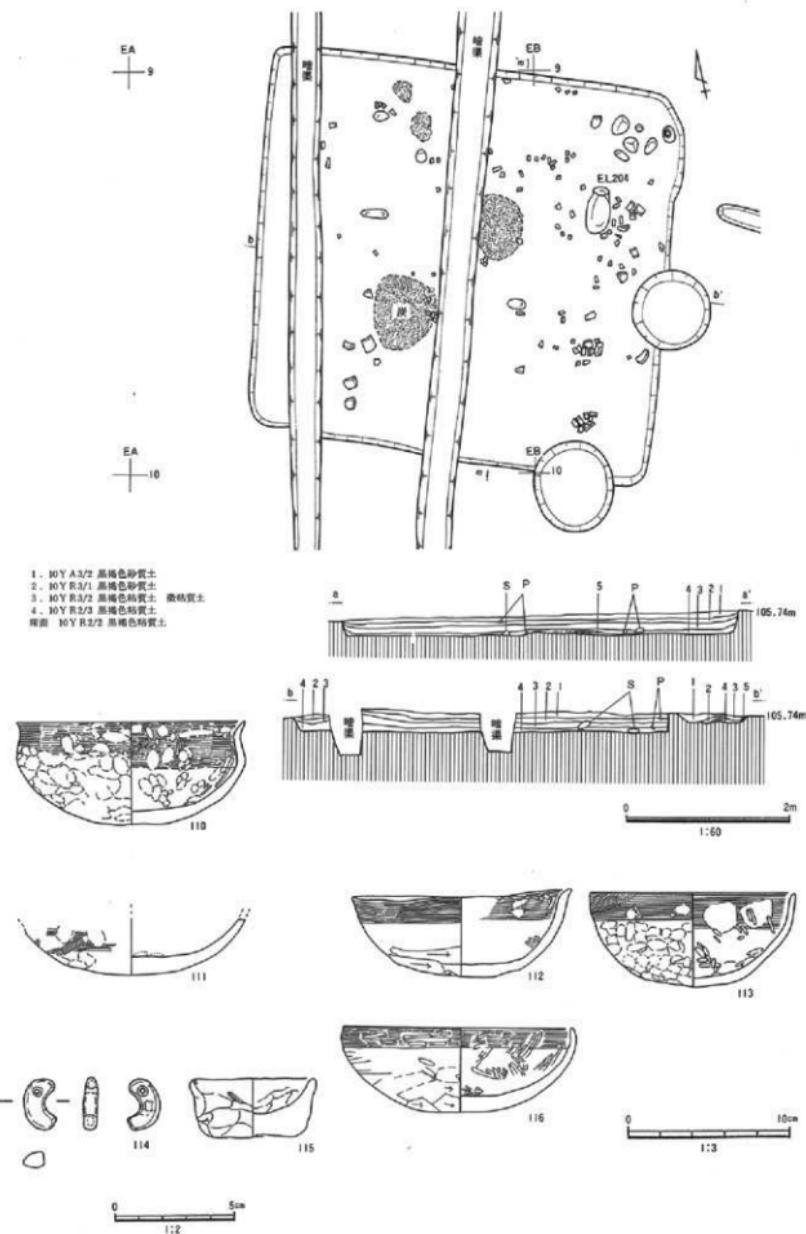
2区の西寄り、E A-09区に位置する。住居の中央部と西壁近くを暗渠に切られる。平面形は南北方向にわずかに長い方形を呈し、各隅はわずかに丸味を帯びる。東壁中央と南壁東隅に近く土壤に切られている。長軸は5.1m、短軸は4.89m、主軸方位はN-20°-Eを測る。

覆土は4層が観察された。第1層は10YR3/2黒褐色砂質土、第2層は10YR3/1黒褐色砂質土、第3層は10YR3/2黒褐色粘質土、第4層は10YR2/3黒褐色粘質土で、全て黒褐色を呈する。また床面も10YR2/2黒褐色粘質土を呈し、床面の識別はきわめて困難であった。壁は床面との境でわずかに丸味を持ち、角度を持って立ち上がる。当該住居跡は他と較べると比較的深く、遺存部分で26cmを測る。柱穴は確認されていない。

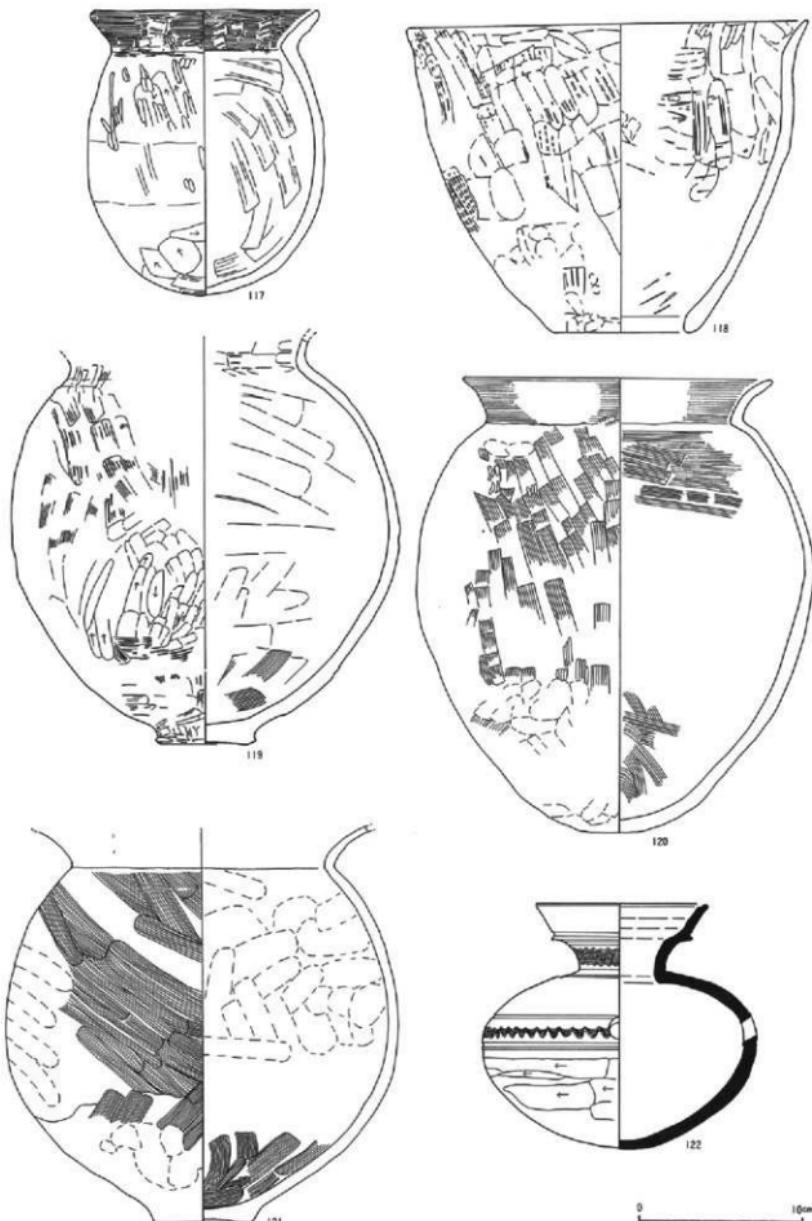
東壁の中央北寄りにE L 204カマド石が確認された。壁との距離は、約1mである。このE L 204カマド石は、既述したS T 1やS T 2、S T 3のカマド石と異なり、袖石の上にもう一つの石を載せたもので、「門」の字のような正面形を呈していた。既述したカマド石とはタイプが異なるものなのか、或いは、単に既述の住居跡が削平を受けていたために失われてしまったものなのか、現状からは不明である。後者の可能性をも考えて、ここでは同じタイプのものと考えておきたい。E L 204の周囲にはS T 1などに見られる炭の分布は見られず、住居中央部に、径1mに満たない範囲で2ヵ所の炭の分布が観察されただけである。

調査を進める中で、E L 204は、実は移築されたものである、ということがわかつてきた。北壁の西寄り、暗渠に挟まれた位置に、床としては軟らかすぎる場所があることが観察された。これを追究したところ、黒褐色の粘質土を被っているが、その下は炭が堆積する浅い落ち込みであることが判明した。つまり、炭が堆積したままの状態で、これに土を被せて整え、床として使用したものと判断された。このことから、それまで北壁に面して設けられていたカマド石が、ある時点で取り払われ、東壁に面した現在地点に移築され、元の位置の炭などはそのままに、その上に土を被せて整地し、床としての最低の要件を付加してそのまま床として使用を続けたものであろうとの推察を得た。この、煮炊き施設の移築は何を物語るのであろうか。既述したカマドのタブーが、当該住居が維持されている段階で変化したものと考えたい。屋上屋を重ねることになるが、造築されて間もない住居であれば、新たなタブーに沿うために住居を造築し直すことなく、施設の移築という形で処理されることも充分あり得ると思われる。

遺物は住居跡全域から出土しているが、カマド石の周辺にやや密度が濃いようである。出土した遺物は、土器類では土師器と須恵器があり、石製品として勾玉が出土している。土師器は壺（5点）、甕（4点）、甑（1点）を図化し得た。他に手捏ねの土製模造品が出土している。須恵器はほぼ完形の甕が1点出土している。甕はカマド石と東壁の間から正位で出土しており、S T 2における甕の出土状況と良く似た様相を示す。S T 2の様相と合わせると、このころの住居内における甕の役割が見えてきそうである。



第23図 ST115堅穴住居跡及び出土遺物



0
1:3
10cm

第24図 ST115出土遺物

S T 132堅穴住居跡（第25・26図 図版13）

2区西端のD F-08区に位置する。調査区からはみ出ているため、規模は不明である。確認した範囲では少々歪んだ方形を呈すると考えられる。東壁で6mを測り、中央部では6.69mを測る。北壁は西に行くにつれて拡がり、南壁は中央部近くで胴張りをみせるよう観察される。主軸方位はN-34°-Eを測る。

覆土は2層が観察された。第1層は暗赤褐色砂質土で炭が混入する。第2層は暗褐色を呈する粘質土である。床面は黒褐色粘質土からなる。壁はおそらく削平を受けているため6cm程しか遺存していないが、床との境でわずかに丸味を持ち、垂直に立ち上がる事が観察された。柱穴は確認されていない。

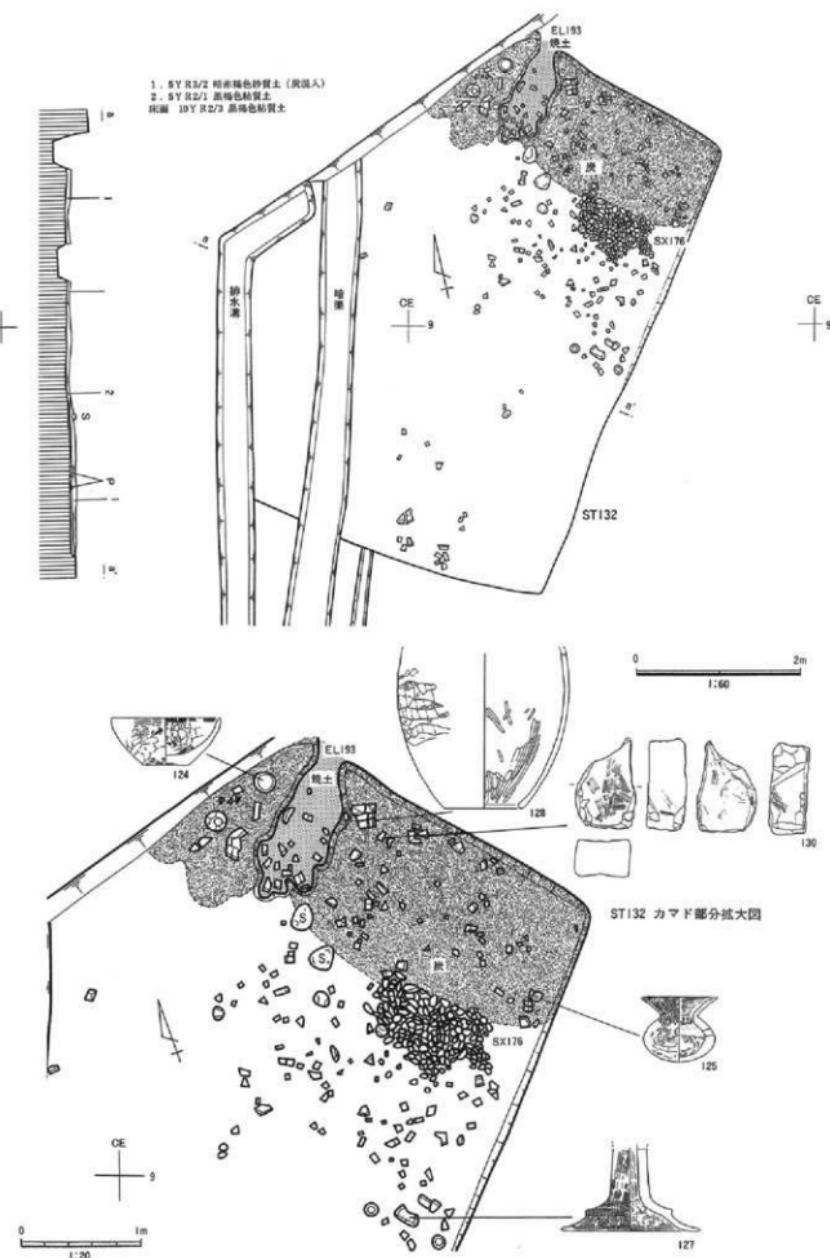
北壁に取り付く形でE L193焼土が観察された。位置は、住居の拡がりから見て、北壁の中央ほぼ東寄りになるかと思われる。焼土の範囲は長さ1.4m、幅は、広いところで50cmを測る。その東西には炭が分布している。焼け土を盛ったものではなく、盛った土が焼けたものと観察された。他に煙道などの施設は確認できず、焼土や炭は住居跡の内側で止まっているように観察された。

E L193を竈と考えると、全幅としては狭く、片袖としては厚すぎる嫌いがある。またこれを片袖とし、調査区外となっているが、西側に対をなす袖があると考えれば、袖の間隔は内法で60cmを越えることになり、少し広きに過ぎるかとも思われる。E L193はひとかたまりをなし、上面には土師器片が遺存している。竈の袖とすれば、土器片を塗り込めて袖を作ったと考えざるを得ない。石や土器、瓦などを竈の芯に用いることはままあるが、土器片を芯にする例はなく、また芯材とはなりにくいと思われる。このような観察結果から、この施設を通常見られる壁付きの竈とは考えにくい。しかし、他の住居跡の様相をも考え合わせると、これを煮炊きのための施設と考えることは可能と思われる。そこで、竈と区別するため、「類カマド」と仮称しておく。「類カマド」とは、焼土や炭の堆積を伴い、それらは住居内で完結して屋外までは及ばない。また明瞭な施設は確認できないが、他の様相から煮炊きの施設と考えられるもの、との概念を充てたい。

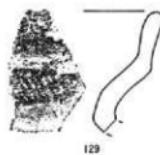
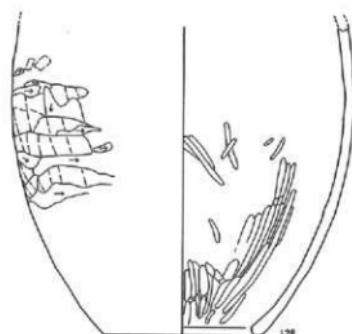
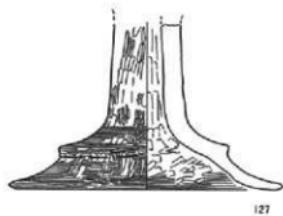
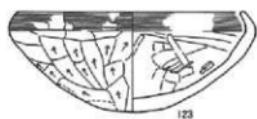
E L193の両側には、前述したように炭が分布する。特に東側は東壁にまで達する。これも他の住居跡の例から、煮炊きによって生じた炭を撒き出して、壁際に寄せたものと考えられ、煮炊きが行われた期間と炭の堆積量とが比例関係にあるものと思われる。

東隅に近く、炭の分布域の限界と重なるように河原石の密集したS X176が認められた。径10cm程度の河原石を床面に密に敷き詰めたものと思われ、北側の限界は直線状をなし、北壁とほぼ平行する。しかし、東辺、南辺、西辺の限界は明瞭ではなく、河原石の欠落や移動があったものかとも思われる。全体としては東を底辺として西に上辺をもつ台形状を呈する。河原石が密に分布するところはこの一角のみで、他には見あたらず、性格は不明である。

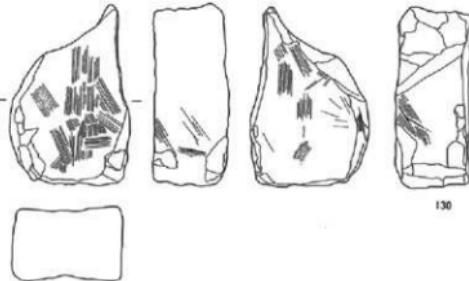
遺物は、砥石（1点）と土師器の壺（2点）、壺（2点）、高壺、甑、甕（各1点）を図化し得た。甕は小ぶりで体部の肉が厚く、或いは土製模造品かとも思われる。



第25図 ST132竪穴住居跡及びカマド付近遺物出土状況



0 5cm
1:2



0 10cm
1:3

第26図 ST132出土遺物

S T127堅穴住居跡（第27・29図 図版11）

2区東端、G A-05区に位置し、次述のS T120と密接して遺存する。平面形は、北西に長い方形を呈し、南東辺でやや開く。軸長は、中央部で計測すると長軸で5.43m、短軸で4.83m、主軸方位はN-61°-Eを測る。

覆土は6層を数えるが、住居を広く覆うのは第1層と第6層の2層である。第1層としたものは7.5YR3/2黒褐色粘質土で、赤褐色土が混入する。第6層は7.5YR3/1黒褐色粘質土で、第1層と同様、赤褐色土が混入する。第2層から第5層までは「類カマド」に係る堆積土である。床面は第6層と同様黒褐色粘質土で、検出は困難を極めた。壁は床面との境で丸味を持ち、角度を持って立ち上がる。柱穴は各隅部にきわめて近い位置で4本が検出された。いずれも25cm程度の円形を呈し、浅い。

北東壁の中央やや北寄りに炭の分布するところがある。精査しても石や袖らしき施設は観察できず、焼土と炭が堆積しているのみであった。当該部分は覆土が軟らかく、面整理の折にはジョレンが深く食い込みがちな場所であった。炭の分布は北東壁で止まっており、住居の外には及んでおらず、当該住居に伴うもので、遺存する炭は、他の煮炊き施設と同様の様相を示す。これらのことから、他の例などと考え合わせて、これも煮炊きの施設と判断し、S T132と同様、「類カマド」と仮称しておく。炭の両脇に落ち込みが見られ、場所から考えると貯蔵穴のような機能を持っているものと思われる。

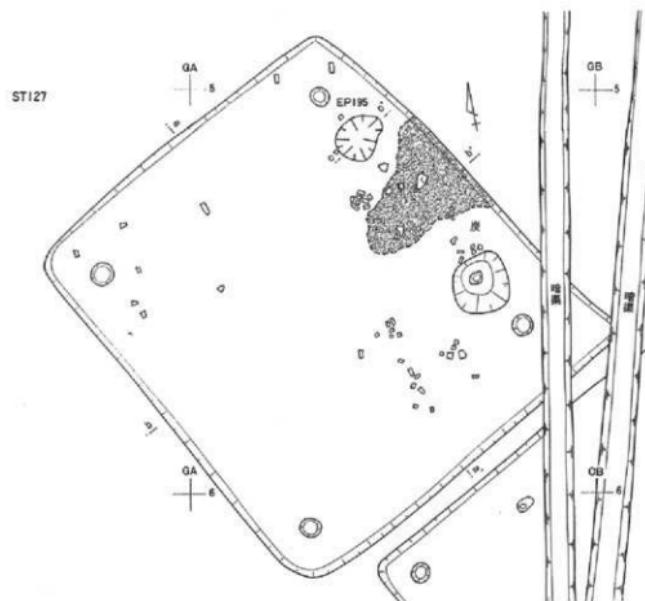
遺物は土師器が主で、壺（3点）、壺、甕、瓶（各1点）を図化し得た。他に土師器と思われるが、器形が不明なもの（第29図135）を得ている。粘土を径13cmほどの円板状に整形して底部とし、その端部から体部を積み上げている。体部は立ち上がりから直線的に開く。体部下端には体部と底部の境目がはっきりと残り、体部の外面にはヘラナデやケズリの痕跡が残る。全体に作りが雑であり、知りうるのは底部近くのみのため器形の類推は難しい。

S T120堅穴住居跡（第28図 図版14）

2区の北東隅にS T127と北西壁を接するように位置する。G A～G B-05～06区にまたがっている。平面形はやや北東に長い方形を呈し、S T127と同様、南東辺でわずかに開く。中央部での計測で、長軸は5.75m、短軸は5.28m、主軸方位はN-30°-Wを測る。覆土は4層が認められた。床面は覆土と酷似し、検出が困難であった。壁は緩やかに立ち上がり、深さは残存部で8cmを測る。

南東壁に近く、炭が遺存している。炭の分布域が壁まで達しておらず、他の例との相違を見せるが、これも煮炊きに使用された領域と考えられ、やや小ぶりではあるが河原石が遺存していることから、「カマド石」と考えて良いと思われる。貯蔵穴などの施設は認められなかった。

遺物は、炭の範囲を主体に北東壁の近くまで分布するが、細片が多い。土師器のみで、壺、壺、甕、瓶各1点の計4点を図化し得た。



1. 7.5Y R3/7 黑褐色粘質土（赤褐色深入）
 2. 2.5Y R1.7/1 黑褐色（深部入）
 3. 2.5Y R1.7/1 黑褐色（7.5Y R4/4 黑色壤土深入）
 4. 7.5Y R4/4 棕褐色土（さるさらしていわ）
 5. 2.5Y R4/2 暗灰黃色，鐵物質土
 6. 7.5Y R3/7 黑褐色粘質土（赤褐色深入）
 地面 5Y R3/1 黑褐色土粘質土

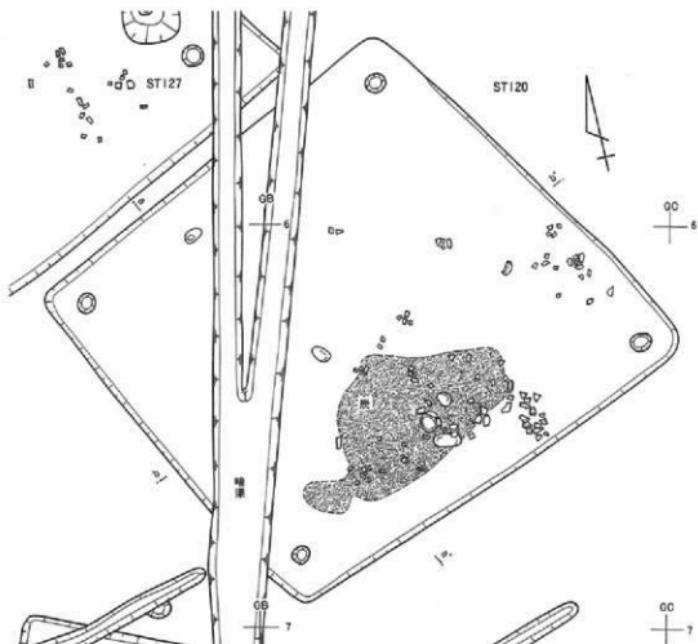
カマヤ部分拡大図



- EP195
 1. 7.5Y R1.7/1 黑色土
 2. 7.5Y R4/4 棕褐色土
 3. 7.5Y R3/2 黑褐色土
 4. 7.5Y R2/2 黑褐色土

0 1m
1:20

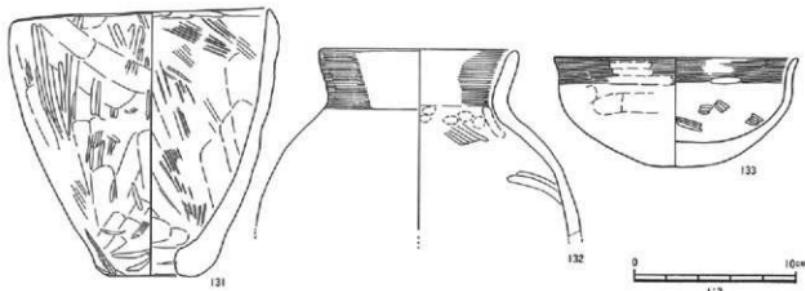
第27図 ST117竪穴住居跡



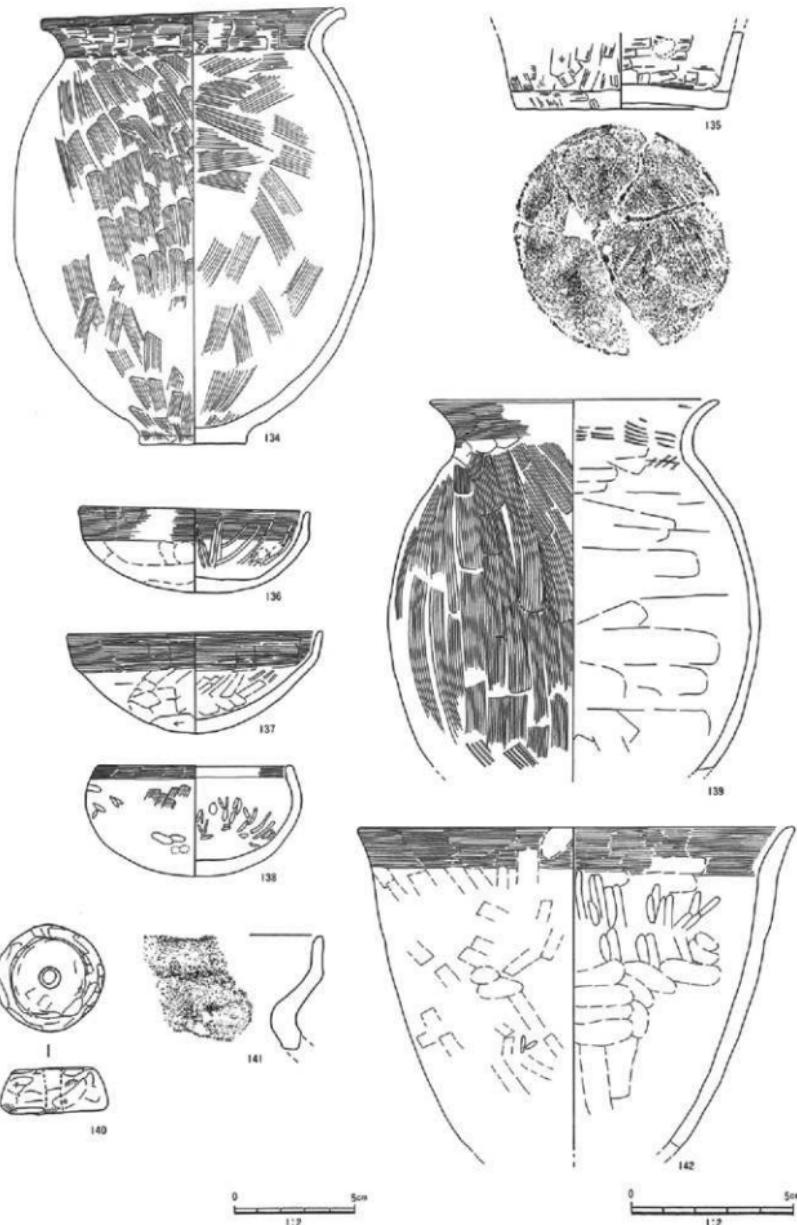
1. 10YR4/2 黑褐色砂質土(粗砂混入)
 2. 10YR3/3 喀褐色砂質土
 3. 10YR3/2 黑褐色砂質土
 4. 10YR3/4 喀褐色砂質土(微砂)
- 堆積 10YR3/2 黑褐色粘質土



0 2m
1:60



第28図 ST120竪穴住居跡及び出土遺物



第29図 ST120・ST127出土遺物

S T 126豊穴住居跡（第30図 図版15）

2区の東端、G A～G B-07～08区に位置する。住居の中央部で新旧2本の暗渠が交差しており、自身は後述のS T 128を切っている。明確な切り合いをもった住居跡はこの度の調査範囲内ではS T 126とS T 128が唯一の例である。

平面形は東西に長い方形を呈し、長軸は6.48m、短軸は5.13m、主軸方位はN-22°-Eを測る。覆土は5層が認められた。第1層は灰褐色シルトで白色微砂を含んでいる。第2層は褐色砂質土で白色微砂と小礫を含む。第3層はにぶい黄褐色シルト。第4層は褐色砂質土。第5層は灰黄褐色砂質土で白色微砂と小礫を含む。壁は緩やかに立ち上がり、残存する壁の高さは13cmを測る。住居の各隅に4本の柱が認められた。いずれも20cm程の円形を呈し、深さは約15cmを測る。

住居の北壁西隅に近く、炭の分布する範囲がある。北西隅部では、柱を取り巻くように炭が分布していることが観察された。量は少ないが、炭の分布が壁まで拡がり、住居内で完結することなどから、これも「類カマド」の範疇に含めておきたい。貯蔵穴などの施設は認められなかった。

遺物は西半に多く出土する。土師器のみであるが、細片が多く、図化し得たものはない。

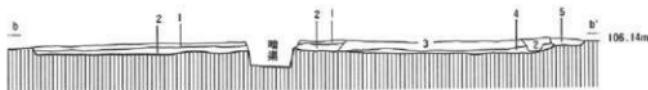
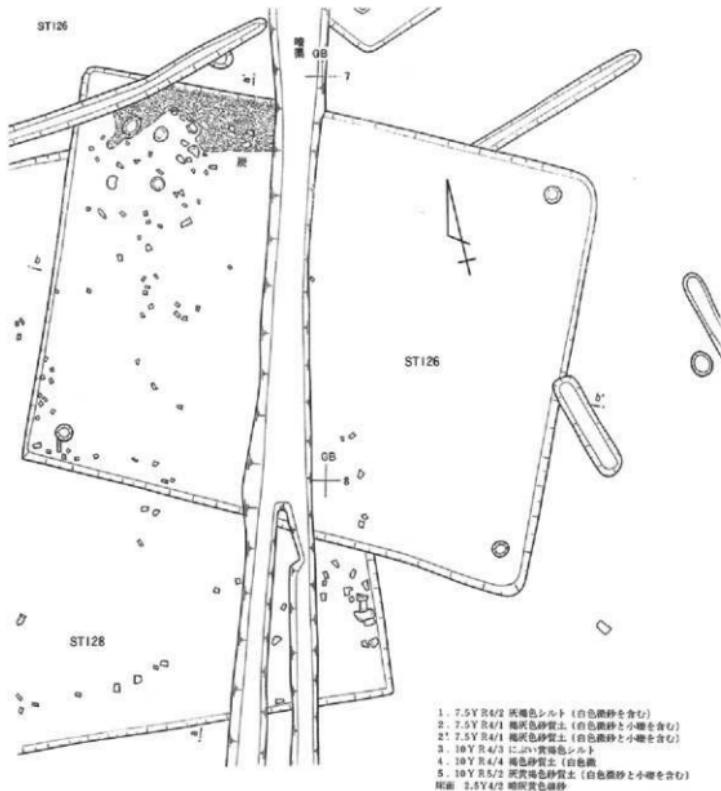
S T 128豊穴住居跡（第31図 図版15）

2区の東端、F F～G B-7～8区にまたがって位置する。東北部をS T 126に切られ、東壁の近くを2本の暗渠で切られている。平面形は南北にやや長い方形を呈し、長軸は7.23m、短軸は6.72m、主軸方位はN-3°-Eを測る。

覆土は6層を数える。第1層はにぶい黄褐色砂質土、第2層は暗褐色砂質土、第3層は暗褐色微砂、第4層は灰黄褐色微砂、第5層は灰黄褐色砂質土、第6層は黒褐色砂質土で炭が混入する。壁は緩やかに立ち上がり、残存する壁の高さは13cmを測る。柱穴は認められなかった。

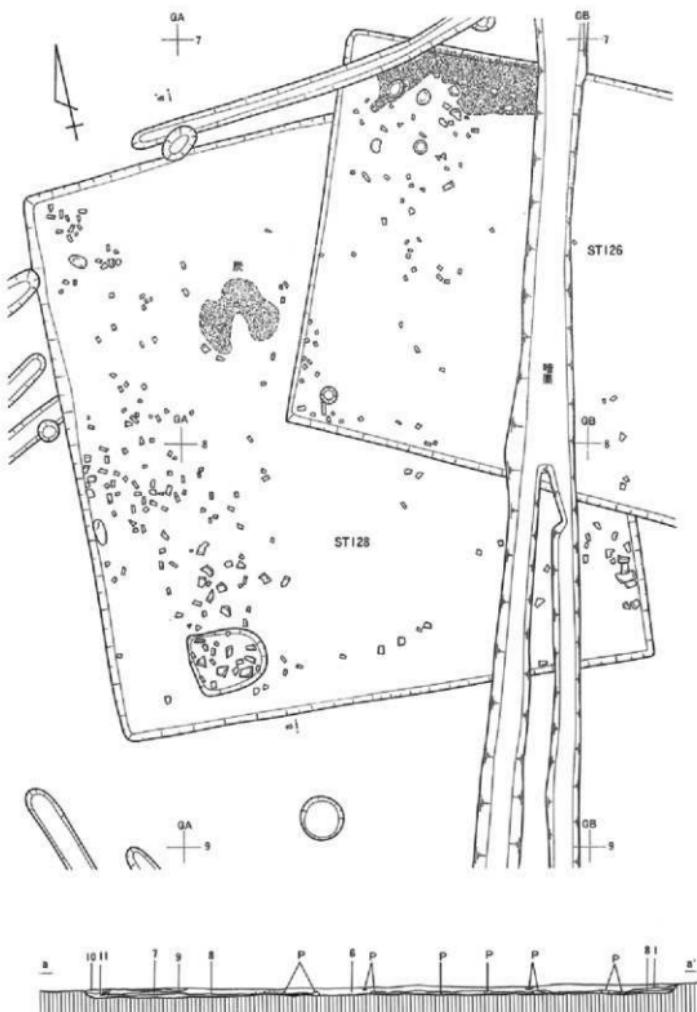
住居中央部から北西に寄ったところで炭の分布が認められるが、計1m弱と、その範囲が狭く、また壁からも2m近く離れているので、既述の「類カマド」等の煮炊きの施設に伴うものとは考えにくい。S T 126に切られて失われた部分に、或いは煮炊きの施設があつたのだろうか。

南西隅にE P 201落ち込みがある。長径90cm、短径80cm、深さ約25cmを測る落ち込みで、底部近くから、手捏ね土器（第32図146～148）が出土している。土師器の台付壺を思わせる形状を示し、指ナデを主体に調整が行われているが、上部が失われているので全容は不明である。これら3点が、いずれも器部を下にした正位で出土しており、本資料が祭器であることを考え合わせると、或いは意図的に上部を欠いた状態で埋納された可能性も考えられよう。遺物は、手捏ね土器の他に土師器壺（3点）、瓶（1点）を図化し得た。その他、口縁部が外反し、体部外面に綾杉状のヘラ描きが認められる（第42図 168）土器が出土しているが、種別、器形ともに不明である。



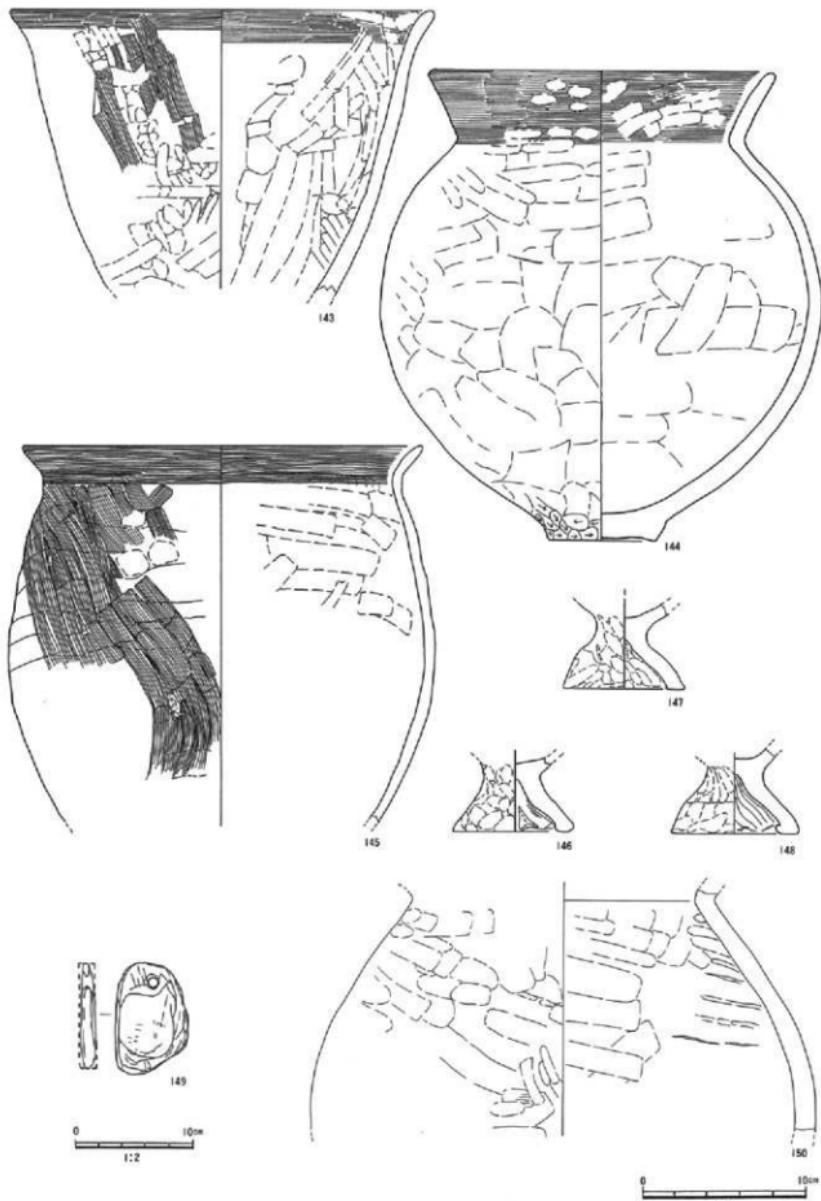
0 2m
1:60

第30回 ST126竪穴住居跡



1. SYRA/2 灰褐色シルト（白色歯砂を含む）
 6. IOY R4/2 に2-3mm黄褐色歯砂土
 7. IOY R3/3 喀褐色砂質土
 8. IOY R2/2 黄褐色砂質土
 9. IOY R5/2 天然褐色歯砂
 10. IOY R4/2 天然褐色歯砂土
 11. IOY R3/2 黑褐色砂質土（栗投入）
- 底面 IOY R3/3 喀褐色砂質土

第31図 ST128竪穴住居跡



第32図 ST126・ST128出土遺物

S T 129 穫穴住居跡（第33図 図版12）

2区の西寄り、E C-09区に位置する。すぐ西隣にはS T 115がある。平面形は南北にわずかに長く、幾分歪んだ方形を呈し、隅部は比較的丸味を帯びる。長軸4.92m、短軸4.77mを測り、主軸方位はN-83°-Wを測る。

覆土は5層を数える。第1層は黒褐色砂質土に褐灰色粗砂が混入するものである。第2層は黒褐色の微砂質土に灰黄褐色の粗砂が混入する。この層には一部に炭の混入が認められる。第3層と第4層は黒褐色の砂質土である。「標準土色帳」では第3層は10YR 2/2、第4層は10YR 2/3と、わずかに色調が異なる。第5層とした灰黄褐色砂質土は、住居跡の立ち上がり部分にわずかに残る覆土で、埋没開始時に堆積したものと思われる。

壁は床面との境で丸味を持ち、角度を持って立ち上がる。壁の高さは、現存するところで26cmを測る。床面は黒褐色を呈する砂質土からなり、覆土との識別が困難であった。

柱穴は4本認められた。いずれも30cm弱の円形を呈し、ほぼ対角線上に位置する。壁からの距離は、1m内外であるが、東壁に沿った2本は、東壁から50cmと、近接している。

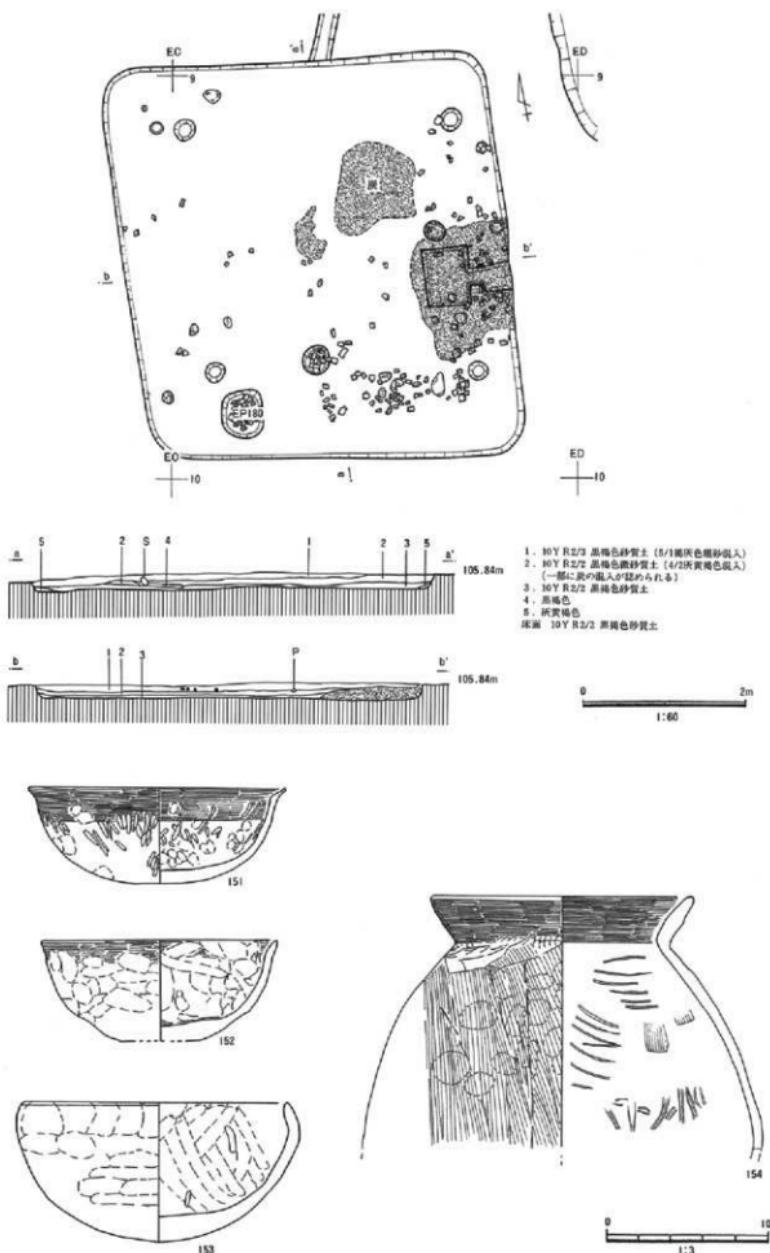
東壁中央南寄りに、厚いところで15cmほど炭が堆積しており、遺存状況から竈であろうと考えられたが、「カマド石」や焼土のような竈の施設と思われる痕跡は確認できなかった。しかし、状況を考えると、これも煮炊きのための施設と考えて良いのではないかと思われる。住居跡の南西隅部に、長径60cm、短径55cm、深さ約10cmを測るE P 180ピットが認められ、底面から土師器の破片が出土している。遺物は「頬カマド施設」の周辺と南壁に近くに分布する。土師器の壊（3点）と甕（1点）を図化し得た。

S T 4 穫穴住居跡（第34図 図版12）

2区の西寄り、E C-E D-11区に位置する。すぐ西にS T 3が位置する。東壁の間際を暗渠に切られる。平面形は東西に長い隅丸方形を呈し、全住居跡の中で、最も小さい住居跡である。長軸は2.7m、短軸は1.86m、主軸方位はN-85°-Wを測る。

覆土は2層を数える。第1層は黒褐色を呈する微砂質土、第2層は赤黒色を呈する粘質土である。壁は、床との境で丸味を持ち、角度を持って立ち上がる。残存する壁の高さは7cmを測る。床は他の住居跡と同様、きわめて軟らかく、炭などの分布も認められないため、検出は困難であった。柱穴や貯蔵穴などの施設は認められない。住居内は、土器片がわずかに出土したほかは何も認められず、5平方mという規模からも、また施設らしい施設を持たないという内容から言っても、通常の住居跡と考えることは困難である。

遺物は住居の東半に分布するが、土師器が数点遺存するのみで、しかも細片のみであり、図化し得たものはない。



第33図 ST129竪穴住居跡及び出土遺物

S T 100堅穴住居跡（第34図 図版15）

2区東寄りの南端、F C・FD-15区に位置する。北にわずかに開く方形を呈するが、南壁は調査区外に伸びるため不明である。東壁の間際を暗渠に切られ、S K198土壌に東壁を切られ、さらに北西部ではS B194掘立柱建物跡に切られている。規模は不明であるが、東西軸で軸長4.41mを測る。主軸方位はN-74°-Eを測る。

覆土は住居を覆うものとして5層が認められた。第1層は極暗赤褐色細砂、第2層は黒褐色微砂質土、第3層は黒褐色粘質土に灰褐色土が混入する。第4層は3層と同じ黒褐色粘質土であるが、やや粘性を帯びる。第8層とした灰褐色砂質土は住居南半の最上層を覆うと思われる。床面は、暗渠の断面を観察しても確認できず、遺物や炭の検出面を頼りに追究した。柱穴は北壁に沿って2本が検出された。

東壁の北寄りに、屋外に伸びる焼土と炭を確認した。東壁から50cmほど伸び、壁の部分で幅約30cmを測る。横断面は「U」字形を呈し、縦断面では中程が窪むことがわかった。最も深いところで約30cmを測る。覆土は3層が認められた。第5層とした黒褐色砂質土、第6層とした極暗赤褐色シルトは、いずれも焼土が混入する。また第7層とした赤黒色砂質土には炭の混入が認められる。位置、状況から竈の煙道と考えられる。竈の本体部分は暗渠の西側にまでは伸びていないことが観察され、暗渠によって失われたことが判明した。袖部は暗渠の断面を観察しても土色の識別が困難で、把握できなかった。また東壁は煙道部以南で特に土色が識別しにくくなり、検出できなかった。

遺物は床面に土師器が数点遺存していたが、全て細片で、図化するには至らなかった。

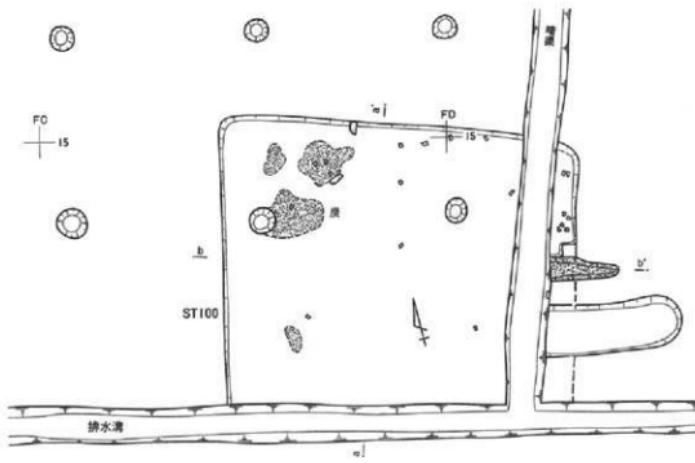
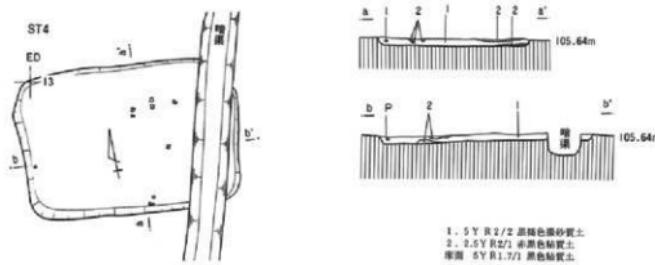
S T 110堅穴住居跡（第35図 図版13）

2区のほぼ中央北寄り、FA-08区に位置する。南北に長い方形を呈し、中央を暗渠が継続している。長軸の長さは4.26m、短軸は4.2m、主軸方位はN-38°-Eを測る。

覆土は2層を数える。第1層は黒褐色砂質土、第2層は暗赤灰色微砂質土である。壁は床との境で丸味を持ち、角度を持って立ち上がる。壁の現存する高さは18cmを測る。床面は黒褐色を呈するシルトで軟らかく、検出は困難であった。住居の四隅に径25cm程の柱穴が確認された。

北壁と東壁に接して2カ所に炭の遺存が認められた。北壁側の炭は、半径1.3mほどの半円を描くように分布しており、暗渠によって失われた部分を復元すると約2.6平方mになる。東壁側の炭は壁面を底辺とする二つの三角形を描くように遺存しており、合計で0.6平方m程度である。いずれも炭の範囲は壁からわずかに立ち上がっている。明確な施設は伴わないが、炭が濃密に堆積しており、その堆積は住居の中で完結している、という遺存状況から煮炊きに使われた領域と考え、「類カマド」と仮定しておく。

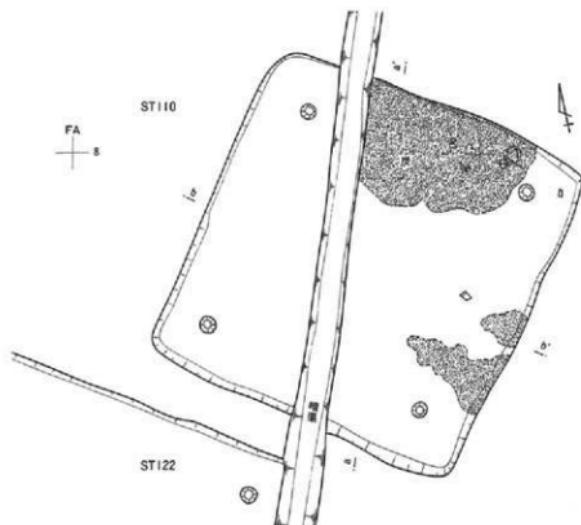
遺物は、炭の周囲から土師器が出土しているが、量は少ない。細片が多く、図化し得たのは、土師器壺の上半部（第35図 155）1点である。



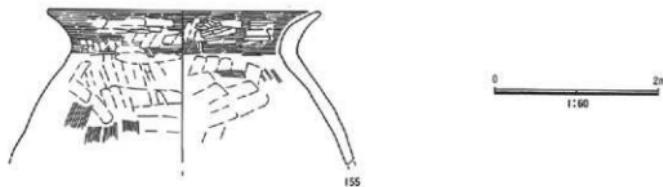
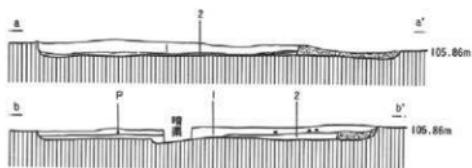
1. 2.5Y R2/2 新暗赤褐色細砂質土
 2. 5Y R1.7/1 黑褐色細砂質土
 3. 7.5Y R2/2 黑褐色粘質土 (5Y R1.7/2灰褐色混入)
 4. 7.5Y R3/2 黑褐色粘質土 (3よりやや粘性に富む)
 5. 7.5Y R2/2 黑褐色粘質土 (施土混入)
 6. 7.5Y R2/2 新暗赤褐色シルト質土 (焼土混入)
 7. 2.5Y R1.7/1 非黑色細砂質土 (灰混入)
 8. 5Y R4/2 深褐色細砂質土
- 座面 10Y R2/2 黑褐色シルト質土



第34図 ST4・ST100竪穴住居跡



1. 5Y R3/10 黒褐色砂質土
2. 1.5Y R1/3 暗赤褐色砂質土
床面 7.5Y R2/1 黒褐色シルト質土



0 10cm
1:3

第35図 ST100竪穴住居跡及び出土遺物

S T 121 竪穴住居跡（第36図 図版13）

2区のほぼ中央北寄りのFA-07区に位置する。平面形は長軸4.62m、短軸4.44mと南方向にわずかに長い方形を呈し、主軸はN-28°-Eを測る。北隅部で新しいピットに切られている。

覆土は2層を数える。第1層は黒褐色微砂質土、第2層は褐灰色砂質土である。第2層は住居跡のほぼ中央部に部分的に見られ、断面図によって自然堆積とは堆積状況を異にしていることがうかがわれる。

壁は緩やかに立ち上がるが、おそらく削平を受けているため、壁の立ち上がりは約10cmしか遺存しておらず、上部の傾斜は不明である。床は軟らかく、検出が困難である。柱穴は住居跡のほぼ対角線上に4本を検出し得た。径25~30cmを測る円形を呈する。長軸方向で壁から1.2m、短軸方向で1m離れる。カマド、炉等の施設は認められない。また遺物は、土師器の破片が数点遺存するのみである。

S T 122 竪穴住居跡（第37図 図版14）

2区のほぼ中央、EF-08区~FA-09区に位置する。平面形は東西に長い方形を呈し、長軸方向で5.13m、短軸方向で4.47mを測る。主軸はN-56°-Wを測る。東北隅部を暗渠に切られている。

覆土は第2層とした暗赤灰色微砂質土が全面を覆っており、その中に暗赤褐色砂や灰黃褐色砂質土、暗灰色砂質土などがブロック状に入る。壁は東面や北面では緩やかに立ち上がり、西面や南面ではほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は壁近くに4本検出された。壁の立ち上がり部と柱穴との間隔は約50cmを測る。いずれも対角線上に位置するが、東南隅の柱穴だけが西に寄る。EP190ピットの存在と関わっているものと考えられる。EP190は、住居の主軸と方向を異にしており、N-84°-Eを測る。長軸方向で60cm、短軸方向で55cm、深さは約25cmを測る。覆土は住居跡の覆土と同じ暗赤灰色微砂質土で、同じ時期に埋積したものと考えられる。覆土中から無底式の甌が出土している。

S T 124 竪穴住居跡（第36図 図版14）

2区のほぼ中央南寄り、EF-11区に位置する。東西に長い方形を呈するが、北西隅をつまんで引っぱり出したような歪みを持つ。長軸方向で3.48m、短軸方向で3.21m、主軸はN-72°-Wを測る。北壁や西壁を新しいピットに切られている。

覆土は3層からなる。第1層が黒褐色を呈する砂質土、第2層が褐灰色を呈する砂質土、第3層が黒色を呈する砂質土である。第3層は北面近くに遺存するもので、おそらく埋積開始時の堆積と考えられる。覆土と地山が酷似し、床が軟らかいため、床面の検出は困難であった。壁は緩やかに立ち上がり、住居跡の対角線上に4本の柱穴が検出された。柱穴と壁の距離は50~90cmを測る。カマドや炉、貯蔵穴などの施設は認められない。遺物は、土師器の小片が数点出土しているだけである。

S T 123堅穴住居跡（第38図 図版14）

2区中央のE F-10区に位置する。南西-北東にわずかに長い方形を呈し、長軸の長さは5.3m、短軸の長さは5.04m、主軸方位はN-39°-Eを測る。北東隅部や東辺を溝状遺構やピットなどによって切られている。

覆土は4層を数えるが、基本的には2層からなっている。最下層は、第2層とした微砂が混入する黒褐色粘質土で、薄く住居跡全体を覆っている。その上に堆積する第1層は、黒褐色微砂質土で、この層が主体を占めている。他に極暗赤褐色粘質土(第3層)や暗赤褐色砂質土(第4層)などが部分的に堆積する。壁は床との境で丸味を持ち、ほぼ垂直に立ち上がる。壁の高さは遺存部分で約18cmを測る。

柱穴はほぼ対角線上に4本が認められた。いずれも直径約20~25cmの円形を呈し、深さは約20cmを測る。柱穴と壁との距離は1m弱であるが、南東隅の柱穴は、東壁から約1.2m、南壁から1.3mはなれており、他の柱穴より内側に入り込んでいる。

北壁の中央東寄りに炭が集中して分布していることが認められた。遺存しているのは炭だけで、袖石などの施設は認められなかったが、炭の分布状況はS T 1堅穴住居跡やS Tなどと類似しており、住居の中で分布が完結していることから、これも煮炊きの施設であろうと思われる。S T 110堅穴住居跡やS T 129堅穴住居跡などと同じ「類カマド」と考えておきたい。炭の分布する周囲には、貯蔵穴などは見られない。

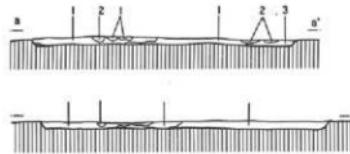
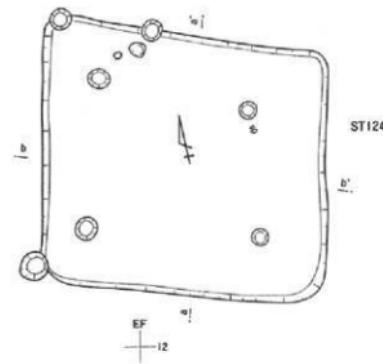
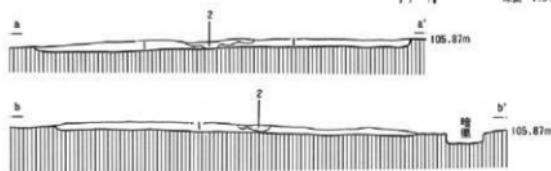
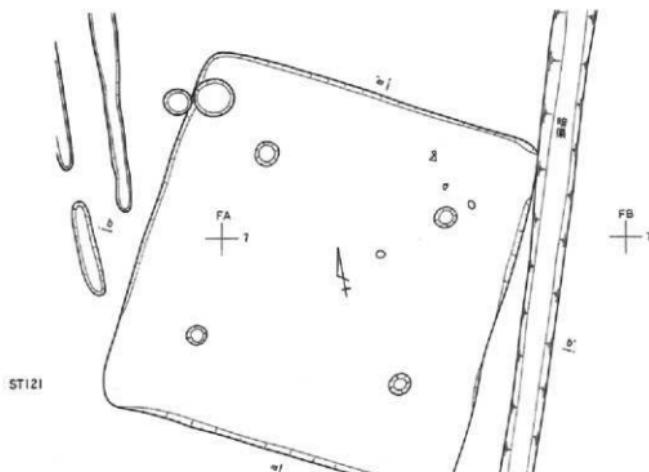
遺物は住居全域に分布するが、住居跡東半部、特に東通りの柱の中間に多く分布する。出土した遺物は土師器と須恵器が見られる。図化し得た土器は、土師器は环が6点、甕が1点である。环は口縁部が一旦くびれて外反するタイプと、丸味を持ってそのまま口縁部に至るタイプ、口縁部が内湾ないし内傾するタイプが見られ、バラエティに富む。須恵器は壺が1点ある。肩部のみで、全容は不明である。

S T 125堅穴住居跡（第39図 図版13）

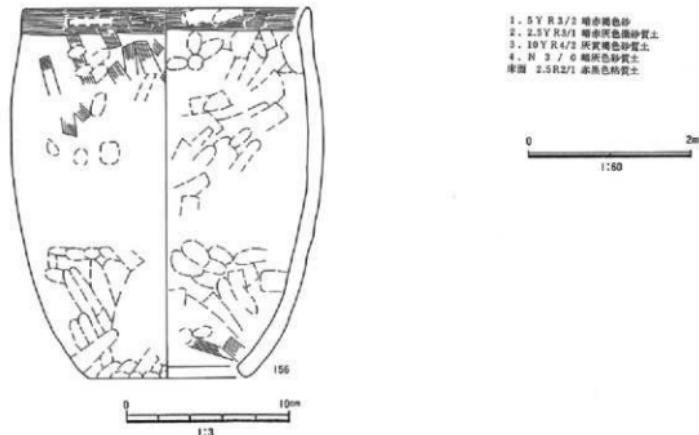
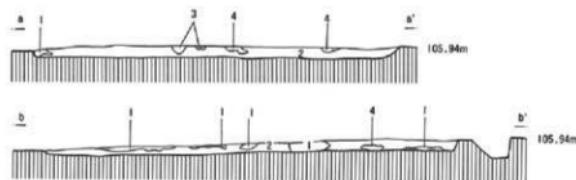
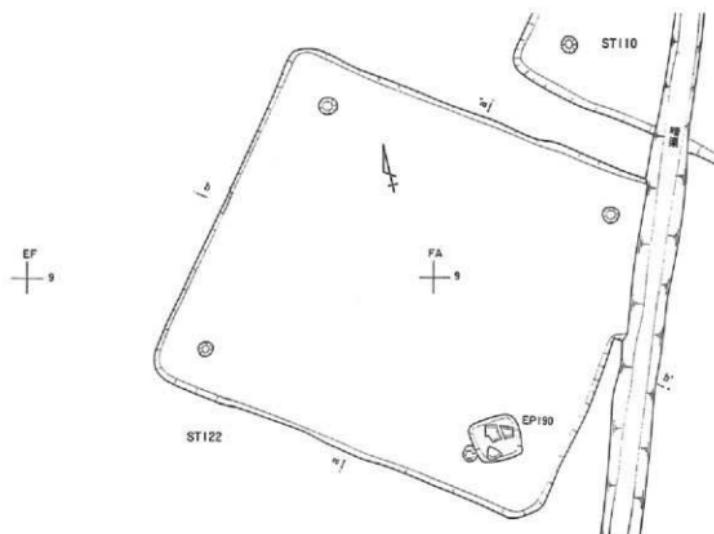
2区ほぼ中央、F A-10区～F B-11区に位置する。平面形は南北に長く、北東-南西方向にわずかにつぶれた平行四辺形を呈する。規模は長軸方向で8.13m、短軸方向で6.06mを測る。面積は少數以下を丸めると約49平方mとなる。この面積は、S T 2 S 堅穴住居跡やS T 128堅穴住居跡と並んで、検出し得た住居跡の中で最大級の面積を有する。主軸方位はN-8°-Eを測る。

覆土は2層が認められた。第1層は黒褐色を呈する微砂質土、第2層は灰褐色を呈する砂質土である。削平を受けているために壁の残りは浅く、残存する範囲で、高さは7cmを測る。壁は床との境で丸味を持ち、比較的緩やかに立ち上がる。床は比較的検出が困難であった。柱穴は確認できなかった。カマドや炉、貯蔵穴などの施設は認められなかった。

遺物は土師器のみである。住居内のほぼ全域に分布しているが、細片が多く、図化し得たものはなかった。

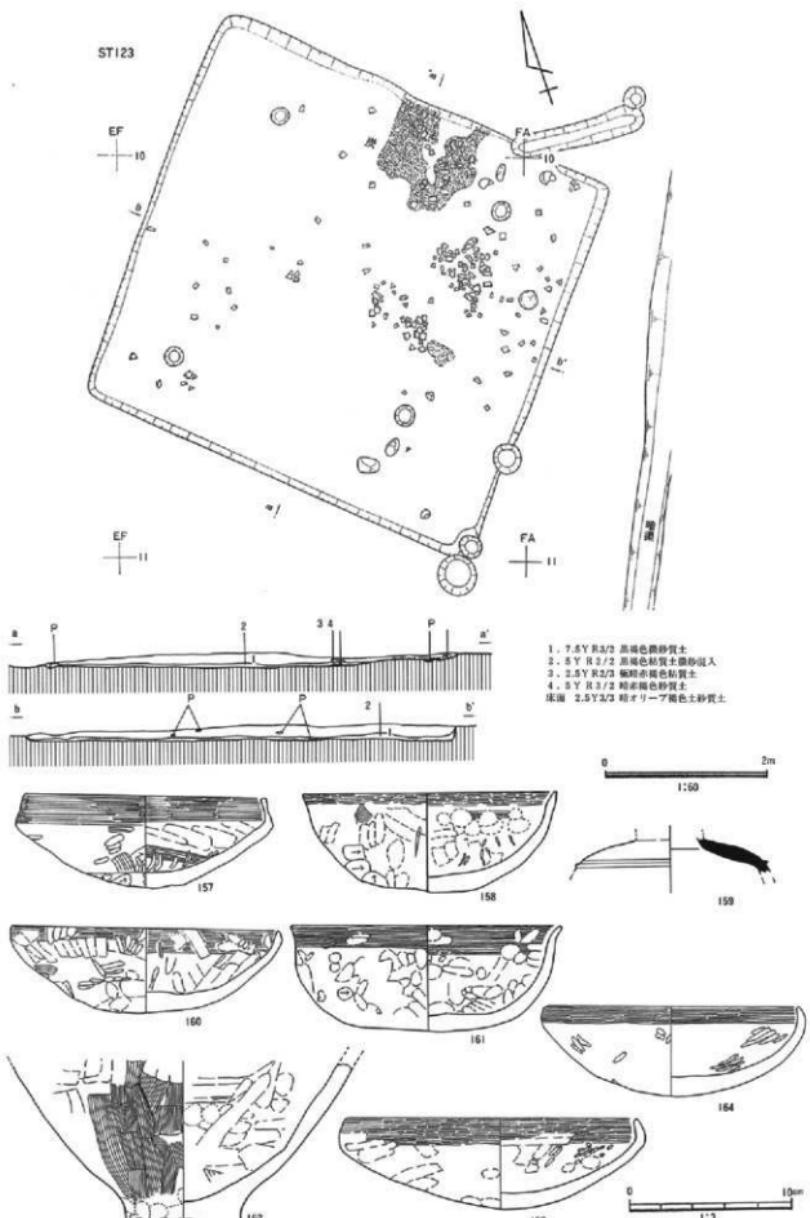


第36図 ST121・ST124竪穴住居跡

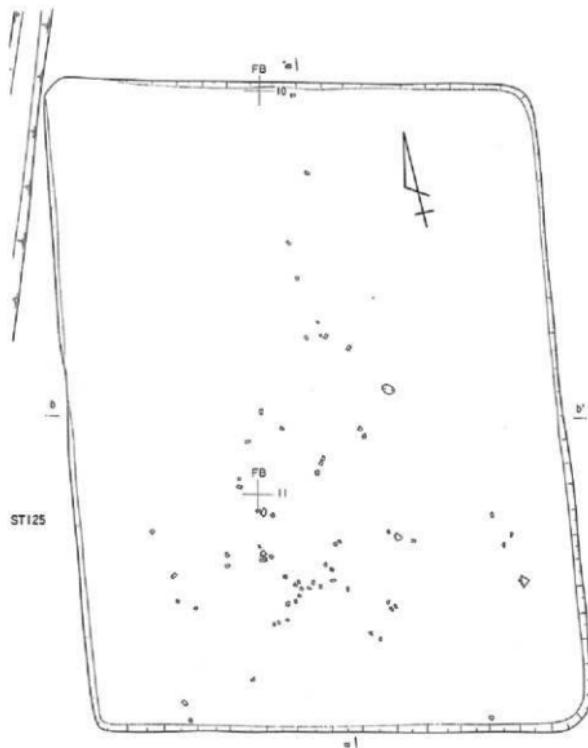


- 1. 5Y R 3/2 墓赤褐色土
- 2. 2.5Y R 3/1 墓赤褐色砂質土
- 3. 10Y R 4/2 墓黃褐色砂質土
- 4. N 3 / 0 墓灰褐色質土
- 床面 2.5R 2/3 床黑色砂質土

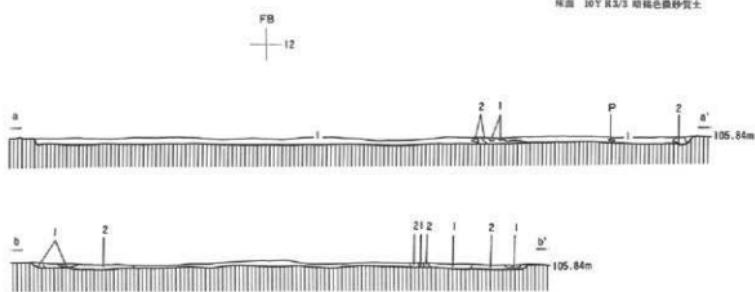
第37図 ST122堅穴住居跡及び出土遺物



第38図 ST123堅穴住居跡及び出土遺物



1. 7.5Y R3/1 黑褐色鐵砂質土
2. 5Y R4/2 灰褐色鐵質土
3. 10Y R3/3 紅褐色鐵砂質土



0 2m
1:60

第39圖 ST125竪穴住居跡

4 挖立柱建物跡

S B194 挖立柱建物跡（第40図 図版15）

2区の東寄り南端に位置し、F B-14区に北西隅が、F C-15区に南東隅がある。南軒通りの東側の2本の掘方がS T100豊穴住居跡を切っている。

当初、梁間が少なくとも2間以上にはなるものと想定し、南側を追究したが、柱穴らしき痕跡は認められず、梁間1間の建物として認識するに至った。

梁間1間、桁行4間の東西棟で、桁行全長は北側軒面で9.45m、南側軒面で9.55mを測り、梁間は西妻で2.3m、東妻で2.35mを測る。棟の方向はN-79°-Wを測る。掘方を持たず、掘り上げた柱穴に直接柱を立てたものである。柱穴は30~40cmの円形を呈し、深さは約15cmを測る。

柱間は、桁行は西から2.4m、2.4m、2.37m、2.39mを測る。東方の柱間が少し間詰まりであるが約8尺ととらえることができる。梁間は、東西妻の中央値を探ると2.325mとなり、約7.8尺となる。建物はほとんどの場合完尺で作られていることを考えると、梁間もほぼ8尺ととらえることがで、梁間・桁行とともに8尺の柱間をもつ建物と考えられる。梁間1間の建物がどのような機能を持っていたのか、建築時期を推定する遺物も得られておらず、S B194については全く不明である。ただ、このような建物が1棟だけ単独で存在することは通常考えられないので、本調査区の南に、この建物と関連をもつ施設が存在することも考えられる。

5 その他の遺構

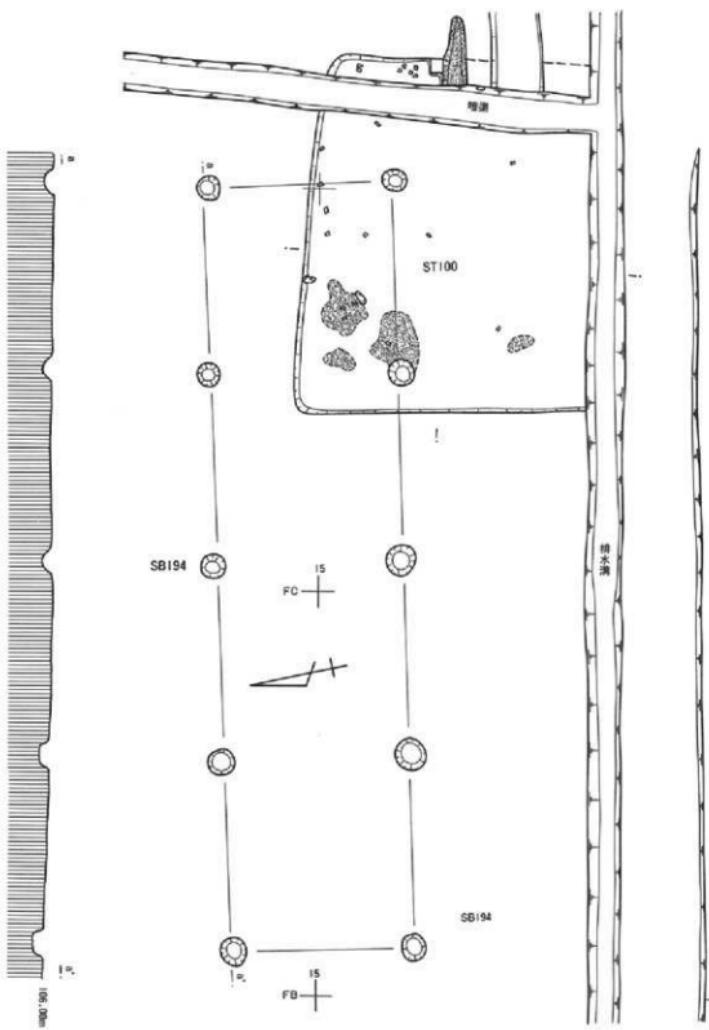
S D 5 溝跡（第4図 図版5）

1区の東南隅からS T 1豊穴住居跡の北隅部を切り、南辺中央付近で調査区外に抜ける溝跡である。幅約50cm、深さ約45cmを測り、底面から丸味を持って上縁端部に至る。覆土は2層が観察された。第1層は、白色微砂の混入する黒褐色土。第2層は黄灰色土が混入する暗褐色粘土である。方向はN-82°-Eを測り、底面の標高を比較すると17/1,000の勾配を持って西に下ることがわかった。遺物の出土は認められなかった。

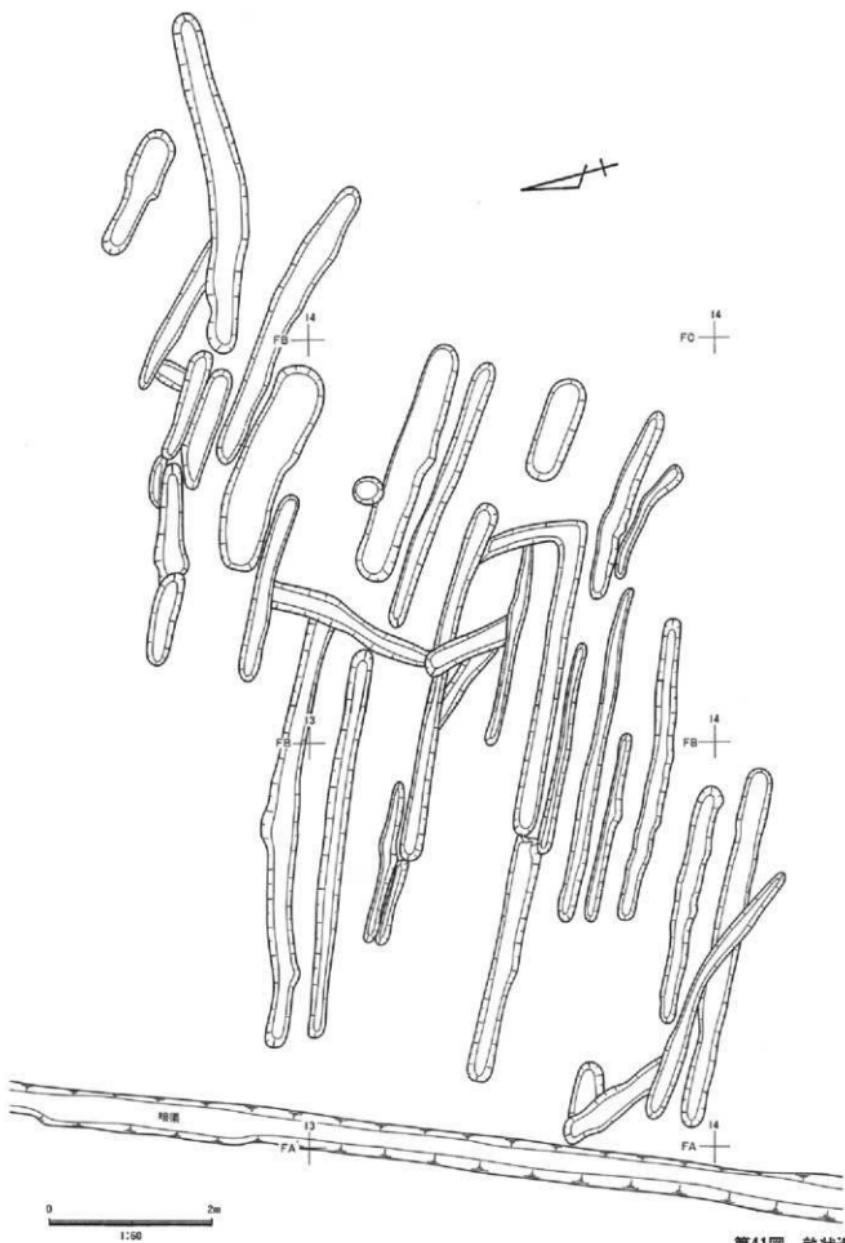
畝状遺構（第41図 図版15）

本稿で「畝状遺構」としたものは、短い溝状を呈する遺構が、近接した範囲に、幾条か平行して並んでいるものを総称したもので、「畑の畝」に類似することから、このように仮称している。性格や機能が不明であるため、外観の類似性のみから名付けているので、あるいはそれぞれに性格が異なるのかも知れない。

畝状遺構は計6群が認められた。いずれも2区の東半に認められ、それぞれ方向もまちまちである。第41図に示したものは、2区の南端近くにあり、F A~F C-12~14区にまたがる。長さや幅が種々あって明確なまとまりをもたないが、方向については規則性をうかがえる。明確に分割できるほど整然とではないが、大きく2つの方向にくくれる。東寄



第40図 SB194振立柱建物跡
1:50



第41図 骨状造構



第42図 造構外出土遺物及び縄文・弥生・平安時代遺物

表1 土器観察表(1)

辨別 No	種別	器種	類型	計測値(%)			調整技法		出土地	R P番号	備考
				口径	底径	器高	内面	外面			
第4回	1	土師器	環	B1a	138	38	62	ナデ	ナデ	S D85	
	2	土師器	甕	B3	150	64	235	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	S D86	52
第5回	3	土師器	環	A1	127		60	ナデ	ナデ	S T 1	56
	4	土師器	環	A2	129	(25)	(68)	ナデ	ナデ	S T 1	63
	5	土師器	環	A3	142	18	64	ナデ	ナデ	S T 1	70
	6	土師器	環	A3	153	39	57	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 1	58
	7	土師器	環	A2	143	16	77	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 1	61
	8	土師器	環	A1	132	32	73	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 1	
	9	土師器	環	B3	158	21	67	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 1	65
	10	土師器	環	B1b	159	27	60	ナデ,ミガキ	ナデ,ケズリ	S T 1	64
	11	土師器	環	C1	120		49	ナデ	ナデ,ミガキ	S T 1	55
	12	土師器	甕	C1	108	64	122	ナデ	ナデ,ケズリ	S T 1	60
	13	土師器	甕	Ala	190	50	115	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	S T 1	62
	14	土師器	甕	A2b	260	60	234	ナデ	ナデ,ミガキ	S T 1	63
	15	土師器	甕	B2	178	67	290	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	S T 1	67
	16	土師器	甕	B1a	163	44	257	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目,ケズリ	S T 1	79
	17	土師器	甕	B1a	182	60	281	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	S T 1	58
第6回	18	土師器	環	A1	134	25	63	ナデ	ナデ,ミガキ	S T 7	82
	19	土師器	環	A1	137	25	53	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	S T 2	219
	20	土師器	環	A2	140		62	ナデ,ミガキ	ナデ,ハケ目	S T 2	8
	21	土師器	環	A1	142		57	ナデ,ミガキ	ナデ,ハケ目	S T 2	224
	22	土師器	環	A2	128		69	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 2	221
	23	土師器	環	A3	138		54	ナデ	ナデ	S T 2	5
	24	土師器	環	A3	142		64	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ,ケズリ	S T 2	237
	25	土師器	環	A2	147		61	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 2	10
	26	土師器	環	A2	143		60	ナデ	ナデ	S T 2	220
	27	土師器	環	A2	153	53	55	ナデ,ミガキ	ナデ,ケズリ	S T 2	230
	28	土師器	環	A2	135		58	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 2	231
	29	土師器	環	A3	179		56	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 2	222
	30	土師器	環	A1	121		70	ナデ,ミガキ	ナデ,ケズリ	S T 2	12
	31	土師器	環	A3	145		55	ナデ	ナデ,ミガキ	S T 2	244
第11回	32	土師器	環	A3	162		64	ナデ	ナデ	S T 2	224
	33	土師器	環	B3	146	30	59	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 2	20
	34	土師器	環	A1	149		61	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 2	214
	35	土師器	環	A2	151		53	ナデ	ナデ,ハケ目	S T 2	224
	36	土師器	環	C2	146	46	53	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 2	233
	37	土師器	環	B2	146	31	57	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 2	236
	38	土師器	環	B2	149		56	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 2	225
	39	土師器	環	B2	152	43	53	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 2	234
	40	土師器	環	B1a	132		64	ナデ	ナデ	S T 2	17
	41	土師器	環	B2	143		45	ナデ,ミガキ	ナデ,ケズリ	S T 2	13
	42	土師器	環							S T 2	二次加熱
	43	土師器	環	B1a	168		66	ナデ,ミガキ	ナデ	S T 2	12
	44	土師器	高環				39	ナデ	ミガキ	S T 2	
第12回	45	土師器	甕	C	88	51	161	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ,ケズリ	S T 2	121
	46	土師器	甕	D				ナデ,ハケ目	ナデ,ミガキ	S T 2	7
	47	土師器	甕	C	83			ナデ,ミガキ,ハケ目	ナデ,ミガキ	S T 2	222
	48	土師器	甕	C1	140	55	127	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	S T 2	1
	49	土師器	環	A1	150			ナデ	ナデ,ハケ目	S T 2	224
	50	土師器	甕	C1	107			ナデ	ナデ,ミガキ,ケズリ	S T 2	216

表1 土器観察表(2)

排 因 No	種 別	器 種	類型	計測値(?)			調整技法		出土地	R P 番号	備 考	
				口径	底径	器高	内 面	外 面				
第12回	51	土師器	甕	Dla	204	97	373	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	ST 2	11	
	52	土師器	甌	A1a	239	61	171	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	ST 2	1	
	53	土師器	甌	A2b	239			ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	ST 2	232	
	54	土師器	壺	B1		73		ナデ	ナデ,ミガキ	ST 2	11	
	55	土師器	甕	B3	187	79	300	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	ST 2	3	
	56	土師器	壺	B1		63		ナデ	ナデ,ハケ目	ST 2	15	
第14回	57	土師器	甕	B3	184	55	296	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	ST 2	239	
	58	須恵器	甌			89		ロクロ目	ロクロ目	ST 2	115	
	60	土師器	壺	A				ナデ	ナデ	ST 2		
	65	土師器	壺	B1		78		ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目,ミガキ	ST 2	4	
第16回	66	土師器	环	A1	161	29	55	ナデ	ナデ	ST 3	206	
	67	土師器	环	A3	(152)	10	(55)	ナデ,ミガキ	ナデ	ST 3	205	
	68	土師器	环	A2	147	6	64	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	ST 3	38	
	69	土師器	环	A3	(158)	12	63	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ,ケズリ	ST 3	31	
	70	土師器	环	A1	164	10	65	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	ST 3	36	
第17回	71	土師器	环	A3	174	17	60	ナデ,ミガキ	ナデ	ST 3	27	
	72	土師器	环	A3	157		55	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ,ケズリ	ST 3	25	
	73	土師器	环	Bla	134	18	58	ナデ,ミガキ	ナデ,ケズリ	ST 3	30	
	74	土師器	环	B1b	159		69	ナデ,ミガキ	ナデ	ST 3	203	
	75	土師器	环	A1	168	50	60	ナデ,ミガキ	ナデ,ケズリ	ST 3	201	
	76	土師器	高环	B2	171	39	127	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	ST 3	26	
	77	土師器	高环	C1	177		138	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	ST 3	27	
	78	土師器	高环	C2	173	34	116	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	ST 3	101	
	79	土師器	高环	C1	182	37	136	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	ST 3	28	
	80	土師器	高环	C2	175	39	134	ナデ,ミガキ,ケズリ	ナデ,ミガキ,ケズリ	ST 3	31	
	81	土師器	高环	C2	174	35	124	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	ST 3	199	
第18回	82	土師器	甕	B1b	118			ナデ,ハケ目	ナデ,ミガキ,ケズリ	ST 3	37	
	83	土師器	壺	B2	142	40		ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	ST 3	39	
	84	土師器	壺	C	77			ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ,ケズリ	ST 3	32	
	85	土師器	甌	B2b	223	96	273	ナデ	ナデ,ハケ目,ケズリ	ST 3	205	
	86	土師器	甌	A1b	213	73	212	ナデ	ナデ,ケズリ,ミガキ	ST 3	29	
第19回	87	土師器	甕	C2	182			ナデ	ナデ,ハケ目	ST 3	202	
	88	土師器	甕	C1	173			ナデ	ナデ,ミガキ	ST 3	24	
	89	土師器	甕	C3	168	71	251	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	ST 3	34	
	90	土師器	甕	C2	128			ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	ST 3	30	
	91	土師器	甕				39	ハケ目	ハケ目,ケズリ	ST 3	211	
	92	土師器	甕	C2	202			ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	ST 3	39	
第22回	93	土師器	环	A3	143	32	59	ナデ,ミガキ	ナデ,ケズリ,ミガキ	ST 118	122	
	94	土師器	环	A2	147	33	53	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	ST 118	112	
	95	土師器	环	A3	155	32	63	ナデ,ミガキ	ナデ,ケズリ	ST 118	118	
	96	土師器	环	B1b	137	30	54	ナデ	ナデ,ハケ目	ST 118	124	
	97	土師器	环	A2	163	32	67	ナデ	ナデ,ケズリ	ST 118	125	
	98	土師器	环	B2	145		68	ナデ	ナデ,ケズリ	ST 118	119	
	99	土師器	环	A1	149		53	ナデ,ミガキ	ナデ,ケズリ,ミガキ	ST 118	122	
	100	土師器	环	C2	144	28	47	ナデ,ミガキ	ナデ	ST 118	123	

表1 土器觀察表(3)

埠 団 No.	種 別	器 種	類型	計測値(%)			調整技法		出土地	R P番号	備 考
				口径	底径	器高	内 面	外 面			
第22団	101	土師器	壺	B1b	136	42	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	S T118		
	102	土師器	壺	C2	138	30	50	ナデ、ミガキ	ナデ	S T118	112
第22団	103	土師器	高壺				ナデ	ナデ、ミガキ	S T118		
	104	土師器	甌	A2a	173	69	125	ナデ	ナデ	S T118	117
第22団	105	土師器	甌	D		18	92	ナデ	ナデ、ケズリ、ミガキ	S T118	114
	106	土師器	甌			58		ハケ目	ナデ、ケズリ	S T118	127
第23団	107	土師器	甌	A2b	296	86	282	ナデ	ナデ、ハケ目	S T118	53
	110	土師器	壺	A1	139	36	63	ナデ、ミガキ	ナデ	S T115	138
第23団	111	土師器	壺				ナデ		S T115	193	
	112	土師器	壺	A3	135		50	ナデ、ミガキ	ナデ、ケズリ	S T115	141
第23団	113	土師器	壺	B2	125		58	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	S T115	151
	115	土師器	手捏土器				ナデ	ナデ	S T115		
第23団	116	土師器	壺	B1a	140	33	53	ナデ、ミガキ	ナデ、ケズリ、ミガキ	S T115	139
第24団	117	土師器	甌	A	139		174	ナデ、ハケ目	ナデ、ケズリ、ミガキ	S T115	150
	118	土師器	甌	A2b	244	88	191	ナデ	ナデ、ハケ目	S T115	149
第24団	119	土師器	甌	Bla		62		ナデ、ハケ目	ケズリ	S T115	140
	120	土師器	甌	A	188	(26)	277	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ミガキ	S T115	140
第24団	121	土師器	甌	Bla		52		ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	S T115	152
	122	須恵器	甌			105	150	ロクロ目	ケズリ	S T115	143
第26団	123	土師器	壺	B1b	138		62	ナデ、ミガキ	ナデ、ケズリ	S T132	94
	124	土師器	壺	B3	130	54	58	ナデ	ナデ、ハケ目、ミガキ	S T132	88 初庄痕
第26団	125	土師器	甌			91	80	ナデ	ナデ、ミガキ	S T132	103
	126	土師器	高壺	D	83			ナデ、ハケ目	ナデ、ミガキ	S T132	94
第26団	127	土師器	高壺	A		40		ナデ	ナデ、ミガキ	S T132	91
	128	土師器	甌	B2b		96		ミガキ	ナデ、ケズリ	S T132	133
第28団	129	土師器	甌	A				ナデ	ナデ	S T132	
	131	土師器	甌	A2a	158	53	152	ナデ、ハケ目	ナデ、ミガキ	S T120	175
第28団	132	土師器	甌	E	120			ナデ	ナデ	S T120	177
	133	土師器	壺	A2	148	21	67	ナデ、ミガキ	ナデ	S T120	178
第29団	134	土師器	甌	C3	183	66	265	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	S T120	180
	135	土師器	不明			129		ナデ	ナデ、ケズリ	S T127	
第29団	136	土師器	壺	B2	140	19	52	ナデ、ミガキ	ナデ	S T127	
	137	土師器	壺	B2	156		62	ナデ	ナデ、ケズリ	S T127	185
第29団	138	土師器	壺	B1c	118	67		ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	S T127	172
	139	土師器	甌	C3	175			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	S T127	
第32団	141	土師器	甌	A				ナデ	ナデ	S T127	
	142	土師器	甌	A2b	265					S T127	170
第32団	143	土師器	甌	A2b	257			ナデ、ミガキ	ナデ	S T128	186
	144	土師器	甌	Bla	205	67	288	ナデ	ナデ、ケズリ	S T128	188
第32団	145	土師器	甌	C3	244			ナデ	ナデ、ハケ目	S T128	183
	146	土師器	手捏土器			34		ナデ	ナデ	S T128	197 脚部のみ
第32団	147	土師器	手捏土器			34		ナデ	ナデ	S T128	196 脚部のみ
	148	土師器	手捏土器			34		ナデ	ナデ	S T128	195 脚部のみ
第32団	149	土師器	甌					ナデ	ナデ	S T128	188
	150	土師器	甌							S T128	
第33団	151	土師器	壺	A2	157	38	58	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	S T129	102
	152	土師器	壺	A3	142	(48)	62	ナデ	ナデ	S T129	
第33団	153	土師器	壺	B1b	161		84	ナデ、ミガキ	ナデ	S T129	116
	154	土師器	甌	B2	158			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	S T129	
第35団	155	土師器	甌	B2	165			ナデ	ナデ、ハケ目	S T110	166

表1 土器観察表(4)

鉢図 No	種 別	器 種	類型	計測値 (mm)			調整技法		出土地	R P番号	備 考	
				口径	底径	器高	内 面	外 面				
第37図	156	土師器	甌	B2b	173	98	225	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	S T122	164	
第38図	157	土師器	甌	C1	146		57	ナデ、ミガキ	ナデ、ケズリ、ミガキ	S T123	162	
	158	土師器	甌	A2	154		61	ナデ、ミガキ	ナデ、ハケ目、ケズリ	S T123	110	
	159	須恵器	壺					ロクロ目	ロクロ目	S T123		
	160	土師器	甌	B1b	162		51	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	S T123	157	
	161	土師器	甌	A2	163	57	65	ナデ、ミガキ	ナデ、ケズリ	S T123	158	
	162	土師器	甌				71	ナデ	ナデ、ハケ目	S T123	162	
	163	土師器	甌	B1b	177		55	ナデ、ミガキ	ナデ	S T123	161	
	164	土師器	甌	B1b	156		55	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	S T123	162	
第42図	167	土師器	甌	C1	144	44	125	ナデ	ナデ、ハケ目	F E-14		
	168	不明	不明					ナデ	ハケ目	S T128		刻文あり
	169	土師器	把手?							G B-14		
	170	須恵器	甌					ロクロ目	底部へラ起し	F E-15		
	171	弥生土器	壺							S T118		
	172	弥生土器	壺							S T118		
	173	弥生土器	壺							S T115		
	174	弥生土器	壺							D E-98		
	175	弥生土器	壺							D E-99		
	176	弥生土器	壺							S T115		
	177	弥生土器	壺							D E-98		
	178	縄文土器	深鉢				89		B E-13			
	179	須恵器	壺		117					G B-09		
	180	須恵器	甌		113					G B-08		
	181	須恵器	甌							S T123	156	

表2 石製品・土製品・木製品等観察表

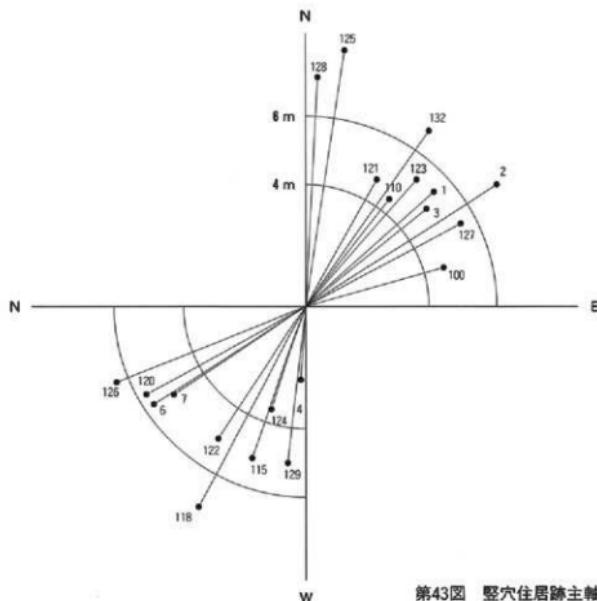
鉢図番号	種 別	器 種	計測値 (mm)	出土地			R P番号	備 考
				長さ	径・幅	厚さ		
第14図	59	石製品	砾石	120	34	33	S T2	194
	61	石製品	紡錘車	45		12	S T2	109
	62	石製品	紡錘車	42		10	S T2	198
	63	石製品	紡錘車	43		13	S T2	100
	64	石製模造品	粗製円板	29	25	3	S T2	108
第22図	108	石製模造品	勾玉	23	13	4	S T118	96
	109	木製品	火燭忤	(110)	8		S T118	95
第23図	114	石製品	勾玉	21	10	5	S T115	105
第26図	130	石製品	砾石	111	71	44	S T132	134
第29図	140	土製品	紡錘車	44	36	18	S T127	
第32図	149	石製模造品	粗製円板	45	29	7	S T126	
第42図	165	石製模造品	粗製円板	32	27	4	X-9	246
	166	石製模造品	粗製円板	39	38	5	G B-09	
	179	石器	剝片	88	46	13	S T118	99
	180	石器	石墨	22	11	5	S T118	106
	181	石器	スクレイパー	47	27	13	S T118	98

表3 穫穴住居跡観察表(1)

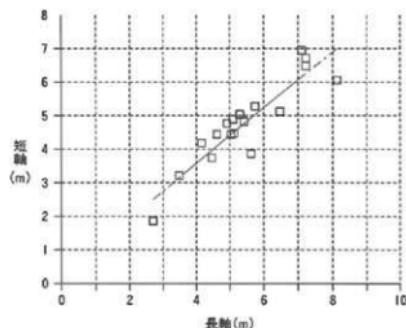
遺構番号	平面図	主軸方位	規模(m)	深さ(cm)	壁	ピット貯蔵穴	カマド炉	柱穴	出土遺物(主なもの)	備考
S T 1	方形	N-47-E	5.22×	30		垂直	北東壁東寄り		土師器 (壺4、瓶2、壺9)	S D 5と重複 南側調査区外不明
S T 2	不正方形	N-57-E	7.05×6.9	16	ゆるやか	ピット1	北東壁東寄り		土師器 (壺23、高壺1、壺5、壺6、瓶3) 須恵器甌 訪鉢車 磁石 舷津	焼失家屋 敷き詰められた石
S T 3	不正方形	N-51-E	4.47×3.75	15	垂直		東隅 (引き出された形)	4	土師器 (壺12、高壺6、壺2、壺7、瓶2)	焼失家屋
S T 4	隅丸方形	N-85-W	2.7×1.86	7	急斜				土師器破片のみ	
S T 6	方形	N-34-E	5.67×3.87	20	垂直		中央部焼け跡		土師器破片のみ	
S T 7	方形	N-33-E	5.04×4.44	10	垂直				土師器(壺)	
S T 100	不正方形	N-74-E	4.41×	10	急斜		東壁焼造検出		土師器破片のみ	S B 194と重複 南側調査区外不明
S T 110	方形	N-38-E	4.26×4.2	18	急斜			4	土師器(壺)	
S T 115	方形	N-20-E	5.1×4.89	26	急斜		北壁東寄り		土師器 (壺4、壺4、瓶3) 須恵器(甌) 勾玉	カマドの作り替え (北壁から東壁へ)
S T 118	長方形	N-61-W	7.23×6.48	20	急斜	ピット2 (貯蔵穴 か)	東壁南寄り 焼造検出		土師器 (壺10、高壺、 瓶2、壺) 植物の種子 (ピットより) 石製模造品 (勾玉) 石燃 火鐵杵	
S T 120	不正方形	N-30-W	5.43×5.28	8	ゆるやか		南東壁西寄り	4	土師器 (壺2、壺2、瓶) 舷津	
S T 121	方形	N-28-E	4.62×4.44	10	ゆるやか			4	土師器破片のみ	
S T 122	方形	N-56-W	5.13×4.47	14	垂直	ピット1		4	土師器(瓶)	
S T 123	方形	N-39-E	5.16×5.04	18	垂直		北東面東寄り	4	土師器 (壺5、壺) 須恵器(甌)	

表3 竪穴住居跡観察表(2)

遺構番号	平面図	主軸方位	規模(m)	深さ(cm)	壁	ピット貯藏穴	カマド炉	柱穴	出土遺物(主なもの)	備考
S T124	方形	N-72-W	3.48×3.21	10	ゆる やか			4	土師器破片のみ	
S T125	方形	N-8-E	8.13×6.06	7	ゆる やか				土師器破片のみ	
S T126	方形	N-22-E	6.45×5.13	13	ゆる やか		北壁西寄り	4	石製模造品 (粗製円板) 土師器破片のみ	S T128と切り合う
S T127	方形	N-61-E	5.43×4.83	15	ゆる やか	ピット2	北東面中央	4	土師器 (壺3、甕2、瓶)	
S T128	不正方形	N-3-E	7.23×6.72	13	ゆる やか	ピット1			土師器 (甕2、瓶)	S T126と切り合う
S T129	方形	N-83-W	4.92×4.77	18	急斜	ピット2	東壁南寄り	4	土師器 (壺3、甕)	
S T132	不正方形	N-34-E	6.69×	6	垂直		北東壁焼け跡 北袖のみ検出か		敷き詰められた石 西側調査区外不明	



第43図 竪穴住居跡主軸方位と長軸一覧



第44図 住居跡散布図

表4 積穴住居跡分類表

住居跡	主軸方位	主軸 分類	玄武き施設 タイプ	位置	コード		長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (m ²)	比率
					コード	位置				
S T 128	N - 3° - E	11			50	7.23	6.72	49	93%	
S T 125	N - 8° - E	11			60	8.13	6.06	49	75%	
S T 115	N - 20° - E	12	カマド石	北→東	15	5.1	4.89	25	96%	
S T 126	N - 22° - E	12	窓カマド	北左	21	6.48	5.13	33	79%	
S T 121	N - 28° - E	12			60	4.62	4.44	21	96%	
S T 132	N - 34° - E	13	窓カマド	北右	23	6.69				
S T 116	N - 38° - E	13	窓カマド	北右	23	4.26	4.2	18	99%	
S T 123	N - 39° - E	13	窓カマド	北右	23	5.3	5.04	27	95%	
S T 7	N - 33° - E	13			60	5.04	4.44	22	88%	
S T 6	N - 34° - E	13			60	5.63	3.87	22	69%	
S T 1	N - 47° - E	14	カマド石	北右	13	5.22				
S T 2	N - 57° - E	14	カマド石	北右	13	7.05	6.9	49	98%	
S T 3	N - 51° - E	14	カマド石	北脚	14	4.47	3.75	17	84%	
S T 127	N - 61° - E	15	窓カマド	北左	21	5.43	4.83	26	89%	
S T 100	N - 74° - E	15	窓逃戸	東右	48	4.41				
S T 120	N - 30° - W	22	窓カマド	東右	26	5.75	5.28	30	92%	
S T 122	N - 56° - W	24			60	5.13	4.47	23	87%	
S T 118	N - 61° - W	25	窓道戸	東右	38	7.23	6.48	47	90%	
S T 124	N - 72° - W	25			60	3.48	3.21	11	92%	
S T 129	N - 83° - W	26	窓カマド	東右	28	4.92	4.77	23	97%	
S T 4	N - 85° - W	26			60	2.7	1.86	5	69%	

表5 類型別土器跡出土状況

器種	S T 128	S T 125	S T 115	S T 126	S T 121	S T 132	S T 110	S T 123	S T 6	S T 7	S T 1	S T 2	S T 3	S T 127	S T 100	S T 120	S T 122	S T 118	S T 124	S T 129	S T 4
主軸方位コード	11	11	12	12	12	13	13	13	13	13	14	14	14	15	15	22	24	25	25	26	
玄武き施設コード	50	60	15	21	60	23	23	23	60	13	13	14	21	48	28	60	38	60	28	60	
环			A1							○	○	○	○								○
			A2							○	○	○	○				○		○	○	
			A3	○						○	○	○	○				○		○	○	
			B1a		○					○	○	○	○				○		○	○	
			B1b			○				○	○	○	○				○		○	○	
			B1c																		
			B1d																		
			B2	○																	
			B3			○															
			C1				○														
			C2						○												
高环	A									○											
	B1										○										
	B2											○									
	C1											○									
	C2												○								
瓶	A1a									○	○										
	A1b										○										
	A2a										○										
	A2b	○	○								○	○									
	B1a																				
	B1b																				
	B2a																				
	B2b									○											
壺	A									○											
	B1										○										
	B2											○									
	C											○	○								
	D											○									
	E													○							
甕	A																				
	B1a	○	○																		
	B1b																				
	B2									○											
	B3										○										
	C1											○	○								
	C2												○								
	C3	○											○	○							
手掘土器		○	○																		

○: 標出出土

りに位置する一群は、N-33°-Wを測り、それよりやや整然と並ぶ、西寄りの一群は、N-64°-Wを測る。遺物は土器が数点出土しているが、いずれも細片であり、図化するには至らなかった。

S G 208河川跡

2区の北端、E D-04区～G A-02区に位置する。当初は後世の擾乱と考ていたが、試掘溝を設定し、一部を試掘したところ、村山高瀬川の旧河道と考えるに至った。堆積土は試掘した範囲では暗黒褐色砂質土の1層のみである。底面が緩く北に下がっていることが認められたが、遺物は認められなかった。

IV まとめと考察

このたびの調査において、21軒の竪穴住居跡を検出し得た。竪穴住居跡の在り方を考えるとき、いろいろなアプローチが可能であるが、ここでは長軸・短軸の比率、面積、主軸方位、煮炊き施設の形態と位置、出土土器の組成などから見て行く。

表4に各住居跡の主軸方位や規模などの一覧を掲げた。短軸の長軸に対する割合を示す軸長比は、80%を境としてそれ以上の値をもつ第1類と、80%未満の値を示す第2類の二つに区分し得る。

竪穴住居跡のうち、短軸長の不明なS T 1、S T 100及びS T 132の3例を除いた18例の、長軸と短軸をプロットしたものが第44図である。これを見ると長軸と短軸は左下がりにはば直線状に分布し、きわめて強い相関を持つことがうかがえる。回帰式を求めるとき、 $y = 0.8x + 0.285$ で直線回帰する。回帰直線の右下に、「はずれ値」として認識できる4例が、やはり同じような傾きを持って分布する。これらは軸長比で第2類とした一群である。

主軸方位に関しては、磁北から東に振れるグループと、西に振れるグループに分かれる。磁北からの振れを15度刻みで分類した。類別コードを昇順に並べると、次の煮炊き施設の類別とも概ね沿うように思われる。

竪穴住居跡には、煮炊きの施設を伴うものがある。調査によって得られた知見をもとに、煮炊き施設の形態と位置を次のように類別した。2桁の類別を第1分類、1桁の類別を第2分類とし、これを組み合わせて2桁のコードを作成した。分類基準は次の通りである。

- 10類 「カマド石」を持つもの（裸の石を3～4個設置して煮炊き施設とするもの）
- 20類 「頬カマド」を持つもの（炭又は焼土が堆積し、住居の壁でその分布が止まるもの）
- 30類 短い煙道を伴ったカマドを持つ。
- 40類 比較的長い煙道を伴ったカマドを持つ。
- 50類 切り合いによって、煮炊き施設の有無が不明なもの。
- 60類 煮炊き施設が認められないもの。
- 1類 北壁～北東壁に位置し、壁に向かって中央左寄りに設置されるもの。
- 2類 北壁～北東壁に位置し、ほぼ中央に設置されるもの。

3類 北壁～北東壁に位置し、壁に向かって中央右寄りに設置されるもの。

4類 北壁～北東壁の、壁に向かって右隅に設置されるもの。

5類 北壁から東壁へ移築されたもの

6類 東壁～南東壁に位置し、壁に向かって中央左寄りに設置されるもの。

7類 東壁～南東壁に位置し、壁のほぼ中央に設置されるもの。

8類 東壁～南東壁に位置し、壁に向かって中央右寄りに設置されるもの。

調査によって得た土師器を分類し、住居跡毎の分布状況を見たのが表5である。土師器の分類にあたっては「岩切鴻ノ巣遺跡」(『東北新幹線関係遺跡調査報告書—I』宮城県教育委員会ほか、昭和49年)のそれに概ね準じている。分類基準は次のようになる。紙数の都合で、個々の土器を例示することはできないが、表1の類型欄に明示してある。

[坏] A類 口縁部がくびれて外反し、内面に稜を持つ一群

1類 内弯するもの

2類 ほぼ直立するもの

3類 外傾するもの

B類 全体に丸みを持って立ち上がる一群

1類 口縁部が内弯するもの

a類 内弯の度合いが緩いもの

b類 内弯の度合いが強いもの

c類 口縁端部がまるく厚いもの

2類 口縁部がほぼ直立するもの

3類 口縁部が外傾するもの

C類 口縁部が屈曲する一群

1類 屈曲点から上が内傾するもの

2類 屈曲点から上がほぼ直立するもの

[高坏] A類 坏部不明。柱状部が筒状を呈し、壠部途中の上面に段を持つ

B類 底部と体部の境に段を持つ。柱状部は僅かに開き、内部にシボリメを残す

1類 体部が直線的に外傾するもの

2類 体部が丸みを持って立ち上がるもの

C類 底部と体部の境に角を持つ。柱状部は僅かに開き、内部にシボリメを残す

1類 体部が直線的に外傾するもの

2類 体部が丸みを持って立ち上がるもの

[頸] 最大径の位置、段の有無、孔の形式による分類を組み合わせる。

A類 最大径が口縁部にあるもの

B類 最大径が胴部にあるもの

1類 口縁部と体部の境に複合口縁状の段を持つもの

2類 単純口縁で段を持たないもの

- a類 単孔式
 - b類 無底式
- [基] A類 丸底を呈するもの
- B類 頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲して外反するもの
- 1類 体部が球形を呈するもの
 - a類 法量が大きい
 - b類 法量が小さい
 - 2類 肩部からなだらかに胴部に統くもの
 - 3類 長胴のプロポーションを持つもの
- C類 頸部から口縁部にかけて緩やかに外反するもの
- 1類 胴径が器高とほぼ同じか器高を上回るもの（法量は小さい）
 - 2類 器高が胴径より大きいもの（法量は小さい）
 - 3類 器高が胴径より大きいもの（法量は大きい）
- [壺] A類 有段口縁のもの
- B類 体部が球形を呈するもの（口縁部は不明）
- 1類 体部と底部の境が明瞭なもの
 - 2類 体部と底部の境が明瞭でないもの
- C類 単純口縁で体部が橢円形のもの
- D類 単純口縁で体部が算盤玉形に近くつぶれるもの
- E類 単純口縁で頸部のすばまりが弱いもの（口縁部はわずかに外傾）

本遺跡の土器の特徴として、内黒処理をした土器が見られないこと、いわゆる南小泉II式期の特徴を持つ土器のみによって組成されること、そして、わずかではあるが須恵器の出土が見られること、などがあげられる。

出土量の少ない高环について見ると、S T132はS T 3より古い要素を持ち、S T 2はS T 3より新しい要素を持つ。しかし、環B 1 b類と環B 2 b類がS T132とS T 3とで出土しており、時期差を語るほど際立った様相の違いは見られない。唯一切り合っているS T 128とS T126については、S T 126からの土器の出土がないため、比較の材料を得られなかった。土器の出土は住居跡によって粗密があり、同一レベルでは論じられないが、土器からの時期差はあまりうかがえない。

以上の要素を総合すると、長軸と短軸の比率がかなりつよい相関を持つこと、主軸方位による住居跡の特徴がとらえにくいくこと、土器の形態に際立った差違が認められないことなどから、かなり近接した時期に當まれたムラであると考えられる。とくに土器の在り方から、その上限を5世紀後半とし、6世紀初頭までは至らない時期、5世紀末頃を下限とした、約半世紀間に存続したムラと考えておきたい。なお、前述した主軸方位による分類と煮炊き施設による分類は、少ない時期差の中で展開された住居の変遷を考える指標とは思われるが、現段階では資料が充分でなく、この周辺の類例の増加を俟ちたい。

報告書抄録

ふりがな	しもやなぎAいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	下柳A遺跡発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第38集						
編集者名	尾形與典・小関真司・高柳健一						
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL0236-72-5301						
発行月日	西暦1996年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
しもやなぎ 下柳A	やまがたけん 山形県 やまがたし 山形市 おおあざあおやまと 大字青柳 あざかみやまと 字上柳	6201 市町村 遺跡番号	152 38度 17分 38秒	140度 21分 02秒	19950424 ~ 19950811	5,000m ²	県立保健 医療短期 大学 (仮称) 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下柳A	集落跡	古墳時代 中期	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 溝 竪条造構 土塁	21軒 1棟 1条 6群 5基	土師器(壙 高壙 壺 塙 瓶 横甕)須恵器(甕 壺 壺) 石製品(紡錘車 石鎌 砥 石 勾玉 スク レイバー 剥片 石製模造品[勾玉 粗製円板]) 土製品(紡錘車 ミニチュ ア土器) 木製品(火鑛件) 自然遺物(植物種子[山椒 瓜 花萼 胡桃]) 縄文土器(深鉢) 弥生土器(壺)	県内最古の発火具 (火鑛件)が出土。 高瀬川扇状地端部の 低湿地に立地するこ とから、縄文時代・ 弥生時代の遺物は本 遺跡跡形成前の氾濫 堆積物と考えられる。	

図 版



下柳A遺跡遠景（南から）



鍬入れ式（西から）



重機粗掘状況（北から）



面整理状況（西から）



測図準備状況（南西から）



造構査作業状況（北から）



記録作業状況（南から）



空撮状況（東から）



調査終了状況（南から）



調査説明会状況（西から）



S T 1 土層断面



1 区遺構検出状況（西から）



ST 1 遺物出土状況（南から）



ST 1 遺物出土状況（北西から）



ST 1 カマド断面（東から）



ST 1 カマド支脚部分（南から）



ST 1 実掘状況（東から）



S T 6 完掘状況（北西から）



S T 7 完掘状況（南西から）



SD 5 完掘状況（西から）



1区完掘状況（西から）



1区完掘状況（北から）



基本層序（2区）



2区造構検出状況（南から）



2区造構検出状況（南から）



2区造構検出状況（南から）



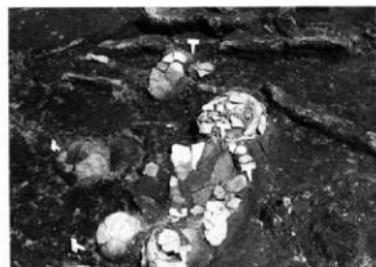
2区造構検出状況（西から）



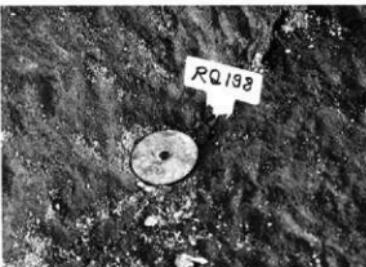
S T 2 炭化材・遺物出土状況（北東から）



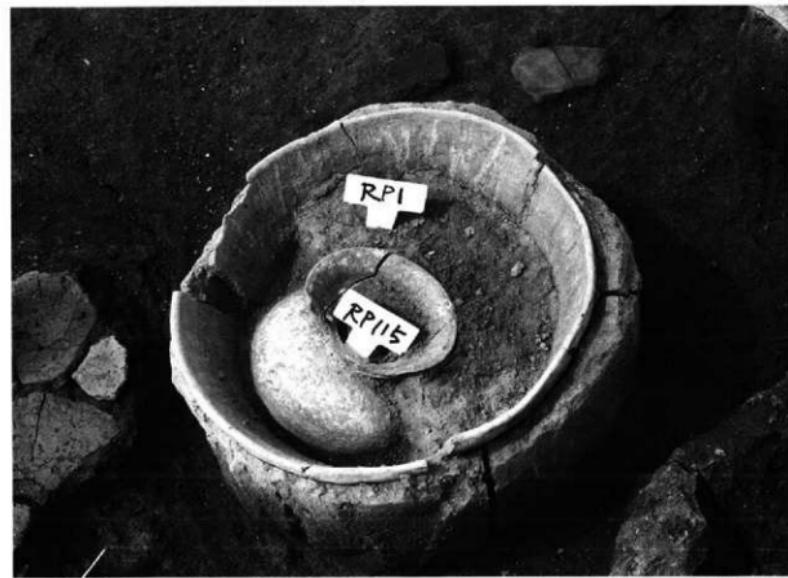
S T 2 炭化材・遺物出土状況（北東から）



S T 2 遺物出土状況（東から）



R Q 198出土状況（北から）



R P 1・R P 115出土状況（東から）



S T 2 造物出土状況（南から）



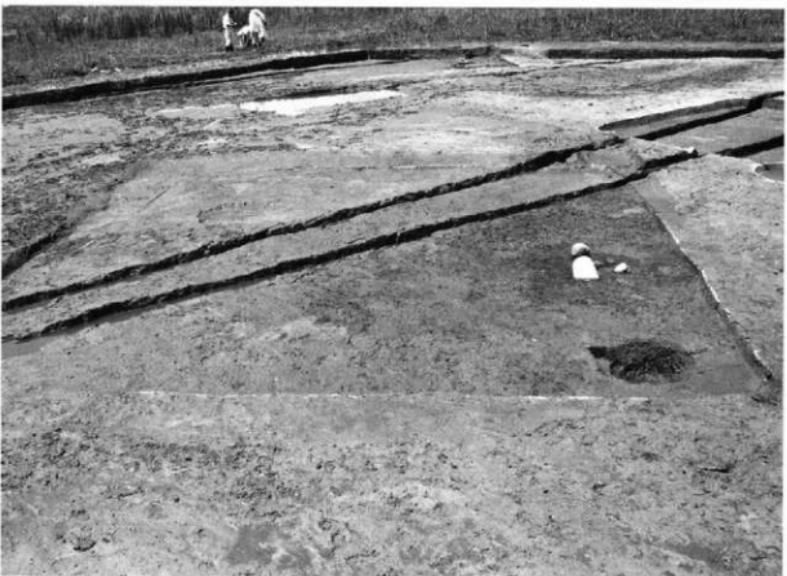
S T 2 カマド検出状況（南西から）



S T 2 土器重なり状況（北から）



S T 2 カマド支脚部分（南西から）



S T 2 完掘状況（南東から）



ST 3 遺物・炭化物出土状況（南から）



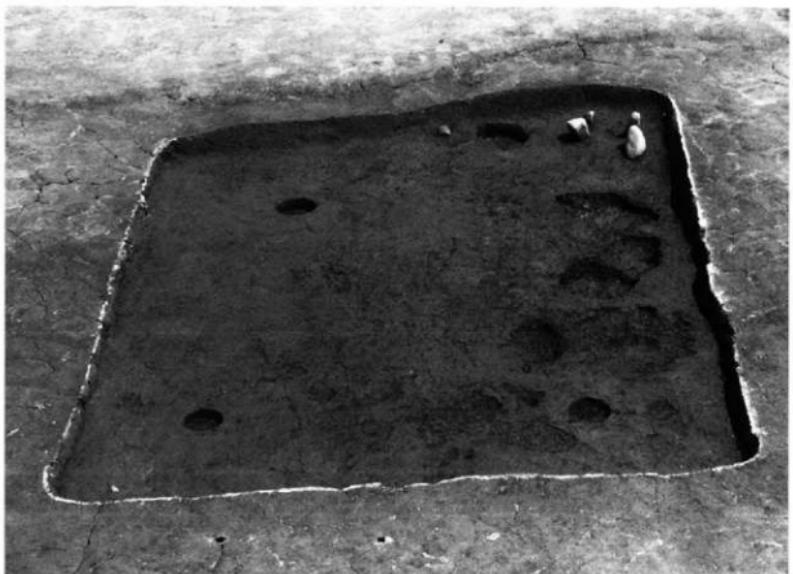
ST 3 炭化物出土状況（南から）



ST 3 カマド（北東から）



ST 3 遺物出土状況（東から）



ST 3 完掘状況（南から）



S T118遺物出土状況（北から）



E X186半載状況（北から）



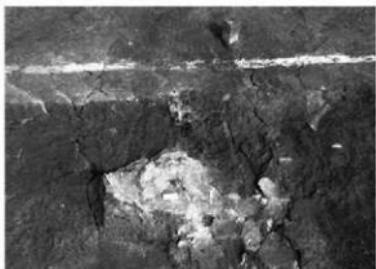
R P118・R P119出土状況（北東から）



R N120取りあげ作業状況（東から）



S T118完掘状況（東から）



E L 178検出状況（西から）



E L 178土層断面（北から）



R Q 96出土状況（北から）



R P 114出土状況（北から）



R P 53 + R P 117出土状況（南から）



R Q 100出土状況（南から）



R Q 108出土状況（北から）



R Q 109出土状況（南から）



S T 115遺物出土状況（東から）



S T 115完掘状況（東から）



E L 204完掘状況（東から）



R Q 105出土状況（北から）



S T 129完掘状況（東から）



E P 180遺物出土状況（北から）



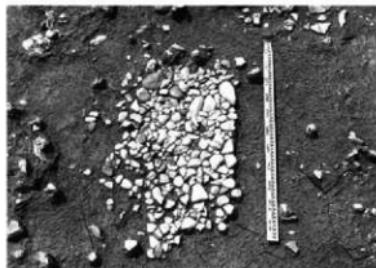
E P 185遺物出土状況（西から）



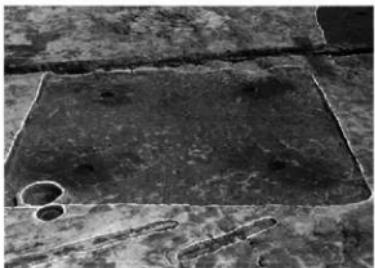
S T 4完掘状況（南から）



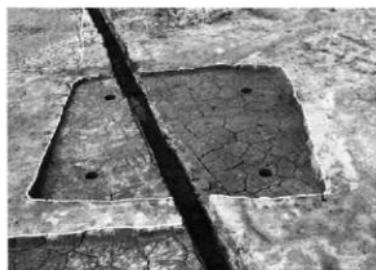
S T132遺物出土状況（北から）



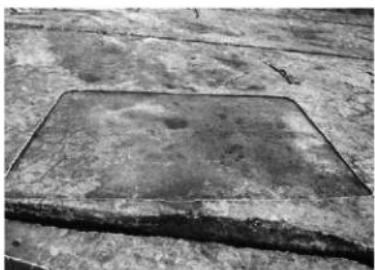
S X178検出状況（東から）



S T121完掘状況（西から）



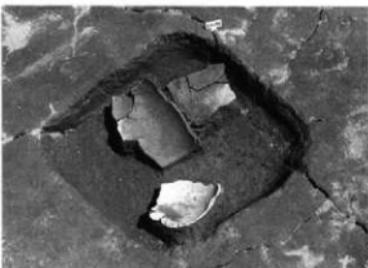
S T110完掘状況（南から）



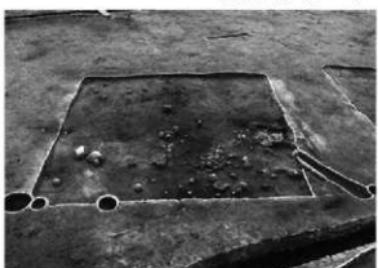
S T125完掘状況（西から）



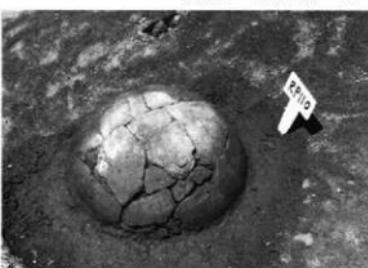
S T 122発掘状況（西から）



E P 190遺物出土状況（南から）



S T 123遺物出土状況（東から）



R P 110出土状況（東から）



S T 124発掘状況（西から）



S T 120発掘状況（南西から）



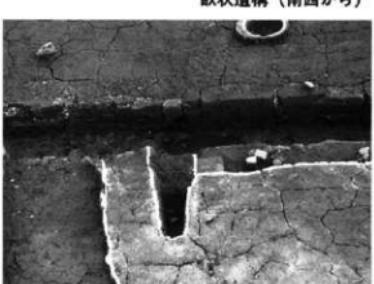
S T 129発掘状況（南西から）

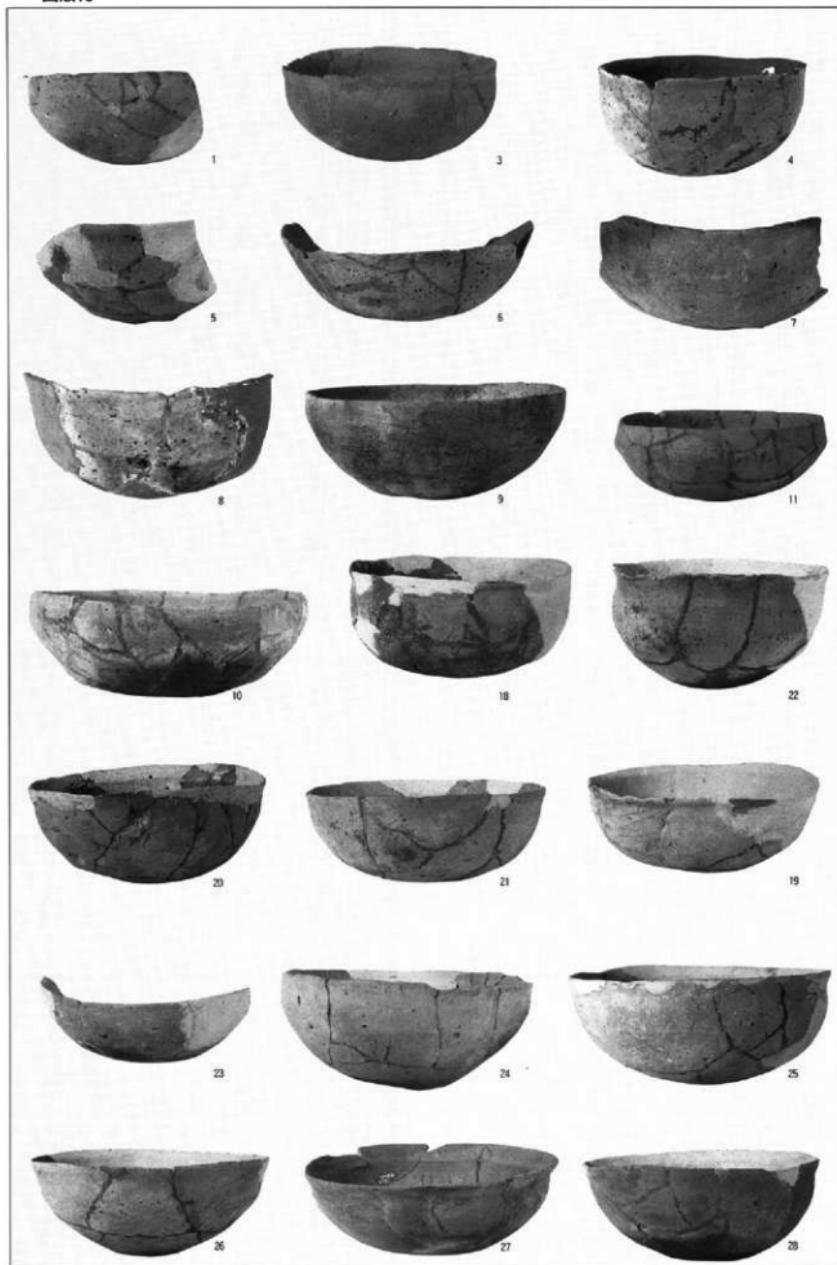


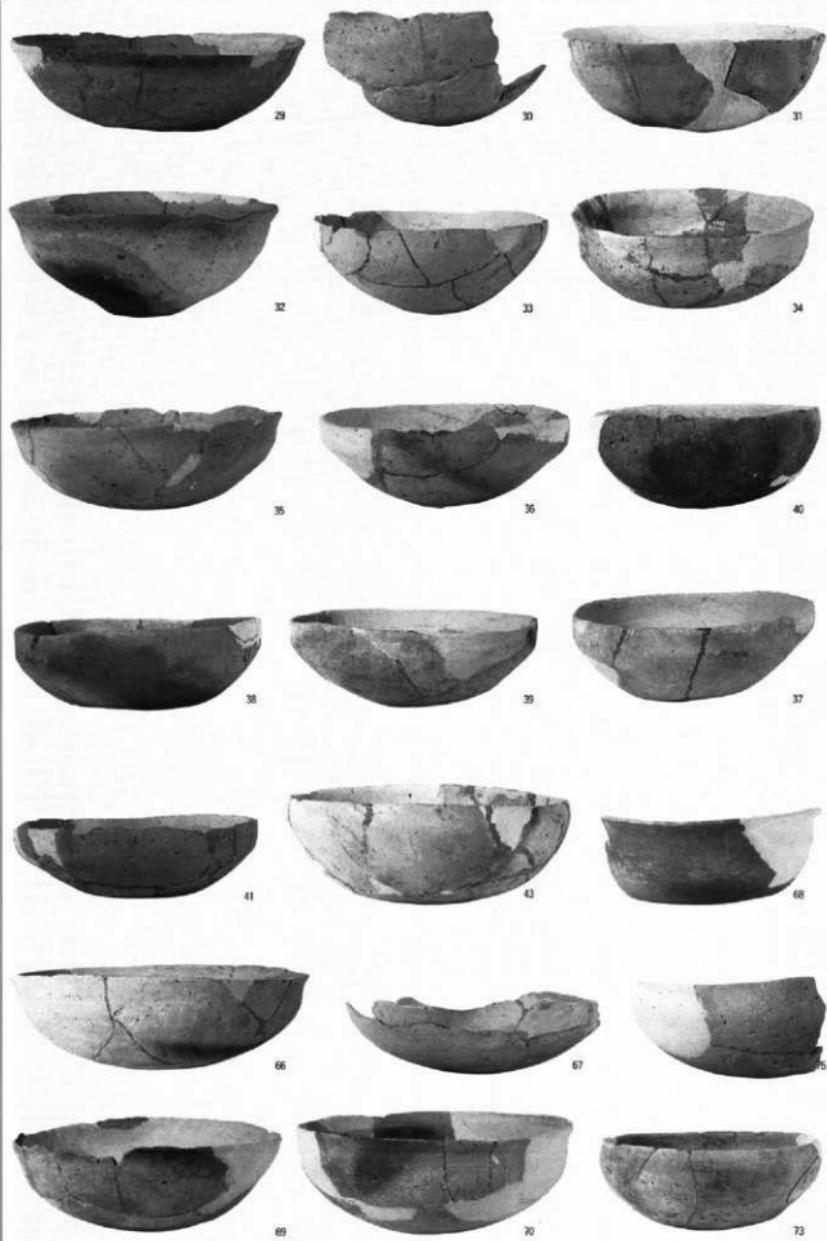
E P 195土層断面（南東から）

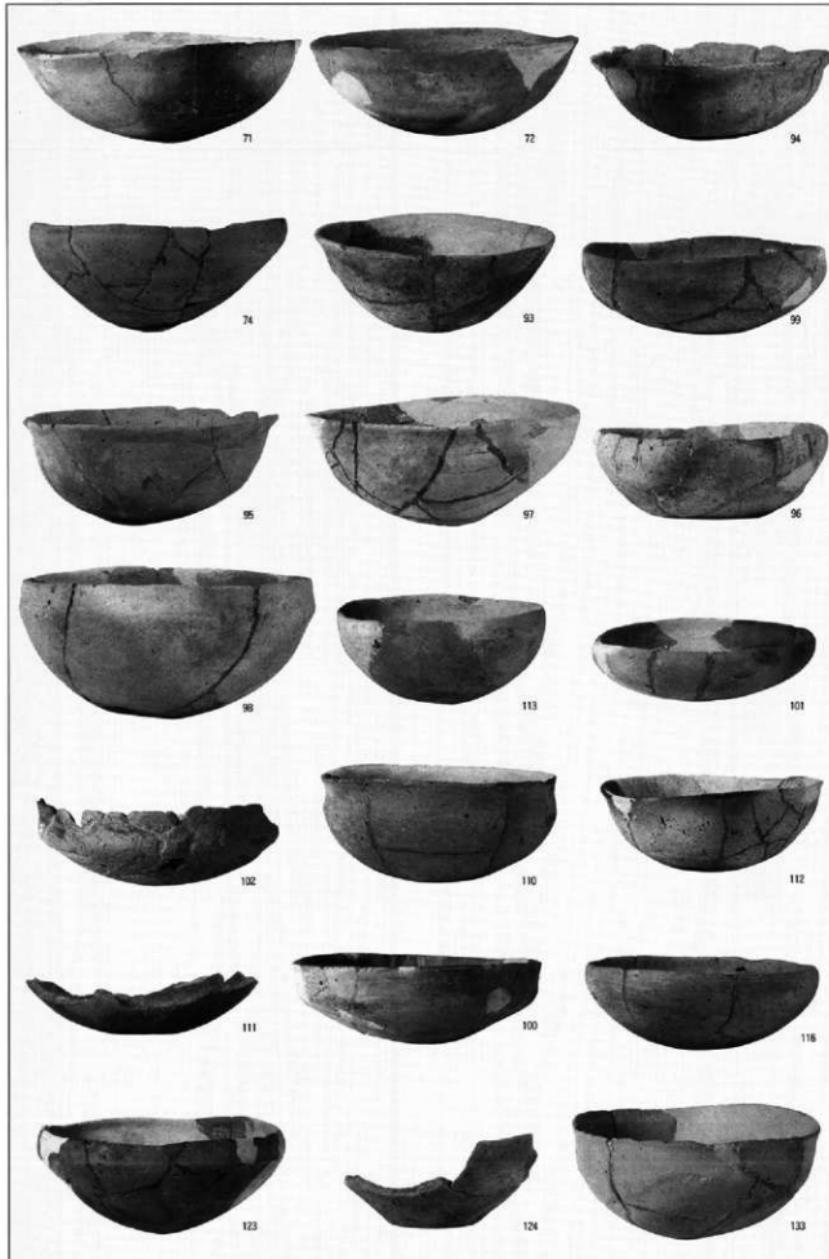


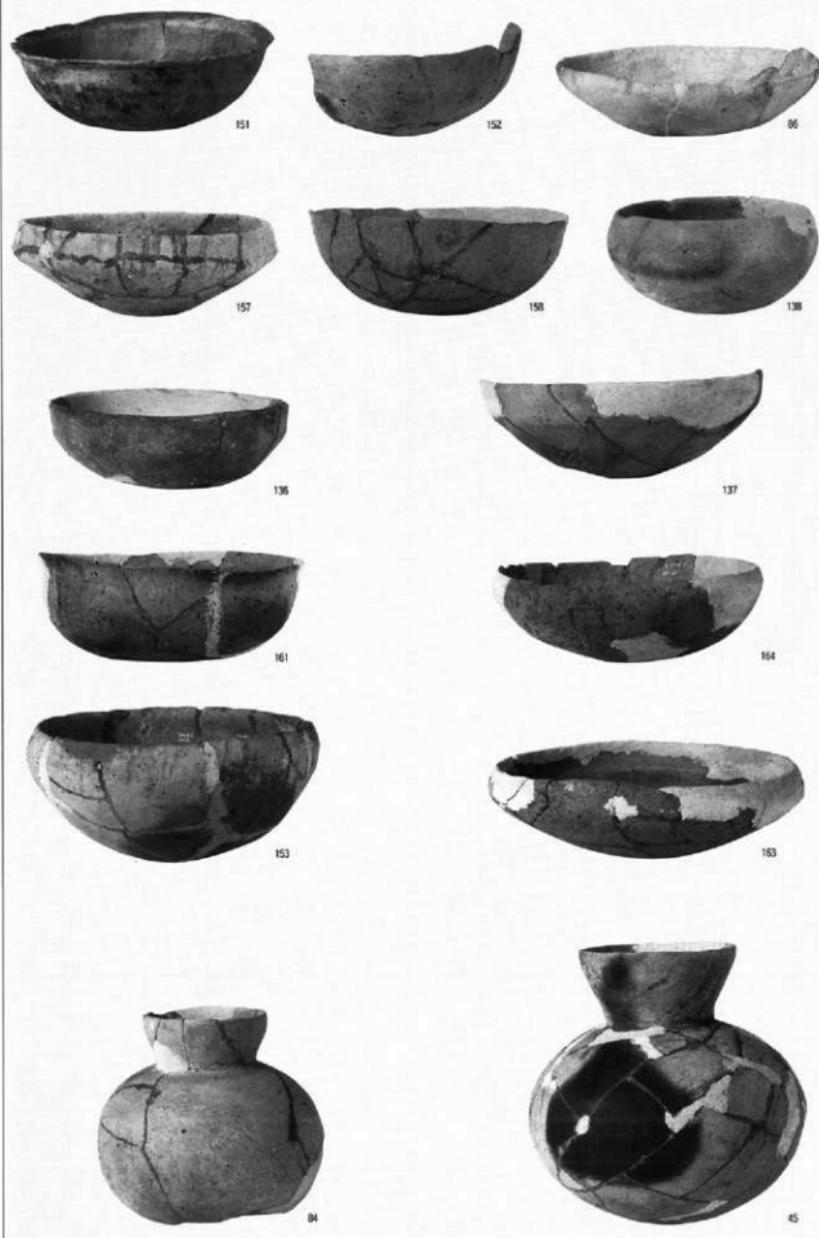
畝状造構（東から）

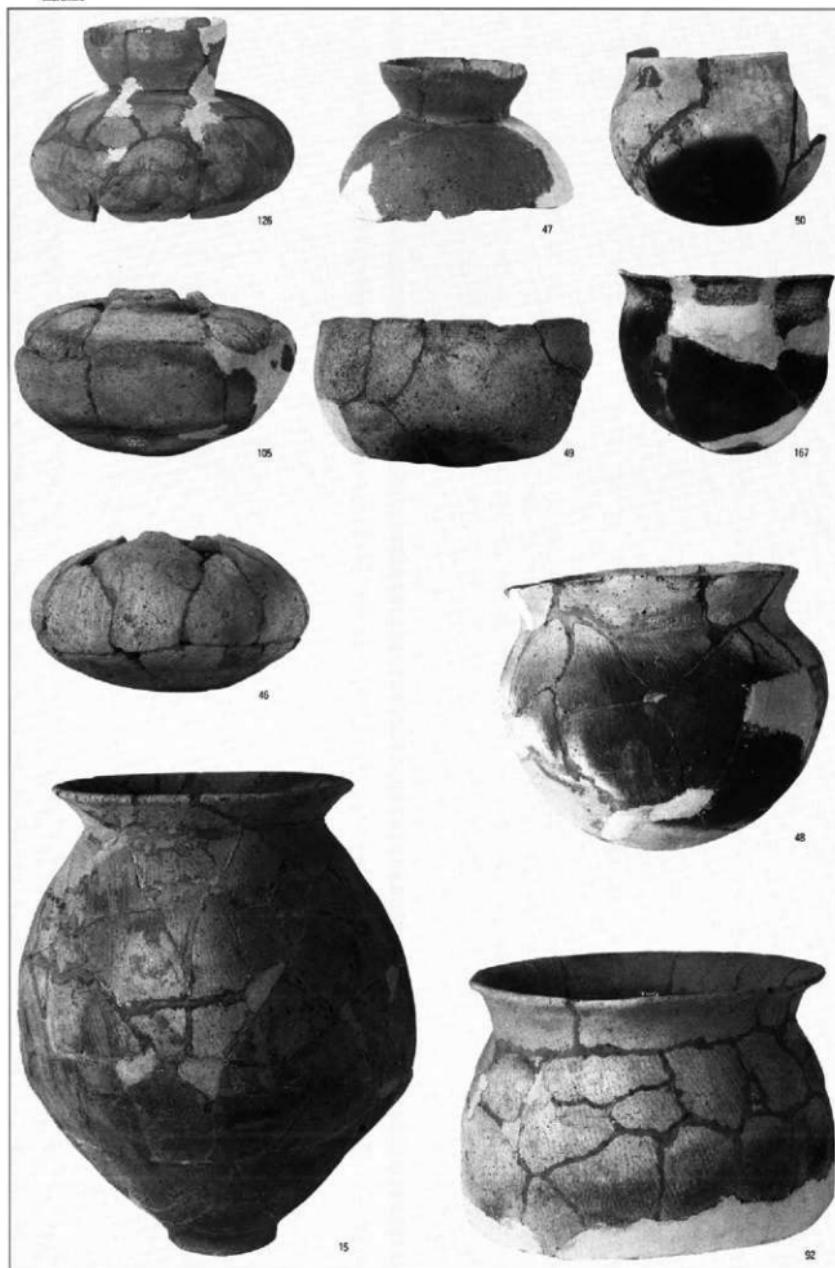








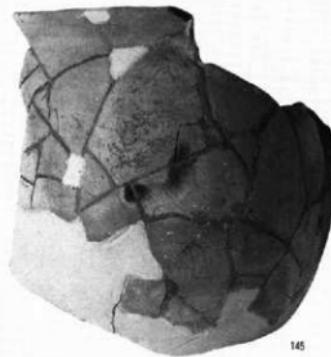












145

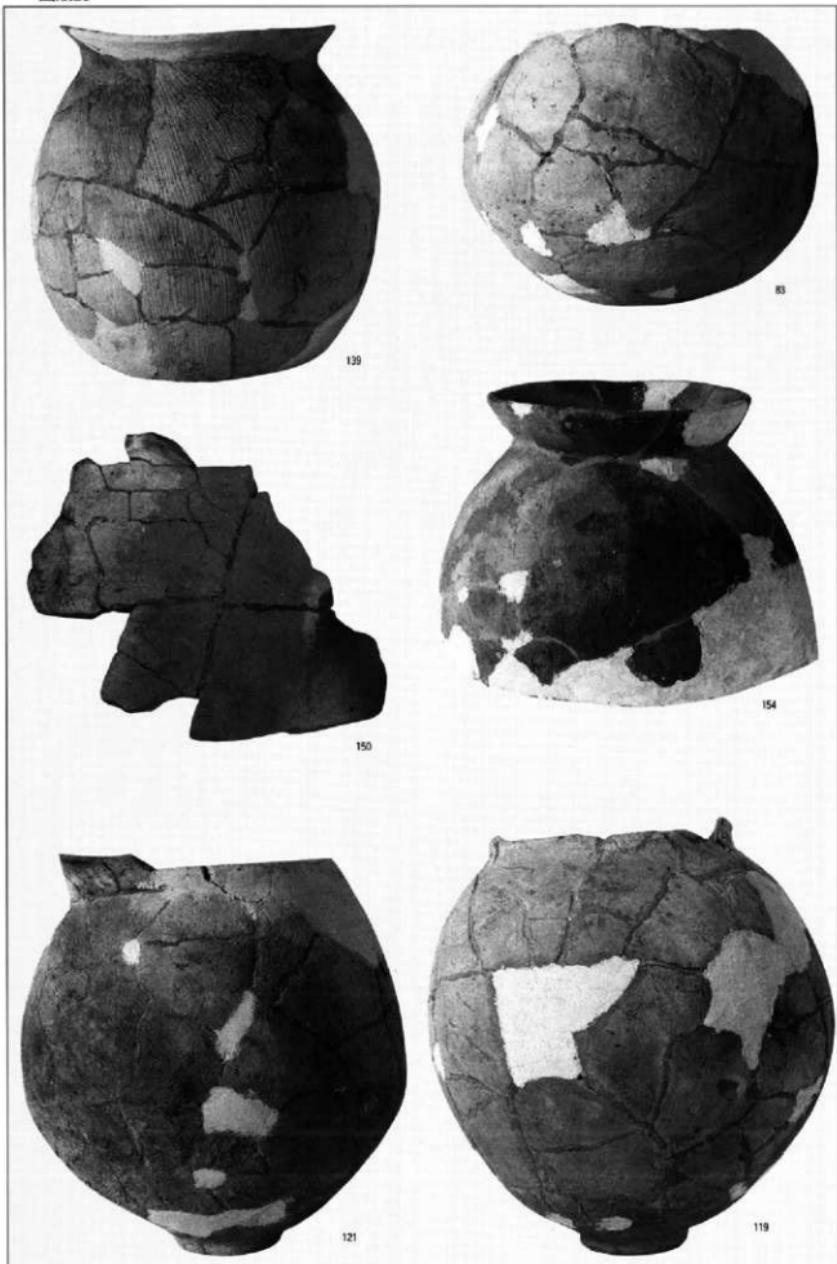


146



147







127



44



103



76



77



78



79



80



81



13



53



14



104



143



107



52



156



56



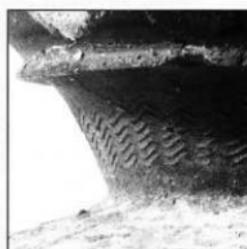
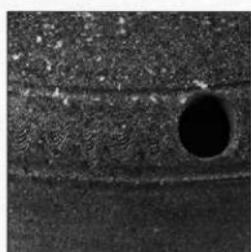
131

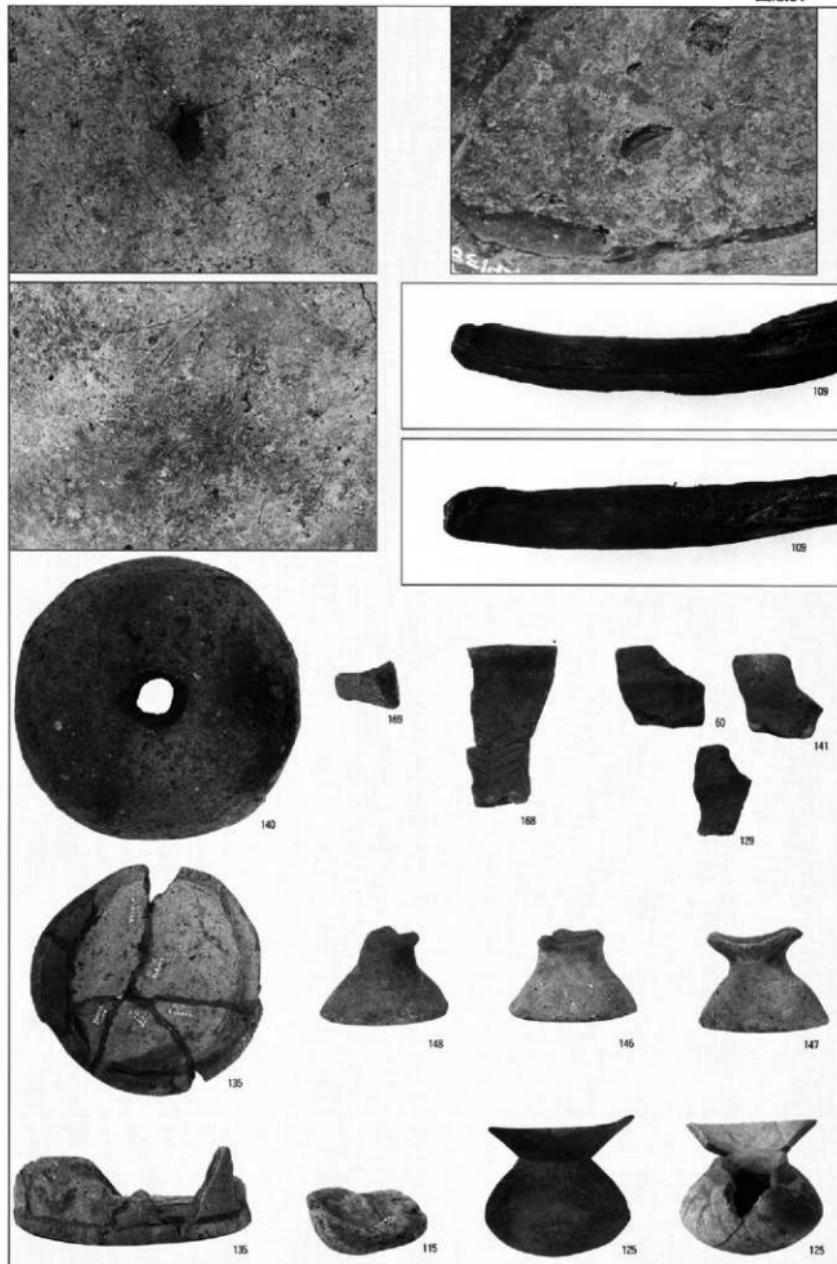


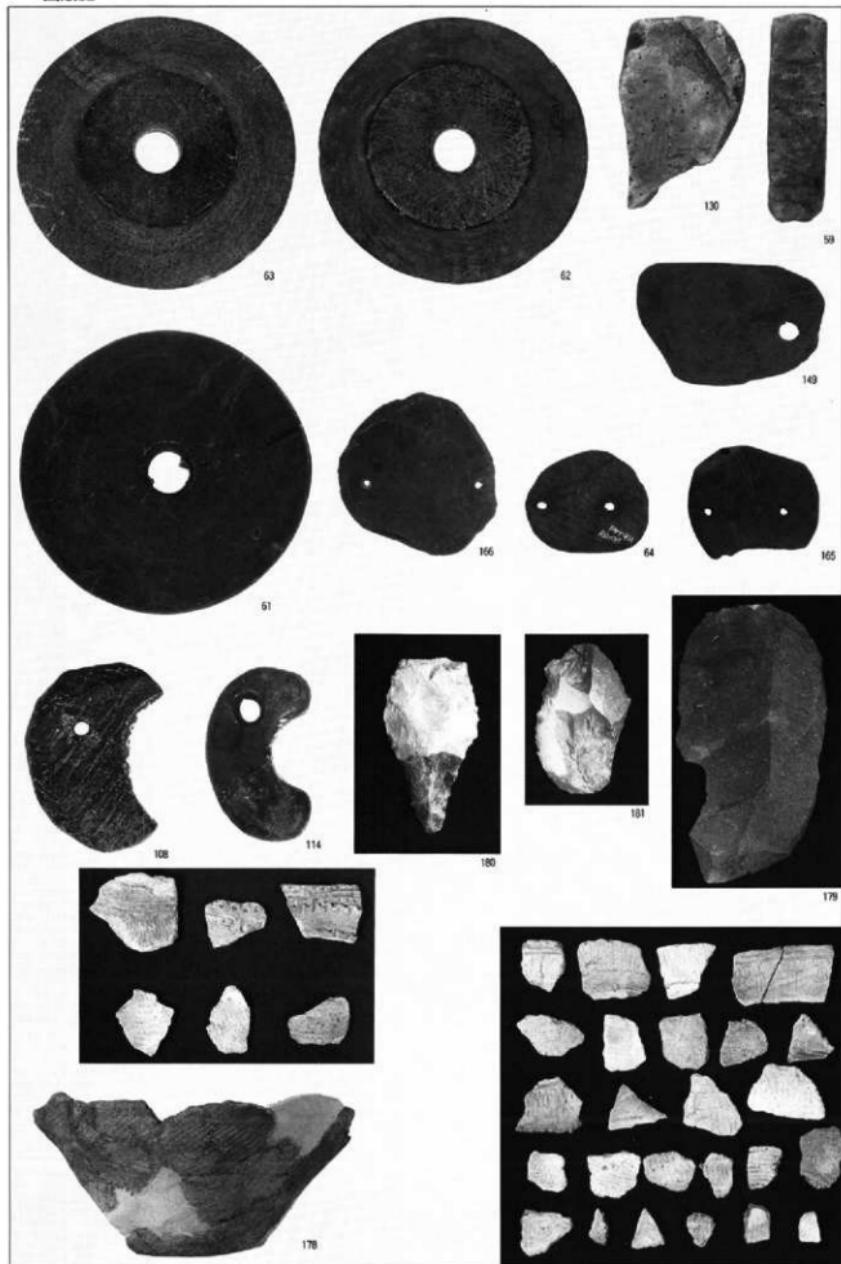
55



128







付 編

下柳A遺跡出土の大型植物化石

吉川 純子（バレオ・ラボ）

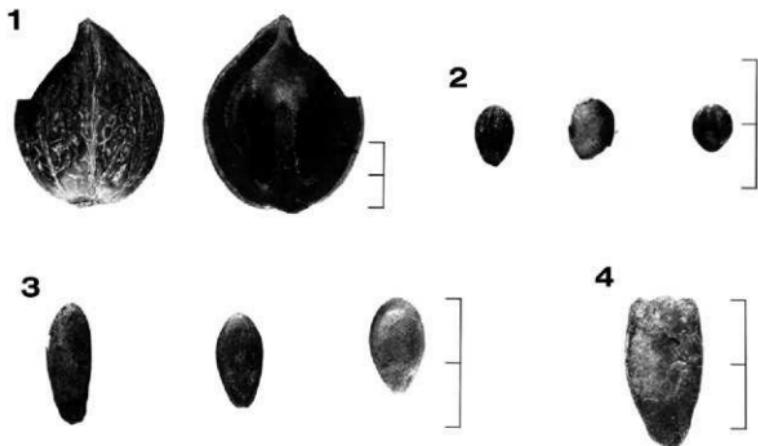
試料はすべて現地取り上げされたもので産出状況等も不明なため、ここでは出土した大型植物化石の記載のみ以下に示す。

サンショウ (*Zanthoxylum piperitum* (Linn.) DC.) : 試料RN120、完形の内果皮13個であった。内果皮は側面観が橢円形から広卵形、上面観は太い凸レンズ形、壁は堅くやや厚く黒色でやや細かい網目模様がある。一側に溝状のへそがある。現在、香辛料として用いられている。

キュウリ属メロン仲間 (*Cucumis melo* Linn.) : 試料RN120、完形の種子が38個、破片が31個であった。下端が鈍形の逆水滴型で扁平、壁はやや薄くやや柔らかく、黄褐色で表面には大変細かい網目模様がある。キュウリ仲間とメロン仲間は外形での区別は難しいが、表皮の模様がメロン仲間では正方形に近いのに対し、キュウリ仲間では長方形に近く、ここで出土したものは正方形に近い。長さは最短の種子が6.5mm、最長の種子が9.5mmで、7.3mm前後の種子が多く、現生ではシロウリの大きさに匹敵するが、メロン仲間には雑種が多く、種子の長さや幅には同一個体内でも開きがあるため、変種の決定は困難である。いずれにしても食用にされたものであろう。

ヒョウタン (*Lagenaria leucantha* var. *gourda* Makino) : 試料RN120、完形の種子1個と破片2個であった。種子は扁平だがやや厚くやや堅く、いびつな逆水滴型で両側に帯状に2本の筋がある。上端は平らで2カ所がくびれ、下端は鈍三角形である。形がよく似たユウガオは上端の肩がかなり張って全体にごつごつしている。現在は食用にされずに容器として利用されている。

オニグルミ (*Juglans ailanthifolia* Carr.) : 試料RN154、半分で割れたある内果皮が1個であった。完形は球形から橢円球形で上端が鋭く尖るものが多く、縫合線から2つに割れやすい。壁は緻密な木質で大変堅く、場所により厚みに差があり、力を加えると鋭い面に割れる。内部は4室に分かれ。子葉は脂肪を多く含み、食用とされる。



1. オニグルミ、内果皮(RN154) 2. サンショウ、内果皮(RN120) 3. キュウリ属
メロン仲間、種子(RN120) 4. ヒョウタン、種子(RN120)

下柳A遺跡出土木製品の樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. 方法と記載および結果

試料は、炭化部分を伴った火鍛杵と思われる木製品 (RW95) である。

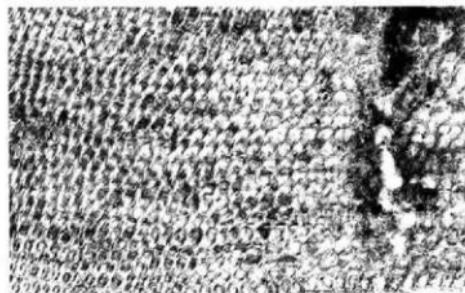
標本は、片刃カミソリを用いて試料の横断面 (木口と同義)、接線断面 (板目と同義)、放射断面 (柾目と同義) の 3 断面をつくり、ガムクロラール (Gum Chloral) で封入し、永久標本を作成する。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で 40~400 倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。以下に各標本の記載を述べる。

マツ属複維管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科 図版a~c.

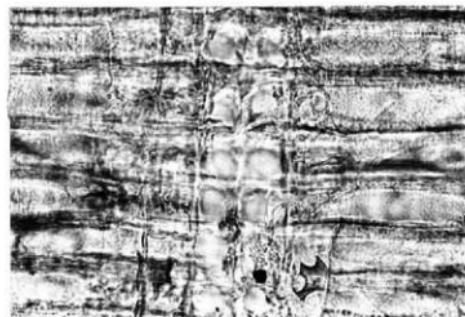
放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエビセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は急である (横断面)。放射組織のうち、柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁は、不明瞭ではあるが、内側に向かって鋸歯状に突出している (放射断面)。放射組織は、エビセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め單列で 2 ~13 細胞高である (接線断面)。

以上の形質から、マツ科のマツ属複維管束亞属の材と同定される。マツ属複維管束亞属には、アカマツ (*P. densiflora*) とクロマツ (*P. thunbergii*) があるが、放射仮道管の保存が悪いため識別できない。

図版、出土木製品樹種の顕微鏡写真



a. マツ属複維管束亞属（横断面） bar:0.2mm



b. 同（接線断面） bar:0.2mm



c. 同（放射断面） bar:0.05mm

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第38集

下柳A遺跡発掘調査報告書

1996年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 株式会社 田宮印刷所
